

捻くれた先輩

超素人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はじめまして。

初めて二次創作というものに手をだしました。

文化祭からの分岐で、いろはすと八幡が屋上で出会い、原作から大きく変わっていきます。

ほぼ、いろはす視点で進みます。いろはすっぽくねーよと思ったら怒ってください。

ただ、修学旅行などは原作通りの解消方法を八幡がとります。

キャラも崩壊してるかもしれませんが、遠慮なく文句を言って頂けるとありがたいです。

よろしくお願いします m ((m

目次

| | |
|-------------------|-----|
| ぷろろーぐ。 | 1 |
| 1. 面白そうな先輩。 | 5 |
| 2. 嫌われ者の先輩。 | 14 |
| 3. 真実を知りたい後輩① | 22 |
| 4. 真実を知りたい後輩② | 32 |
| 5. 過ぎゆく日常。 | 43 |
| 6. 運営委員は辛いです。 前編 | 50 |
| 7. 運営委員は辛いです。 中編 | 62 |
| 8. 運営委員は辛いです。 終 | 73 |
| 8. 5 先輩の気持ち。 | 99 |
| 9. 勝手な後輩。 | 112 |
| 10. 勝手な後輩。 暴走編 | 124 |
| 11. 会長候補の後輩。 | 143 |
| 12. 終わらない1日。 | 155 |
| 13. 終わってみればいい1日で。 | 170 |
| 14. 決意する後輩。 | 179 |

ぷろろーぐ。

「はあ…。葉山先輩のライブ見たかったなー。」

文化祭も終わりに近付き、そろそろ葉山先輩のいるグループが、有志でライブを行う時間。

本当なら最前列に陣取って葉山先輩の勇姿を目に焼き付けるはずだったのに…。

誰もいなかったはずの屋上の給水塔の影で、もう1人の生徒に聞こえないように呟く。私の存在には気付いてないらしい。

体育館のほうから聞こえる歓声が少し大きくなる。

おそらく、葉山先輩達のライブが始まったのだろう。

さつきまで寝てた自分を殴りたい。

今すぐにも体育館に移動したい。

なのに何故、文化祭実行委員長の相模とかいう先輩がこんな所にいるのか。

いや、ホントになんで？

そんなところで負のオーラ全開でたそがれられると、さすがに出ていきにくいんですが…。

勘弁してくださいよー！

—————

今日は、午前中に葉山先輩のクラスである2—Fの教室で、葉山先輩主演の劇？ミュージカル？を最前列で見て、うっとうしい男子達からのお誘いを軽くかわして、少し時間をつぶしてから体育館に移動するつもりで屋上にやってきた。

特別棟の屋上の鍵が壊れているのは、女子の間ではそこそ有名な話で、だいたい誰かしらいる事が多い。

噂では、めっちゃ怖い女番長のお気に入りスポットらしいし。今日は珍しく無人の屋上で、登ったことのない給水塔に登り、お日様を浴びながら、自分の事について少し考えていた。

最近、自分で自分の事がよくわからなくなってきたから。

総武高校に入ってもうすぐ半年。

入学してすぐ、葉山先輩を見つけた。

容姿は完璧。周囲からの評判もいい。ついでに頭も家柄もいらいしい。

これだけ揃っていて悪い噂の1つもない。

この人が相手なら、好きになれるかもしれないと思った。

初めての恋ができるかもしれない。今までの自分を捨てる事ができるかもしれない。

そう思った私は、葉山先輩に近づく為にサッカー部のマネージャーになった。

積極的に話しかけたし、『可愛い私』アピールもいっぱいした。

そうして近くで接してみて、この人ならという思いがもつと強くなった。

葉山先輩の事をもっと知りたいと思った。

今までそんな事を思えた相手がいなかったから、これが誰かを好きになるっていうことだと思った。

そう思っていたのに…。

気付けば、葉山先輩以外の周囲の男子にも『可愛い私』を振り撒く、過去の自分と同じ事をしていた。

大して興味もない、知りたいとも思えない相手にも、愛想をふりまく自分がいた。

小学校低学年くらいで自分の可愛さに気付いた私は、自分が少し愛想よくすれば、男の子達がチャホヤしてくれる事に気付いた。

それが気持ちよくて、いろんな人から可愛いと言われたくて。

気付けば、どんな異性相手にも愛想よく振る舞うようになっていた。

そこから、男の子が喜ぶ仕草や言動などを研究し、男の子の理想の女の子になる為の努力を、そして自分を磨く努力を少しずつ重ねていった。

そんな私を、周囲の女の子が疎ましく思っているなんて気付かずに。

小学校を卒業する頃には、同性からはかなり嫌われていたと思う。それでも、私の周りには男の子が沢山いた。

何でも手伝ってくれたし、みんな優しくしてくれた。

中学に入ってもそれは変わらず、むしろ周りの男の子は少しずつ増えていった。

私を嫌う女の子も増えたけど。

陰では好き放題言われてたみたいだけど、幸いイジメとかは1度もなかった。

無視をされたり、直接文句を言われたりとかは何度かあったけど。

でも、周りにどれだけ男の子が沢山いても、好きだと思える人は1人もいなかった。

あつちが勝手に勘違いする事は多かったけどね。

そんな私だったけど、彼氏持ちの女の子を見て羨ましいと思うコトが何度かあった。

直接話したわけでもないけど、近くの席とかで彼氏との事を幸せそうに話す女の子を見て、いいなあなんて思ったりもした。

でも、本当の飾らない私を、可愛く見せようとしないう私を、本当の意味で好きになってくれる人なんているのかな…なんて思ったりもして。

今まで不都合なコトがあったわけでもないし、むしろ男の子達はとっても便利だった。

女の子なんだから、可愛いって言われたいのは間違っていないと思うし。

でも、ありのままの私を好きになって欲しいなら、私は今までの『可愛い私』を捨てなきゃいけない。

ちゃんとした恋をしたいなら、やっぱり『可愛い私』を捨てなきゃ

いけなくて。

だから、変わりたいと思った。

恋をすれば、本当に好きな人ができれば変われると思っていた。

そう思っていたから、葉山先輩を見つけたときは運命だなんて思ってたのになあ…。

結局私は何も変わってない。

「わたしは本当に葉山先輩のこと好きなのかなあ…。」

そんな事を延々と考えていたら、いつの間にか寝てしまったらしい。

起きてスマホで時間を確認してビックリ。

2時間近くも寝てたらしい。

あれ？葉山先輩のライブってもうすぐじゃ…。

ここで大声を上げず、相模先輩を発見した私を、相模先輩を無視してでもライブを見に行かなかった私を、私は後から褒める事になる。

この後ようやく出会うのだから。

葉山先輩とは真逆で、この後起こる事で学校中の嫌われ者になり、家柄も普通な、そんな捻くれた先輩に。

でも、きつと誰よりも好きになった先輩に。

1. 面白そうな先輩。

どもも。未だに給水塔から動けない一色いろはです☆

はあ…。てゆうか委員長さまはこんなどこにいていーんですかね？

葉山先輩達のライブが最後だったと思うんだけどなあ…。

エンディングセレモニーはいーんですかね？

貴女のせいでもわたしも動けなかったんですからねっ!!

責任取って下さいね？はい、取ってくれませんかよね。

ねえーさがみーん！体育館行ってよー！

さつきから念とぼしてるのにちつとも気付かぬえ…。

そんなんだからオープニングセレモニーのあいさつもまともにできなぃんですよ？

わかってます？あれはひどかったなあ。

まあ、わたしができるかって言われたら微妙ですけど。

まあそれ以前に、絶対に実行委員長なんてやらないから問題ありません。

むしろ実行委員にすらならないまでありますねー。

あ、この言い方はまだ出てきてないひとのやつですね！

ごめんなさい!!

なんて頭の中でふざけてたら屋上の扉が開いて誰か入ってきました。

ん？入ってきた？それとも屋上だからでてきた？うーん…。

はいっ、どっちでもいーですね。

「エンディングセレモニーが始まるから戻れ。」

「別にうちがやらなくてもいーんじゃないの？」

やってきたのは男の人みたいです。

ちなみに委員長さまはわたしから見えますが、男の人は見えません。

見えるくらい動く人多分バレます。

まあでも、やっぱり委員長を探しにきたみたいです。
サボッてた？のかなあ…。

そこでわたしのスマホが震えました。やめてーバレるー。

どーやら葉山先輩も委員長を探してるみたいです。

屋上にいますよーって教えると、わたしが体育館にいないことも葉山先輩に知られちゃうので、階段登ってるそこ見たので屋上じゃないですかー？とメールしてきました。

わたし有能！

そんな事してる間も委員長と先輩（タメ語だから多分先輩）は色々話しています。

お二人の会話を聞いてると、エンディングセレモニーの開始を遅らせるために三浦先輩やあの雪ノ下雪乃先輩まで動いて、時間を稼いでるみたい。

これ早く戻らないと委員長は後々マズイんじゃない？

まあ別に知り合いでもないし、あんまり関係ないですね。

「じゃあ雪ノ下さんがやればいいじゃん。あの人もできるし。」

「あ？そう言う問題じゃねえだろ。お前の持つてる集計結果の発表とかいろいろあんだよ。」

この2人仲悪いじゃん。てゆうか、あ？って。ちよつと怖い人ですかね？仲悪くて怖い人になんて委員長探させてんの？

女の子はそんなのに着いていきませんよー。

そこから集計結果だけ持ってけよー！みたいな事を委員長が言って、先輩は黙っちゃいましたね。

どーすんの？てゆうか委員長やる気も動く気も全くないじゃないですかー！やだー！

ホントなんでいんの？

「ここにいたのか……。捜したよ」

葉山先輩キターーーーーー！！！！

わたしが委員長を心の中でdisってる間に葉山先輩が突入してきました。

最初から葉山先輩が来てくれればわたしも説得するの手伝ったの

になあ…。

で・も、わたし役に立ちましたよね？後から褒めてくださいねっ♪
うーん。やっぱり葉山先輩のこと好きなのかなあ？

そんな事考えてる間に葉山先輩も説得してますけど、あれはダメです
すね…。

デモデモダツテの構って慰めて葉山君！に馬鹿な委員長は突入し
ております。

これわたしも出ていって、葉山先輩に迷惑かけてないでさっさと行
けや！くらい言つたほうがいいですかね？

あー、葉山先輩が優しいのは分かりますけど、それじゃ絶対動きま
せんよ？

むしろあと1時間くらい葉山先輩に慰めてもらおうとか考えてそ
う。

「うち、最低…。」

あー、できました。そんな事ないよって言って欲しいだけ。

そして、葉山先輩の性格的におそらくそれしか言えない。

ほーんとめんどくs

「本当に最低だな。」

えええー！！！！！？

嘘でしょ？それ言っちゃうの？葉山先輩に怒られますよ？

折角誰よりも早く委員長を捜しあてて説得までしたのに怒られ
ちやいますよ？名も知らぬ先輩！

でもまだまだ先輩のターン！

「相模。お前は結局ちやほやされたいだけなんだ。かまってほしくて
そういうことやってんだろ？今だって、『そんなことないよ』って言っ
てほしいだけなんだろうが。そんな奴、委員長として扱われなくて当
たり前だ。本当に最低だ。」

「なに、言つて…。」

「みんな多分気付いてるぞ。お前の事なんかまるで理解してない俺が
わかるくらいだ。」

「あんだなんかと、一緒にしないでよ…。」

「同じだよ。最底辺の世界の住人だ。」

今だに顔も見えないけど、この先輩はなんてゆるかヤバイ。きつと葉山先輩も動けてない。他の人も。

今日の昼に考えた事が少しずつ頭に浮かんでくる。

チヤホヤされたくて猫を被るわたし。

今わたしの事なんて関係ないのは分かっているし、この先輩もわざとこんな事言っているんだろうけど、どーしても自分も言われているような気分になる。

そんな事を考える間もこの先輩は、坦々とそれが事実だと言わんばかりに言葉を紡ぐ。少し怖い。

どーするつもりなんだろう。

てゆるか葉山先輩はとめないのかな……

「わかってるんじゃないのか、自分がその程度の」

「比企谷、少し黙れよ」

先輩の言葉が途中で切られ、何かがぶつかるような音と、今まで聞いた事のない葉山先輩の声が聞こえた。

少し身乗り出して見てみると、葉山先輩が話してたつぽい先輩を壁に押し付けていた。

葉山先輩のそんな姿を見たのも初めてのことだった。

その後、何故か屋上でサボッてた委員長が葉山先輩に、こんな奴ほつとこう的な事を言っ出ていった。

うん、まあね、確かにひどい暴言で聞いているこつちも嫌になったけど、貴女がそれを言います？

自分はなに1つ悪くないって感じなんですわね、委員長さまは。

そして、葉山先輩と一緒にきた女の先輩方も口々にヒキガヤ？先輩の文句を言いながら屋上から出ていきました。

「…どうして、そんなやり方しかできないんだ。」

最後に葉山先輩が小さな声で告げて屋上を後に。

どーゆうこと？

ギリギリ聞き取れたくらいだけど、言い方的にはこれが初めてじゃない？

でも、ヒキガヤ先輩だつてあそこであんな事を言えば、葉山先輩に止められるのは分かつてたはずだ。

そんなやり方？全て計算のうえ？でもなんで？

あんな委員長がいなくなつてエンディングセレモニーくらいどーにでもなるんじゃないの？わかんない。

わたしは給水塔を降りる。

先輩はまだこっちに気付いてない。

あの先輩に話を聞いても、何も答えてくれないかもしれない。

後から、葉山先輩に聞くべきかもしれない。

でも、何故かこの先輩に聞いてみたい。

ようやく、顔を見る事ができた。

濁つた：ううん、失礼かもだけど死んだ魚みたいな眼で、表情もどこか苦しそうな、辛そうな。

1回深呼吸しよう。

もしかしたらわたしも酷い事言われるのかな。

がんばれ！いろは！

「あ、あのー、ひ、ヒキガヤ先輩？」

「うおお、だ、誰？え？いつからいたの？」

「あ、すいません。フフっ急に話しかけて。えーと、一応先輩が屋上に来る前から給水塔のところにいてですね。フフっあ、わたし一色いろはっていいます。よろしくです♪」

声を掛けたらすっごいビックリしてた笑

あー、最後いつもの感じで名前言っちゃった。

驚いた顔してたけど、最後にうわあつて顔する先輩。

猫被ってるのに気付いてる？

でも、見た感じ、めっちゃチョロそうだし、別にバレても問題なさそーだし、いつか♪

でも、それも一瞬ですぐに少し険しい顔になった。

「で？なんか用か？俺が来る前ってことは、ずっと見てたんだろ？なに、相模の後輩？それとも葉山？どっちにしてもお前に文句言われる筋合いもないから。」

「いや、あの、文句とかじゃなくて。なんであんな事言っただんですか？あと、葉山先輩が言ったそんなやり方ってどーいうことですか？」
「お前には関係ないだろ。つかお前はエンディングセレモニーでなくていいわけ？」

「確かに関係ないですけど、実際委員長がいなくてもエンディングセレモニーくらいどーにかなったんじゃないですか？あと、お前お前つて、わたしさつき名前言いましたよねえー？」

「それこそ文実でもないお前に関係ないだろ。色々あんだよ。それに、どーせ関わらないし、名前覚えても意味ないだろ。じゃ。」

「ちよつ、ちよつと待っててくださいよー。こーんな可愛い後輩とお近づきになれるかもですよー？」

箸にも棒にもかからないってこんな感じ？

全く相手にされないし、本気でわたしに興味なさそう。

つい先輩のシャツを掴んでしまった。

まだ何も聞けてない！

「あざとい、んでうざい。つか離せ。あとお前みたいな可愛いとは言わん。俺文実だから体育館いかないとまずいんだよ。ほら離せ。」

「むー」「あざとい」あざとくないですう。とりあえずわかりました。でわ体育館に向かいながら話しましょう。せーんぱい？」

ふふふ。人のことあざといとかうざいとか言っておいて簡単に逃げれるつもりなんですかねー？この先輩は。

「あー、多分やめたほうがいいぞ？すぐに俺の悪評とか噂とか広まるだろうし。一緒に歩かないほうがいい。それに俺もお前と一緒に歩きたくない。お前目立ちそうだし。」

「んー、でも生徒はほとんど体育館にいるはずですし、大丈夫だと思いますよー？もし誰かいても知らない人のフリしますし。わたしも先輩みたいな眼が腐った人と、ひとけのない特別棟を2人で歩いてることか見られたら何言われるかわかりませんし。」

「はあ…。だったら最初から別々に行きやいーだろ。それに知らない人のフリじゃなくて、俺はお前なんかしらん。だからその仮定に興味なんてない。」

「頑固ですねー。ほら行きましよう。行かないんですか？はっ、もしかしてそうやってわたしが手繋いで連れて行くの待ってます？そーいうのほんと気持ち悪いんで無理です。ごめんなさい。」

「あざとい。長い。うざい。なんで俺が振られたみたいになってんだよ。意味わからん。」

「ちよっ、ひどくないですか？でも先輩根暗であんまり喋らなそーなのにつっこく喋るんですね？」

「なんだかんだ会話はしてくれるけど、さっきの事についてはなんにも教えてくれません。あ、勝手に行かないですよ。」

「しょうがないのでとりあえずわたしも後ろを付いていきます。」

「少し驚いたのは、この人とはすごく喋りやすい。」

「あざといとか言いながらもちゃんと聞いているし、先輩も変に取り繕うような感じもない。」

「クラスの男子なんて話してて下心しか感じないもんなー。」

「気持ち悪い。」

「んで？一色って言ったか？結局お前なにがしたいの？」

「……え？せんぱい、名前ちゃんと聞いてんですねー。ふふっ。実はわたしに興味深々だったりしますー？あ、それとほんとに屋上でのこと知りたいだけですよー。んーもしかして葉山先輩と元々打ち合わせとかしてました？」

「とりあえずめんどいから前半は無視な。あと打ち合わせなんかするヒマあるわけねーだろ。打ち合わせしなくても葉山隼人なら動くだろ。あの場面で何もしないならそれはもう葉山じゃない。」

「へー。じゃ先輩は最初から葉山先輩が動くのを計算に入れて、あの暴言を吐いたんですね。じゃあどこからが計算なんですか？」

「それお前が知ってどーすんだよ。答えなきやダメか？」

「んーできれば知りたいです。知ってどーするって言われたら、知りたいと言えませんが。強いて言えば、せんぱいのこと知りたいってのじゃダメですかー？」

「あーはいはいあざとい。さっきも言ったろ。今後関わらないから知る必要もない。」

「今のはわりかし本音ですうー。それに関わらないかどうかはわからないでしょ？未来のことなんてだーれもわかりませんし。」

「大丈夫だ。お前みたいな女子とは関わりたくないって決めてるから、問題ない。むしろ、関わりそうになっても逃げる。」

「むーおーねーがーいーしーまーすー。」

「おい離せ。あざとい。あと近い。右腕を揺らすな。はあー…。わかった。分かったから離せ。離してくださいお願いします。」

「はあ…。もう体育館着くから簡単にな。最初から、相模からすれば、俺なんてお呼びじゃない。じゃあ誰だったらってなると、それこそ葉山だろ。だが、おそらく葉山だけではデモデモダツテで動かない。あいつは相模に厳しい言葉なんてはけない。だったら、ベストなのは俺みたいな噛ませと葉山みたいヒーローが一緒にいるのが1番だろ。時間もなかったし、それは葉山も分かってたはずだ。だから、葉山が俺の次にきて、相模が愚図りだした時点であの方法でしか相模は動かせない。これでいーか？今日は喋りすぎて疲れた。」

「もう体育館着いちゃいますね。最後に1つだけ。先輩さつき屋上で先輩の悪評とか噂が広まるって言ってましたけど、そこまで分かってなんでそんな事を？あ、あとなんでそこまでして委員長を戻すことにこだわったんですか？」

「お前それ2つじゃねーか。まあその答えは2つとも同じだ。仕事だからだ。もっと言えばあそこでそれができたのは俺だけだから。まあ葉山がいねーと成り立たねーけど。」

「うーん、分からないけどわかりました。あ、ちょうどエンディングセレモニー始まりますね。ではまたでーす。あ、せんぱい！仕事だからっていうなら言っときますね。せんぱい、文実のお仕事最後までお疲れ様でした。」

「あざといんだよ。まあ、なんだサンキュ。まだ終わってねーけど。」
敬礼してる私に最後にまたあざといって言いやがりました。

先輩って実はホモなんですかね？キモいです、先輩。

でも、最後にサンキュって言ったときの顔はちよつと優しい顔して

ました。

屋上で初めて見た顔よりはだいぶよかったです。

もし、先輩が言ったように悪評や噂が広まれば、火曜日からの先輩はどうなるんだろう。

エンディングセレモニーで挨拶してる委員長を見たけど、先輩と葉山先輩がいなければ、そこにはもしかしたら別の人が立っていたかもしれない。

そう考えると、委員長はむしろお礼を言うべきなんですけどね。きつと分かってないんだろうなあ。

先輩はまだ文実として、後片付けなんかするのかな。

もしかしたらすでにそこで文句を言われたりするかもしれない。

でも、優しい葉山先輩ならきつと助けてあげるんだろうなあ。

できれば、そうなってほしい。

先輩はきつと今まで私が出たことのない人種だ。

なんだかんだ私を心配したような言葉もあった。

本当は優しい人なのかな？

まだ全然知らないし、先輩の考えが分かったわけでもない。

でも、一緒の校舎にほぼ毎日いるんだから、また会えるはず。

きつとまた嫌そうにするんだろうなあー。

ふふっ♪もしかしたらいい出会いなのかも。

次会えるの楽しみにしてますねー、せんぱい。

2. 嫌われ者の先輩。

日曜日をゆっくり過ごし、代休の月曜日はサッカー部の練習のため学校へ。

文化祭のあとなんだから休みでいーじゃんとか思いながら、ヒキタ二君、ヒキタ二君うるさい戸部先輩を横目にマネージャーの仕事をこなし、少しの腹立たしきを感じながら帰路についた。

私の願い届かず（願いつていうほどでもないけど）、先輩の悪い噂は驚くようなスピードで学校中に広まっていた。

文化祭後のクラスの打ち上げでは、既に噂されていたくらいだから、かなりの早さだと思う。

そんな噂とかを聞きたくなかったから、葉山先輩が企画した後夜祭には行かなかったのに。

先輩的には予想通りなんだろうけど、どおするつもりなんだろう。

そして休み明けの今日。

午前中は全て文化祭のクラスの撤去作業にまわされる。

そんな中、やはりクラスの話題は先輩の噂についてだった。

先輩だいたいじょうぶかな。

まだ出会って3日。

話したのもとても短い時間だけど、あの屋上での真相を全て知っている私にとって、先輩だけが悪のように噂されているこの状況はなかなかムカつく。

朝からクラスの男子が、わざわざご親切に私に挨拶をするついでに噂の事を話しにきてくれた。

あーはいはい、情報速いオレカッケエ。

こいつは今後無視しよう。

『2年のヒキタ二は文実をめちゃくちゃにした挙句、委員長を屋上に呼び出し、暴言を吐いて泣かせ、葉山先輩に殴られた』

色々言っていたけど、要約すれば多分こんな感じ。

うーん。文実の件はわかんないけど、あっているのは暴言のところに

らい。本当にいい加減だと思う。

何も見てなくせに、むしろ先輩のことすら知らなくせに噂だけはどんどん拡散されていく。

余計な尾ひれまでつけて。

私もあの時屋上にいなければ、同じように面白がって噂だけを信じていたのかもしれない。

もしかしたら、あの葉山先輩に殴られた先輩を見にいったりしたかもしれない。

私自身、勝手な噂を流されたこともあるけど、周りが飽きるのを待つしかないと思う。

下手に反論したりすれば、その事をまた面白がって噂される。

葉山先輩は、全ての真相を知っていながらなにもしていないのだろうか。

確かに広まった噂を止めるのは無理かもしれないけど、あの葉山先輩が庇えば、もしかすると少しでも良い方向に傾くかもしれない。

そんな事を考えながら、いつも通り男子達をうまく使い、作業をする振りをしながら噂に耳を傾けていたら、いつの間にか午前も終わり昼休みに入った。

弁当を忘れてしまった私は、パンを買うため購買に向かう。

知り合いの男の子にパンをゲットしてもらい、教室に戻ろうとしたとき、少し先にちよつとだけ見覚えのある背中を見つけた。

男の子に適当に礼を言っつて、ばれないように追いかける。

噂の渦中にいる先輩に、こんな人集りのなかで声をかけるのはちよつと厳しい。

人違いかもしれないし。

先輩にバレる事なく尾行していくと、特別棟の一階、保健室横のスペースに先輩が腰をおろした。

周囲に人影はない。

唯一テニスコートで練習の準備をしている人がいるくらい。

ここなら声をかけても大丈夫かな。

「せんぱいこんにちわー。また会いましたね」
「……」

完璧に無視されました。

こちらに視線さえもよこさない。

先輩しかいない事なんてわかってるくせに。

「えーと、ヒキタニ？ヒキガヤ？先輩。無視しないでくださいよー」

「別に無視したわけじゃない。先輩なんて俺以外にもいっぱいいるた
だろ。で、誰？あとヒキガヤな。」

わざと言ってますかね、この人。

この前そこそこ喋ったのに、まさか憶えられてもいないなんて。

こっちはそれなりに心配とかしてたのにホントありえない。

「あんなに仲良くお話したのに忘れるなんてヒドくないですかあー？
先週屋上で会ったじゃないですかー。一色です。一色いろはでー
す。」

「ああ…、あのあざといやつか。で、なんでこんなとこいんの？」

「購買で見かけたんでつけてきました。ちよつとお話しません？」

「断る。話すことなんかねえだろ。だいたいこの前お前の質問には
ちゃんと答えてやったろ。わかったら戻れよ。俺飯食いたいんだけ
ど。」

「えー、いーじゃないですかー。わたしもパンなんで一緒にたべま
しょうよー。それに先輩にはなくてもわたしには話したいことがあ
るんですうー。」

「あざとい。お前がいかないなら俺がどっか行くわ。じゃ。」

そう言つて本当に立とうとする先輩。

なんでこんな私に対して態度悪いんですかねー。ムカつく。

咄嗟に先輩のシャツを掴み、逃走を阻止。

よし、本気だそう。

涙目、上目遣いで、くらえ！

「ダメ…ですか？」

「うぐ…。あ、あざとい。ちよーあざとい。」

むー、いろはちゃんの本気を簡単にあざといとか。

でもばれてますよ？ちよつと効きましたよね？顔赤いし♪

「ふふっ♪正直に可愛いって言っていーんですよ？せーんぱい。」

「あーはいはい。ちよーかわいーよーやばいわー。で、もう行っ
ていい？」

「うわっ、うぎー！せめてもう少し心込めてくださいよー。あ、行っちゃ
ダメです。てゆーか先輩が座るまで離しませんから。」

「はあー…。なんだよ？また文化祭のことか？それとも葉山か？俺あ
いつと仲良くねーから何も知らんぞ。」

「文化祭っていうより噂についてですかね。あとわたしサッカー部の
マネージャーなんで、先輩より葉山先輩と仲良いと思いますよ。」

「噂？お前も屋上いたんだから知ってんだろ…。」

そう、そこじゃない。私を知りたいのは文実のほう。

あとは先輩のいまの教室とかでの状況。

「なんか文実をめちやくちやにしたとかいう噂もあるじゃないです
か？聞きたいのはそっちです。あと、一応、せんぱいは大丈夫なの
かなーとか…。」

「ああ、そんなんも流れてんのな。屋上の件だけかと思ってたわ。お
前はそんなん知ってどうしたいの？誰かに確かめてこいって頼まれ
たのか？」

「知らなかったんですね…。んー頼まれたとかじゃなくて、わたしが
知りたいんですよ。やっぱり屋上での真相を知ってるから、嘘ばっか
りの噂聞いとると腹立ちますし。」

「なんでお前が腹立ててんだよ…。文実の件は、俺がやらかしたのは
事実だよ。仮に嘘だったとしてもどーしようもないだろ。」

「でも、文実をめちやくちやになって、なにやらかせばそんなことになる
んですか？相当なことしないと先輩1人でそんなことできませんよ
ね？」

「お前にそこまで話す必要ないだろ。つかその内その辺のことも噂で
流れるんじゃないの？知らんけど。もういいか？」

「教えてくれないんですね…。わかりました。自分で調べます。」

「それはヤメろ。お前が何のつもりで知りたいのかは、この際どうで

もいい。変に誤解されて巻き込まれても知らんぞ。」

「その辺はうまくやりますよー。なんですか？もしかして心配してくれてるんですか？はっ、ずっと素っ気なかったくせに急に優しくしてお前に気があるアピールですか？せめて葉山先輩くらいになつてから出直してきて下さいごめんなさい。」

「うぜえ…。なんで振られてんだよ…。しかも葉山とかどう考えても無理ゲーじゃねえか。心配とかじゃねーよ。勝手に巻き込まれて、後から文句言われるのがめんどくさいだけだ。」

「そんなことしませんよー。せんぱい、クラスとかでは大丈夫なんですか？その、いじめとか。」

「この短時間でいじめにまで発展したら怖いわ。まあ大丈夫だろ。葉山いるし。あいつはクラスでいじめとか許さんだろ。まあ、相模とその取り巻きがうざいくらいだ。むしろ、クラスの奴らはこの件でようやく俺を認識したまである。」

「うわあ…。せんぱい…。普段どんだけ影薄いんですか。てゆうか葉山先輩も委員長も同じクラスなんですね。だからこんなところで1人でご飯食べてるんですか？」

「ひくなよ…。しかも人のベストプレイスをこんなところって…。ここで飯食ってんのは1年の頃からだ。めっちゃいいところだろ。静かだし、気持ちいい風吹くし。それに、ボッチには教室に居場所なんてねーんだよ。」

ボッチなんだ……。

でも、だとしたらクラスに味方とかいないんじゃないのかな。

しかも委員長も一緒。

先輩は精神的にキツくないんだろうか。

「ベストプレイスってなんですか？キモいです先輩。まあいい所だとは思いますが。でもホントに大丈夫なんですか？そんな状態で。今までもボッチだったなら、今はもつときついんじゃないですか？」
「別に。慣れてるからな。小さいころからずっとボッチだし、周りから悪意向けられるのも俺にとっては普通だ。むしろ、高校入って今までなかったのが異常だ。なに？お前こそ心配してくれてんの？」

「それが普通の事のほうが異常だと思えますよ…。心配というか、さつきも言いましたけど、他の人よりはホントの事知ってますから。せんぱいだけが悪いみたいと言われるのは納得いかないって感じですかね。」

「ふーん。意外といい奴なのな、お前。男なんて道具くらいにしか思ってたさそうなキャラなのに。まあ俺は大丈夫だ。でも、なんだ、その、サンキュな。」

「……。はっ。な、なんですか急にそんな優しい顔して急に素直にお礼言うなんて。もしかしてわたしにほれちゃいましたか？せんぱいと付き合うとかホント生理的に無理です。ごめんなさい。」

「生理的にとか…。もっとオブラートに包めよ。泣くよ？泣いちゃうよ？俺は1日に何回お前に振られるんだよ…。しかも告つてもないのに……。」

「泣くのはさすがにやめてくださいキモいんで。まあいーじゃないですか。こーんな可愛い後輩から振られるなんて、Mっぽい先輩にはご褒美じゃないですか？」

「だから…。はあ…。まず可愛くないし、あざとい。あと俺はMじゃねえ……。」

「あざとくないですよー。せんぱいって実はホモですか？わたしで可愛くなかったらその辺の女の子なんてほとんどブスって事になりますよ。」

「おいそれだけはヤメろ。マジで。あとあざとい。お前絶対女子に嫌われてんだろ。そのうちお前のほうがいじめられそうだよ。」

「まあ、見た目よくてこんなキャラしてたら、そりゃ嫌われますよ。先輩と同じです。もう慣れましたし、それが普通です。それにせんぱいだって嫌いっぽいですよ？屋上でも関わりたくないみたいなこと言ってますし。」

「別に嫌いになるほどお前のことなんて知らんし、お前みたいな女子が苦手ってだけだ。それに、俺には他人に好かれるための努力なんかできねーからな。そこは素直にすげえと思う。あ、口説いてねーから。勝手に振るなよ。」

「なんで先読みしちゃうんですか？はっ、もしかしてお前の事は理解してるぞアピールですか？会ったばかりのくせ「あーはいはい」って最後まで言わせてくださいよー。」

「だって俺が傷つくだけじゃん。まあお前みたいな奴に騙されて、勘違いして作られた黒歴史がいつばいあるからな。お前を理解してるとかじゃない。断じて。」

「黒歴史ってなんですか？キモいですよせんぱい。でも、さっきみたいなこと言ってくれる人って今までいなかったんで、それは素直に嬉しいです。ありがとうございますせんぱい。」

「……」

「どうかしました？」

「い、いや、なんでもない。」

「なんですか？教えてくれたがいよー。」

「あー、なんつうの？アレだよアレ。お前猫被る必要あんの？」

「それってどーいう…はっ「口説いてないから」だから言わせてくださいよー。ふっせんぱいもあざといですよ？」

「あざとくねーよ。てかお前パン食べないの？昼休み終わるぞ？」

「あー、せんぱいのせいですからね!!!」

完全に時間を忘れてました。

あとちよつとしかないじゃん！

でもそれだけ楽しかった、のかな？

それにさっきのも、最後のも嬉しかった。

でもせんぱい？気付いています？

慣れてるとか普通って言ってましたけど、少しだけ表情険しくなっていましたよ？

ホントは辛いんじゃないですか？

嘘を付いてるとかじゃないんだろうな。

慣れてるから、それが普通だからしょうがない。

そんな風に思って傷ついてる自分を見ないようにしてるのかもしれない。

私だって、自分の事を好き勝手に言われてるのを聞けば、嫌な気持

ちにくらいなるし。

きつと私にはどうすることもできない。

先輩を昔から知ってるわけじゃないし、先輩の友達とか仲の良い先輩とかでもない。

私にできることと言えば、よくて話を聞くくらいだと思う。あんまりというか大事なところは何も教えてくれないけど。

だったらせめて理解したいと思った。

先輩は迷惑だって言いそうだけど。

でも、ちよつとだけがんばってみよう。

まずは、文実と文化祭のことから。

葉山先輩は最終手段。屋上で隠れて聞いてたことあまり知られたくないし。

だから、まずは自分のクラスの実行委員かな。

誰がやったのかさえわかんないけど。

やつとパンを食べ終わり、それと同時に先輩が立ち上がる。

もしかして待っててくれたのかな？

あ、そんな事なかった。

「じゃな」って言って行っちゃった。

むー最後そんだけですか？

この距離なら声かけても目立たないよね？

よし！気合い入れて…

「せーんぱいー！またですー！」

ふふっ♪できればまた明日です。せーんぱい。

3. 真実を知りたい後輩①

「ふあ~~~~」

おはようございます！

一色いろはです。寝起きです。

今日は忙しくなる予定です。

まず、朝のうちにクラスの文実が誰だったのかを調べ、話が聞けそうな相手なら、休み時間に話を聞いちゃいます。

男女1名ずついるはずですが、女子には嫌われてるし、勘違いしちゃうような男の子もめんどくさいなあ。

自分のクラスが無理なら、違うクラスかな。

まあ男の子の知り合いはいっぱいいるし、大丈夫だよ。

昨日先輩は、自分がやらかしたと言っていましたけど、具体的に何をしたかとか、やらかした理由とかは一切教えてくれなかった。

もう少し先輩の考え方とかわかれば、予想もたてられるんだけどなあ。

でも、まだお話した時間も1時間もないし、これからだよ。

てゆうか、先輩が無駄な話ばかりするからいけないんだよ。

☆今の時点での先輩情報☆

- ・口が悪いけど、たまに素直（捻くれてる？）
- ・たまにあざとい（デレてる？）
- ・昔からずっとボツチ（いじめられてたとか？）
- ・意外とちよろくない（黒歴史がどーのこーの）
- ・仕事ならなんでも？する（見た目は引きこもり）
- ・死んだ魚の眼（ほかのパーツはなかなか）
- ・葉山先輩と相互理解？（でも仲良くない）

他にもありそうだけど、こんな感じかな。

ここから導きだせる答えは……うん、わからん。

「いろはー、時間大丈夫？」

「ふえ？や、やばい。やばーい。」

おかあさん。もう少し早く呼んでよー！

歯磨きと洗顔して急ピッチで髪・化粧を整える。
鏡の前でにっこり☆

うん。だいじょうぶ。今日も可愛い。

今日は弁当忘れないようにしなきゃ。

あーもう、せんぱいのせいだー！

今度会ったらパンチしよ。

「いろは朝ごはんはー？」

「おかあさんごめん。今日はいいや。行ってきます。」

おかあさんの返事は待たずに家を出る。

学校に着いてから、15分は欲しい。

朝ごはんは犠牲になりました。よし行こう！

結局20分くらい余裕ありますね。

文化祭の準備期間などで部活ができなかったため、今週いっぱい

サッカー部の朝練はありません。

あー来週からまた早起きだ…。

そんな事を考えながら、憂鬱な気分になっても男の子達は構わず寄ってきます。

1番楽なのは5人くらい寄ってきたときにまとめて挨拶してあとはスルーですね。

「あ、皆おはよおー♪昨日は作業手伝ってくれてありがとうおー♪」

はい、完璧。

あんな奴らいろはちゃんの手にかかれば楽勝ですっ！

あ、ittaいた。

昨日の自称・情報通男子。

あつちも気付いた。

「おはよおー♪あの噂ってさ、何か新情報ない？」

「あるよー！いろはちゃん調べてんの？」

したの名前で呼ばないで欲しい。切実に。

まあ、今のところしたの名前を呼び捨てするのは葉山先輩ただだからオーケー。

「調べてるっていうかあー、葉山先輩も殴ってないのに殴ったことに

なってるらしいからさあ…。それで、先輩達はその噂広めてる人を探してるんだよねえー。もし教師の耳に入ったら、葉山先輩が変な誤解されるかもだし…。わたしも葉山先輩が誰かを殴るなんて想像できないし。」

昨日からいろんな人にこの噂を垂れ流している、この男子には少し釘をさしておこう。

それに周りも先輩達が探してる状況で下手にこれ以上広めたりしないはず。

まあ、すでに学校中に広まってるから、あんまり意味ないんだけど。葉山先輩を盾にするように悪いけど、殴ったなんて噂流れても葉山先輩も迷惑ですよ。

もしかしたらそれすらも男らしいとかなるのかな。

「ああー、そんなことする人じゃないもんな。あの先輩。あ、それで新情報っていうのは葉山先輩に関係ある話とない話両方あるけど、どうする?」

「一応どつちも聞いとこうかな。いいかなあ?」

「いやー全然いいよー!任せてよー!」

ちよろい。

上目遣いに浮かれてないで早く話してよ、もう。

きっと先輩ならあざといの一言で終わるはず。

で、聞いた話によると、

・先輩が委員長に暴言吐いたあげく、手をあげようとしたから葉山先輩がそれを止めるために殴った

・文実でスローガンを決める際に、先輩が変な事を言っただけで会議をめちゃくちゃにした(しかも先輩は文実の仕事をサボってたらしい)

「ありがとー。やっぱり葉山先輩は悪くないんだね!あ、でもーなんか先生達が噂をとめるために動こうとしてるらしいからあんまり言いふらさないほうがいいかも…。」

「え!? そうなの? ヒキタニが悪いのに、先生達も余計なことするよなー」

「っ…。そうだねー。なんにも知らないくせにねー。あ、私ちよつと

いくとこあるから、またね」

とりあえずもう一度、釘をさしておく。

本当はクラスの委員のことも聞くつもりだったけど、でももう無理だ。

最後の私のセリフもいつもの猫なで声なんか保てなかった。

あの男子もちよつとびつくりしてたし。

私はそのまま教室をでてトイレに向かう。

声をかけてくる男の子達にも手だけ振って応える。

トイレに着くなりすぐ個室に入った。

ああああムカつく。

余計な尾ひれがまた付いてる。

何も知らないくせに、何も見てないくせに！

てゆうか本当に先輩がそんなことしてたら、今頃学校から処分されてるはずなのに何でわかんないの？

わかってる。今さら噂は消せない。

私がかしたところで何かが変わるわけじゃない。

私が怒ったところでどーにもならない。

むしろ、先輩には普通に関係ないって言われそう。

でも、ムカつくものはムカつくの！

あーダメ。落ち着かない。1限目はサボろう。

また特別棟の屋上にでも行って、ゆつくり考えよう。

先生達に見つからないように、授業が始まってから廊下でる。

あんまりサボったことなかったのになあ…。

特別棟に入り階段を上がって、4日ぶりの屋上へ。

扉を開けてすぐに、1人の女子生徒と目が合う。

そのまま見つめ合って、固まってしまう。

見た目は、真面目そうなメガネちゃん。

でも、普通に可愛い子だと思う。

あのほわほわした生徒会長のメガネバージョン？

こんなところで授業をサボりそうなタイプには見えない。

どうしよう…気まずいよう…。

「あの…、一色さん、ですよね？」

「へ？あ、はいそうですけど…。1年生？ですか？」

「あ、私一色さんの隣のクラスの藤沢つていいいます。よろしく願います。一色さんはどうしてここに？」

「あ、よろしく願います。ちよつとどうしてもムカつく事があつてですねー。それでサボっちゃおっかなくて…。」

派手なグループとかなら、覚えてるんだけどな。

みんな最初はグループに入れようと近付いてくるから。

結局、ちよつとしたら離れていくんだけど。

この子は敵だろうか。

私の名前を知っている事に関しては、驚かない。

相手だけ名前を知ってるなんて、上級生相手でもしよつちゆうだ。

ただ、こういう子達が1番分かり辛い。

地味目のグループにいそうだけど、実はトップカーストだったり。

葉山先輩のグループの海老名先輩みたいな。

余り余計な事は話さないほうがいいかも。

「私も一緒です。文実絡みで少しいやな事ばかりで…。あ、愚痴っちゃってすいません。邪魔なら私が移動しますので。」

ん？思わぬ形で文実の話が聞けるかも。

サボってよかったー。

でも嫌な先輩がいてとかだったらどうしよう。

噂を信じてたら、結局イライラするかも。

とりあえず話してもらおう。

「そんな事ないですよー。わたしこそ邪魔じゃなかったかな？それにお互い愚痴っちゃったほうがすつきりするんじゃないかな？」

「でも、聞いてもつまらないかもしれないですよ？それに信じてもらえる話じゃないと思います。」

「んー？とりあえず聞いてみないと何とも言えないですけど、わたしでなければ聞きますよ？それに、藤沢さんも知ってると思うけど、わたしは女子から嫌われてるので、秘密をバラす相手もいませんし。」

「そんな事ないと思いますよ。私は地味だし男の子からもあまり好か

れないので、正直懂れます。そういう子も私だけじゃないと思いますよ。」

なにこの子。お世辞かもしれないけど、これが本音ならめっちゃいい子じゃん！

「んー藤沢さんも普通に可愛いと思いますよ？少なくとも厚化粧でごまかして、わたしに勝手に嫉妬してくる女の子達よりは全然。」

「一色さんにそう言ってもらえるとすごく嬉しいです！あの、本当に私の話聞いてもらってもいいんですか？」

ヤバイこの子可愛い。

ちよつと照れながら嬉しそうに笑う藤沢さんはお世辞でもなんでもなくすごく素敵に見えた。

ぐぬぬ、これが天然物か…！

冗談はさておき、さつきから見ているこの子が嘘をついているようには見えない。

私のように猫を被ってるわけでもないと思う。

この子なら私の事も話しても大丈夫かもしれない。

「藤沢さんがわたしでよければですけど…。もしよかったら藤沢さんの後でいいので、わたしの話も聞いてくださいね？」

「はいっ！お願いします！あ、とりあえず座りましょうか。」

そこから藤沢さんの話を聞いた。

文実に自分から立候補したこと。

委員長が相模先輩に決まり、副委員長が雪ノ下先輩になったこと。

委員長の手際が悪く、少しずつ雪ノ下先輩主導になったこと。

そして、委員長の発言で委員達がサボるようになったこと。

委員長自身も来なくなってしまったこと。

ひどい日には数人しかいなかったらしい。

藤沢さん自身もサボってしまおうかと思ったこと。

（噂がホントなら先輩もサボってたのかなー？でもその状況なら誰でもサボっちゃうんじゃないかな？）

でも、誰よりも仕事をこなす雪ノ下先輩を見て、その気持ちがなくなくなったこと。

あまりのひどさに葉山先輩も文実を手伝っていたこと。

でも、ある日雪ノ下先輩が無理がたたって休んでしまったこと。無事回復してすぐ、スローガンの会議があったこと。

そこである先輩がとんでもないスローガンを提案したこと。

しかも半ば委員長にケンカを売るような形で。

その日から全員参加に戻ったこと。

そのお陰で文化祭に間に合ったこと。

形はどうあれ、その先輩に感謝していること。

そしてあの日、委員長がエンディングセレモニーの集合時間を過ぎても現れなかったこと。

探す時間を稼ぐために、葉山先輩や雪ノ下先輩、結衣先輩も協力していたこと。

葉山先輩に連れられようやく委員長が戻ってきたこと。

委員長はあまり責められなかったのに、探しに行った先輩がみんなから悪く言われてたこと。

「藤沢さん、そのスローガン決めの際の先輩は、文実をサボってたんですか？」

「いえ、1日も休まずに仕事してました。あ、雪ノ下先輩が倒れた日だけ早めに帰っちゃいました。先生の話だと、お見舞いに行ってみたみたいです。」

ん？雪ノ下先輩のお見舞い？あの先輩が？

どう考えても先輩と雪ノ下先輩が結びつかないんですけど…。

やっぱり別人かなあ。

私が考えていると藤沢さんが続きを話し始めた。

「でも、その先輩、今すごく悪く言われてるんです。そのスローガン決めの後から、文実内でも少し疎まれてたんですけど。今は学校中で悪く言われてて…。それに私もずっと文実にでてたので、クラスを全く手伝えなくて…。それでクラスでも派手目な子たちに色々言われちゃって…。その子達にも色々説明したんですけど、信じてもらえなくて。」

「藤沢さん、その先輩ってもしかしてヒキガヤ先輩？」

「やっぱり一色さんも噂聞いてたんですね。でも珍しいですね。みんなヒキタニって呼び捨てにするのに。やっぱり信じてもらえませんかよね…。」

そこまで話したところで1限目の終わりのチャイムが聞こえる。

あーずつと聞き入ったから時間忘れてた。

さすがに、連続でサボるのはマズイよね。

「藤沢さん。さすがに連続でサボるのもマズイし、また昼休みにでもお話できないかな？わたしも藤沢さんにちゃんと伝えときたいことがあるんです。」

「わかりました。場所はここでもいいですか？」

「大丈夫です。あと1つだけ先に伝えておきますね。わたしは藤沢さんの話を、ヒキガヤ先輩のことをちゃんと信じてますから。」

「あ、ありがとうございます。」

「こちらこそ。わたしが怒っていたのも先輩の噂のことだったので。」

隣のクラスみたいだけど、一応別々に戻ることにした。

先生と一緒にいるとこ見られたらめんどくさいし。

昼休みまでの間に私も頭の中で整理しておかなきゃ。

—————

昼休み

「あ、藤沢さん。お待たせしました。」

「いえ、全然待ってませんよ。」

私が屋上で見たことを藤沢さんにも話した。

先輩が委員長に対して、暴言をはいたのは事実だと伝えたときは少し悲しそうな顔をした。

私が話し終わるまで、何も言わずに聞いてくれた。

ヒキガヤ先輩と話した内容は伝えてない。

勝手に伝えたら怒られそうだし。

「どうして比企谷先輩はそんなことしたんでしょうか？あのスローガン決めるときも。」

「文化祭のためってというのが一番しつくりきますけど。どうなんでしょう。本人に直接聞いてみますか？答えてくれるか分かりませんが。」

「え？知り合いなんですか？だったら是非直接話したいです。比企谷先輩がなんであんなスローガンを発表したのか分からないですけど、もしあれがなければ、文化祭はなくなってたかもしれません。毎日出席していた人達の働きも無駄になってたかもしれないんです。だから、ちゃんとお礼が言いたいんです。」

「知り合いなのかなあ。わたしも理由が知りたくて話しかけたんですけど、ちゃんと教えてくれなかったんです。先輩がお昼ごはん食べる場所は知ってるので明日一緒に行ってみますか？」

「お願いします。一色さんに話してよかったです。」

「ごつちもですよ。じゃ明日の昼は教室の前で待ってもらえますか？あと、期待はしないほうがいいです。あの先輩すごいガード固いですから。」

「わかりました。よろしくお願いします。」

明日こそ先輩は教えてくれるかな。

分かったことはいっぱいあるのに、結局先輩の気持ち？の部分はやっぱり分からなくて。

でも、先輩が真面目に働いてた事はわかったし、先輩がいなければ、文化祭がなくなってたかもしれないのも事実だ。

私は文実でもなかったし、文化祭に思い入れがあるわけでもない。

屋上で寝てたくらいだし。

でもそのおかげで、嘘の噂に惑わされずにいる。

そのおかげで、その人を知りたいと思える人がいる。

知って理解したいと思える人がいる。

ただの興味本位かもしれない。

私が先輩のことを知って理解できたとしても、先輩からしてみればただの迷惑かもしれない。

でももう出会ってしまったから。

気の迷いかもしれないけど、葉山先輩以外で初めて知りたいたいと思える人に。

この気持ちがこの先どうなるか分からないけど、私の気がすむまでは逃しませんので。

覚悟してくださいね♪せーんぱい♪

4. 真実を知りたい後輩②

昨日、本当に色々なことがわかった。

全てがわかったわけではないけど。

昼休みに先輩のそこに行くまでに知りたい事を少しでも整理しておきたい。

先輩がどんな事を思って、何の為にそんな行動をとったのか。

この事は、昨日から考えてるけど、やっぱり答えはでない。

文実の状況を変えるため、文化祭のため、誰かのため。

屋上でのことも、「仕事だから」と言っていた先輩。

文実や文化祭のためだとするなら、責任感なのかな。

もし誰かのためだとするなら、その相手は？

先輩は自分のことをボツチって言った。

自分はクラスで認識されてないみたいなのことも。

だからクラスのためとかはなさそう。

だとしたら、真面目に働いていた委員のため？

うーん、もしかして雪ノ下先輩のため？

無理をして倒れた雪ノ下先輩。

そのお見舞いに行ったのが先輩。

直接話したことはない。

そもそも雪ノ下先輩が誰かと仲が良いとか聞いたことがない。

何度か見かけた事があるけど、1人でいる姿しか記憶にない。

人を寄せ付けないオーラみたいな人がある人。

凜としていて、「孤高」っていう言葉がよく似合う人。

知り合いでもない人がお見舞いに行っても、門前払いにあいそう。

まさか、本当は隠れて付き合ってるのか？

ダメだ。全く想像できない。

まず接点がなさそう。

先輩が柄にもなく片思いしてるのか？

これならありえそう。

先輩に直接聞いてみればいいや。

授業中はこんなことばかり考えてた。
休み時間にたまたま先輩の噂が耳に入る。

ムカつくけど、どうせ嘘ばかりだし、気にしない。
気にしないったら気にしない。ムカつくけど。

やっと午前の授業が終わり、廊下で藤沢さんと合流。

「あ、一色さん。今日はお願ひします。」

「はい。飲み物買ってからいきませんか？」

「そうですね。私も飲み物ほしいのでいきましょう。」

途中で飲み物を買ひ、先輩のベストプレイス？に向かう。

この前と同じように1人でパンを食べてる先輩がいた。

周りに誰もいない事を確認して声をかける。

「あ、せんぱーい。」

無視。

すがすがしいくらいに無視。

あ、そうだ。

先輩に会ったらパンチするんだった。

「もー、せんぱい。なんで無視するんですか？」

「痛っ。またお前かよ……。」

先輩はなんで殴ったんだよとかぶつぶつ言ってる。

先輩のせいで昨日の朝ばたばたしたんだから当然です。

それに無視する先輩が悪い。

「で？今日はなに？飯食ってんだけど。」

「今日はですねー、文実のこととか先輩が実は真面目だったとか色々
わかったんですけど、やっぱりわからない事があつたんでまた聞きに
きました。」

うわー、すごい嫌そうな顔してるよ、この人。

「てことはお前マジで調べたの？なに、ヒマなの？」

「失礼な人ですねー。まあ調べたというか、調べようとしていたら偶
然にも知れたというか。そんな感じですよ。」

「あの一……。」

あ、藤沢さんのことすっかり忘れてた。てへっ。

「あ、せんぱい。この子1年の藤沢さんです。実行委員だったみたいで藤沢さんから色々教えてもらいました。この子もせんぱいと直接話したいって言ってたので連れてきました。」

そう言った瞬間、先輩の表情が少し変わった。

ちよつと怒ってる？少し顔が怖い。

「ああ、色々言いたいことがあるのかもしれないが、もう終わったことだ。俺は謝るつもりもないし、話すこともない。」

藤沢さんが話す前に先輩が言い切る。

あー、私のときと同じだ。

先輩はきつと文実の事とかで、文句言われると思ってる。

「あのせんぱい？せんぱいが思ってるような事じゃないのでちゃんと聞いてあげてもらえませんか？」

しようがないのかもしれない。

今の先輩からすれば周りほとんど敵に見えるはず。

元文実だった人間ならなおさらだ。

でもね、せんぱい？違う人もいるんですよ？

「あ、あの私、どうしても比企谷先輩にお礼を言いたくて…。」

藤沢さん、がんばれ。

「比企谷先輩がなんであんな事をしたのかわかりません。でも、比企谷先輩がずっと真面目に仕事をしたのは知ってます。それに、スローガン決めるときも、比企谷先輩が言ってくれなかったら文実はなにも変わらなかったかもしれない。」

先輩もなにも言わずにちゃんと聞いてくれてる。

ちよつとだけでいいから届いてほしい。

先輩の敵ばかりじゃないって。

先輩に感謝してる人もいるんだって。

「だから、ありがとうございます!!」

頭を下げる藤沢さん。

少しの沈黙のあと、先輩が口を開いた。

「あれは俺が仕事をしなくなかったから、言っただけだ。別に俺が言わなくてもそのうち雪ノ下辺りがなんとかしてた。だから俺に礼を

言う必要はない。」

本当にそう思っているのか。

素直に受け取りたくないだけなのか。

「確かに真面目に出席してた奴らからすれば、そう見えるのかもしれないが、俺が言いたいことを言って偶然そうなったただけだ。文実のためとか思ってるなら、それはお前の勘違いだ。」

嘘だと思う。

屋上で、あの一瞬で葉山先輩の性格まで計算して実行に移した先輩が、何も考えずに言いたいことを言ったなんて。

何か目的があったとしか思えない。

「でも…「せんぱい？それ嘘ですよね？」

何か言おうとした藤沢さんを遮る。

このまま話したら、藤沢さんも先輩の敵になるかもしれない。

それだけは避けたい。

先輩のためにも、自分のためにも。

「は？なんで嘘つく必要があんだよ。」

「でも嘘ですよ？屋上であれだけ計算通りに葉山先輩まで動かしたせんぱいがなんの狙いもなくそんなことしますか？！」

先輩が何を考えてホントのことを言わないのか。

それはわからない。

でも、自分のことを悪いように言うのはやめてほしい。

「それに、それまで真面目に仕事してたんですよ？周りがどれだけサボっても毎日がんばってたんですよ？そんなせんぱいが急に仕事したくないからって理由だけで委員長にケンカ売るとは思えません。」

先輩は何かを考えているのか、黙ってる。

それまで、黙って聞いていた藤沢さんも口を開く。

「私もそう思います。比企谷先輩は私のことは知らないと思います。でも、私はがんばってた比企谷先輩を知ってます。あのスローガンは文実の状況を改善するために言ってくれたんじゃないですか？」

先輩の表情は変わらない。

一応話は聞いているみたいだけど。

どんな事を考えてるんだろう。

「それはお前らの勝手な想像だろ。」

やっと思つたと思えば…、また突き放す。

やっぱり先輩は捻くれ者なんですかね。

「そうかもしれません。でも、比企谷先輩はあの後もずっと真面目に仕事してたじゃないですか、文実内で悪く言われるようになっても、本当に仕事したくない人なら普通来ませんよね？」

ここまで言えば先輩も折れるかもしれない。

てゆうか、お礼くらい素直に受け取ってあげてよ！

文実の噂を先輩に聞いたときは、言い訳すらしなかったのに。

「あいにく俺は普通じゃない。」

「あのせんぱい？お礼くらい受け取ってあげればいーじゃないですか！なんでそんなに悪者になろうとするんです？わたしも藤沢さんもせんぱいが悪く言われてるの嫌なんですよ？」

我慢できずに口を挟む。

どうしてそんなに頑なんですか？

私達が信じられないから？

「俺の事をちよつと知つた気になって、勝手にお前らが嫌な気持ちになつてるだけだろ。」

もーなんなんですかねこの先輩は。

この前は、ちよつと素直にサンキュとか言つてたくせに。

私ちよつと怒つてますから。

「悪いですか？知つた気になって、せんぱいが悪く言われてるのを聞いて、わたしが怒るのはそんなに悪いことですか？嘘ばかりの噂を聞いて、その辺の人達と一緒にちよつとせんぱいの悪口を言つてれば満足なんですか？」

先輩は黙つてる。

私は止まらない。

「確かにせんぱいのことなんてまだ全然しりません。でも、せんぱいが噂通りの悪い人じゃないのは、わたしも藤沢さんも知ってます。勘

違いとかじゃありません。わたしは昨日藤沢さんに会えて、せんぱいの事を悪く言わない人に会えて嬉しかったです。」

思ったことを口に出してただけ。

こんなことで先輩は折れてくれないかもしれない。

でも素直に正直な気持ちを伝えたい。

考えて取り繕った言葉じゃない。

私の思いそのままを。

「そんな私達の気持ちも全部否定しますか？勘違いだつて切り捨てますか？ねえせんぱい。わたし達が敵にみえますか？嘘を言ってるようにみえますか？」

思ったことをそのまま吐き出した。

先輩。少しでも伝わりましたか？

「……………はあ…。勝手なことばつか言いやがかって。」

ダメだ。

どうしたら……………。

「なあ一色。藤沢の礼を俺が素直に受け取ったら、それはそのまま藤沢の考えを認めたことになる。もし、それをお前らが誰かに話したらどうなるか分かるか？」

え？えつとどうなるんだろう。

急に質問とかズルい。

ちよつと待つて下さい。

「えーと、良い噂と悪い噂がふたつになる？」

「それはない。まず噂にもならん。」

先輩は何が言いたいんだろう。

私が悩んでいる間に、藤沢さんがこたえた。

「信じてもらえないってことですか？」

「だろうな。信じてもらえないだけならまだいい。」

全然よくないじゃないですか。

でも先輩の味方が増えたりとかしないですかね。

「これだけ悪い噂が広まった状態でそいつの肩を持つような発言をしてみる。しかも、そいつはボツチで葉山に殴られるような奴だ。」

あ、そういえば私が調べるって言ったときも…。
そういうことか…。

「せんぱいの言いたいことはわかりました。でもわたし達が誰にも話さなければいいんじゃないですか？」

「そうだな。一色は多分大丈夫だろう。お前女子に嫌われてそうだし。でも、藤沢はどうだ？」

むかつくけどここはツツコミません。事実だし。

そういえば藤沢さんは話しても信じてもらえなかったって…。

「偶然一色が俺のいる場所を知っていたとはいえ、こんな奴にわざわざお礼を言いにくてくれる。お前は真面目な奴なんだろう。それに元文実だから話を聞きにくる奴もいるだろう。そいつらに笑って合わせられるか？」

「…：無理かもしれません…。」

「だから藤沢の礼は受け取れないし、お前らの考えを認めるわけにもいかない。そのまま最低な奴だって思っとけばいい。」

そんな…。

それじゃ、結局先輩はずっと1人じゃないですか。

「だから悪いな藤沢。一色も。」

「…：でも、比企谷先輩はそのままでもいいんですか？」

いいわけない。そんなの認めたくない。

「一色なら分かってんだろ？これだけ広まったらあととは時間が経つのを待つしかない。そのうちみんな飽きる。」

そうだ。噂は消せない。わかってたことだ。

周囲の悪意に逆らえば、自分に返ってくる。

だから女子はみんな私から結局は離れてく。

「まあでも、藤沢がお礼にくてくれたことも、一色が言ってくれたことも、その、なんだ？正直嬉しかったわ。少し救われた。それで充分だ。」

ずるい。この先輩はずるい。

今の言葉だけで私の心は少し軽くなった。

油断すると泣いちゃうかもしれない。

「比企谷先輩…。あの、認めてもらえなくて構いません。受け取ってもらえなくて構いません。だから、勝手に言います。ありがとうございます。いました！で、でわ私はこれで戻ります。失礼します。」

え？ちよつと藤沢さん？

あの子まだ弁当も食べてないのに。

あ、そうだ私も昼ごはん食べなきゃ。

「お、おう…。ってあいつ早いな。で？お前は？戻る？」

「ここでご飯食べて戻ります。せんぱいもまだパン残ってますよね？」

そう言う先輩も素直にパンを食べ始めた。

昼休みもまだ半分くらいあるし、大丈夫かな。

あ、今のうちに聞いとこう。

「せんぱいって雪ノ下先輩と付き合ってるんですか？」

「ぶはっ！ゴホっ！な、なんだ急に？」

めっちゃむせてる。

この反応あやしい。

「せんぱいが雪ノ下先輩のお見舞い行っちゃって聞いたんで。雪ノ下先輩が誰かと仲良いなんて聞いたことないし、家に行くってそんな関係かなーって。」

「別に俺1人で行ったわけじゃねえよ。雪ノ下とは部活で一緒なだけだ。友達ですらない。」

雪ノ下先輩が部活？聞いたことない。

それに先輩も部活なんてしなそうなのに。

「へー。似合いませんね。なんていう部活なんですか？」

「余計なお世話だ。奉仕部って知ってるか？」

奉仕部？聞いたことないなー。

なんか響きがエロいです。

先輩と雪ノ下先輩が2人で奉仕部。

もう卑猥な感じにしか聞こえない。

「お前がどんな勘違いしてるか知らんが、変な部活じゃないぞ。」

「でも雪ノ下先輩と2人つきりとか先輩ご褒美ですね。どんな部活な

「んですか？」

部室であんな美女と2人なんて。

なんだかんだ青春してるじゃないですか。

「いやお前、あいつめっちゃ怖いぞ？」

先輩は奉仕部のことについて色々教えてくれた。

依頼を受けて解決する部活らしい。

なんかちよつとかっこいい。

あと部員がもう1人いるらしい。

3人だけの部活とか学校側は認めてるんですかね？

「もう1人は誰なんですか？」

「お前が知ってるかわからんが、葉山のグループの由比ヶ浜ってわかるか？」

結衣先輩？部活入ってたんだ。

てことは雪ノ下先輩と結衣先輩と先輩？

先輩。そのうち刺されますよ？

「なんですとかそれ。先輩ハーレムじゃないですか！しかも雪ノ下先輩と結衣先輩とか2人とも超美人じゃないですかー。」

さすがにあの2人には私も勝てないかも。

人気もすごいですからねー。

でも先輩曰く、雪ノ下先輩は氷の女王で結衣先輩はアホの子らしい。

「なんですとかそれ。あ、部活では大丈夫なんですとか？噂とかそういうの。結衣先輩とか葉山先輩のグループだし。」

「あーまああの2人はな。俺が相模を探してる間、時間稼いでくれたのもあいつらだし。」

そっか。ちゃんと理解してくれる人達がいるんですね。

ちよつと安心しました。

雪ノ下先輩はわからないけど、先輩と結衣先輩と部活って楽しそう。

いーなあ。サッカー部に不満があるわけじゃないけど。

「せんぱい、もしかしてスローガンの件は雪ノ下先輩のためで、屋上の

件は、時間を稼いでくれたお二人のためだつりします?」

「はあ、もういいか。お前には色々話してバレてるし。」

予想外です。絶対ごまかすと思つてたのに。

先輩は誰にも漏らさない事を条件に色々教えてくれた。

相模先輩から奉仕部に依頼があつたこと。

スローガンの件は、確かに文実の状況を変えるためだつたらしい。

でも、それは実行委員のためとかじゃなく、奉仕部のなかで、先輩のやるべきことをやっただけだつて。

(この辺はよくわからないなあ)

最終日の屋上の件、依頼達成のためにはどうしても相模先輩をエンディングセレモニーに立たせる必要があつたこと。

「絶対に誰にも言うなよ。依頼の件とか部外者に話したのがバレたら、雪ノ下に殺される。俺が。」

そう言つて、先輩の話は終わった。

「はい。それは約束します。せつかく先輩がちゃんと話してくれたので。でも、なんで話してくれたんです?絶対話してくれないと思つてました。」

「あー、まあお前らが言つてくれたことは嬉しかったし、俺だけ全部隠しとくのもな。」

「せんぱいがデレたー!ー!」

「アホか。ただ俺とあんまり一緒にいないほうがいいぞ。マジで。」

この人は捻くれてるけど、それは優しさなのかもしれない。

今日の藤沢さんのことにしても。

そういえば、先輩は最初からずつとこんな風に心配してくれてたのかもしれない。

私が先輩のせいで悪意を受けないように。

「お断りしまーす♪それにわたし元々友達とかあんまりいないんで大丈夫ですよ!それにー」

私はそんな簡単に離れませんよ?先輩。

「わたし先輩のこととつと知りたいので♪それに一緒にいるつて言つても昼休みだけだし、毎日は来ないので大丈夫ですよ♪」

「あーはいはい、あざといあざとい。」

せつかく素直に言ったのにー!

先輩のバカ!

「今のは素ですうー。もう。まあ、先輩が辛いときは愚痴くらい聞いてあげますから。場所変えたりしないてくださいよ?」

場所を変えられるのは本当に困る。

先輩は影薄そうだから見つけられる気がしない。

「あー善処するわ。そろそろ時間だから戻れよ。」

「はーい。じゃまた明日です♪せーんぱい♪」

先輩は、あざといとか明日もくんのかよとか言ってたけど、気にしなーい。

今日は先輩と話せてよかった。

相模先輩の身勝手さとか、納得できないこともある。

それでも、ちゃんと話してくれた。

少しでも知ることができた。

それに、先輩にもちゃんと理解者がいることもわかった。

先輩もその人達を大事にしてるんだと思う。

それが、少し嬉しい。そして、ちよつとだけ羨ましい。

まだ、先輩と出会って1週間も経ってない。

でも、まだ時間はいっぱいある。

少しずつでいい。私のペースで。

久しぶりにスッキリした気持ちで歩く廊下。

明日の昼休みも楽しいといーな♪

5. 過ぎゆく日常。

先輩と出会ってから2週間ほど。

あれから、雨の日以外はほぼ毎日ベストプレイスへ。

先輩の噂は、1年生の間では少し落ち着いてきた。

私も、きつと藤沢さんもちよつと安心。

藤沢さんとは、会えば会話するようになった。

藤沢さんも交えて、昼ご飯を食べたりもした。

先輩は相変わらず。

私が行くと嫌な顔をするし、すぐあざといって言う。

たまに先輩があざとくて、私がお断りして。

でも、先輩の隣はすごく居心地がいい。

お互いに言いたい事を言つて。

猫被つてる私も、素の私も同じように接してくれる。

いつもの場所は、私にとってもベストプレイスになりつつある。

この2週間の間にわかった先輩のこと。

マツ缶が好き。

シスコン。

実は働きたくない。

将来の夢は専業主夫。

国語は学年3位。国語はね。

黒歴史がいっぱい。

自虐ネタが多い。

たまにすごいキモい。

下の名前は、はちまん。

そして、なんと、なんと実は友達がいた。

色々わかったけどダメ人間にしか見えない。

でも、変にかっこつけようとしないう先輩。

やっぱり他の男子とは色々と違う。

私と話す男子は、自分の良い所しか言わない。

私の事も、良い部分しかみようとしない。

それに慣れている私だから、先輩の隣が居心地良いんだと思う。

先輩に友達がいたことはすごく驚いた。

自分でいっつもボツチって言ってたし。

しかもその相手が、あの総武のプリンスこと戸塚先輩。

葉山先輩が王様、戸塚先輩が王子様。

タイプは違うけど、2人とも無駄にキラキラしてる。

特に戸塚先輩は、女子より女子っぽい。

先輩のテンションもヤバかったし。

先輩曰く、「戸塚の性別は戸塚」らしい。

意味わかんない。やっぱり実はホモ？

戸塚先輩も先輩と同じクラスらしい。

こう考えると、先輩のクラスってヤバくない？

王様に王子に女王（獄炎）。

女王（腐）にアホの子にヘタレ委員長。

そして、校内一の嫌われ者である先輩。

すごい。濃すぎ。ヤバい。

でも、そんな中で戸塚先輩だけは、周りの目も気にせず、先輩に話

しかけてくれる唯一の存在らしい。

先輩の癒しでマイエンジェルらしい。

気持ち悪い。

ちなみに「わたしは？」って聞いたら鼻で笑われた。

許さない。絶対に。

こうやって色々な事を知れた2週間。

学校の雰囲気は、次は体育祭へ。

この前、文化祭が終わったのにー。

行事を詰め込みすぎだと思う。

私にとって初めての体育祭。

あんまり興味ないけど。

今日もお昼は先輩と食べ、今は放課後。

絶賛、部活中である。

部員達がボールを追いかけてる間に、私達マネージャーはドリンクを用意したり、時間があればビブスを洗ったり。

今は、DFを付けて攻撃陣の戦術の確認。守備陣の実戦練習も兼ねている。

MFの葉山先輩、FWの戸部先輩とかは、攻撃側。

葉山先輩はとにかく爽やかでキラキラ。

戸部先輩はとりあえずうるさいし、ウザい。

ゴールを決めるたびにはしゃぐ。

それよりウザいのは、葉山先輩のファン。

わざわざ放課後に、見学とかヒマなの？

DFが少しでも強く当たると、非難の声が飛ぶ。

DF側の先輩達もそれを気にして、あまり練習にならない。

練習の邪魔になるくらいなら来ないで欲しい。

「よし、いい時間だしここまでにしよう。」

葉山先輩の一言で全員戻ってくる。

ドリンクとタオルを準備。

「葉山先輩、お疲れさまでーす。」

「ちよっ、いろはすー俺のは？マジないわー。」

1番に葉山先輩にそれらを渡し、戸部先輩は無視。

それくらい自分で取って下さい。

マネージャーもヒマじゃないですよ。

葉山先輩はやっぱりかっこいい。

色々な仕草にドキつとするし、近付きたいという気持ちもまだ当然

あるし、アピールも継続中。

でも、最近どうしても拭えない感情がある。

『どうして先輩の噂をそのままにしているのか』

『文実の状況を知っていたなら、葉山先輩なら先輩が動く前にどうにかできたんじゃないか』

『文実の状況も知っていて、屋上での先輩の狙いにも気付いていたなら、先輩を擁護する事はできたんじゃないか』

こういった不信感？みたいなものがどうしても湧いてくる。

これが葉山先輩でなければ、そんな事もきつと思わない。でも、誰にでも平等で優しい葉山先輩だからこそ、私はどうしてもそう考えてしまう。

葉山先輩の影響力ならって、思ってしまう。私だって、先輩のために何かをしたわけじゃないから、偉そうなことは言えないけど…。はあ。

今まで葉山先輩の事を、悪く思うことなんてなかったのに。どんどん自分の気持ちがわからなくなる。

「……………す〜？」

別に先輩に恋をしてるとかじゃない。

先輩に気持ちが移ったとかでもない。

知りたいと思うし、理解したいと思う。

先輩の味方でいたいとも思う。

先輩といると楽し、居心地もいい。

先輩はタイプじゃないけど、嫌いじゃない。

たまにドキつとさせられるけど。

「……………はす〜？」

だから、わからない。

正反対の2人にドキつとしてしまう自分。

正反対の2人に少なからず惹かれる自分。

「おーい。いろはすー！」

「もう！戸部先輩うるさい！なんですか!？」

「っべーわ。いろはすひどいわー。さつきから呼んでたっしょー。隼人君が集合だつてよー。」

さつきから呼ばれてたらしい。

っべー。いろはす全然気付かなかつたわー。

マジ、ごめんっしょ。

うん。戸部先輩の真似はやめよう。

バカになりそう。

少し離れたところに全員集まってる。

なんだろう。ミーティングかな？

「よし、全員集まったね。もうすぐ体育祭があるのは全員わかっているよな？1年は知らないと思うけど、毎年、各運動部から運営委員として

人員を貸し出してるんだ。」

へー。そんな事やってるんですね。

でも、めんどくさそう。

「申し訳ないけど、冬の大会に向けて、必然的にレギュラー以外の部員に行ってもらうことになる。重ねて申し訳ないんだが、3年が抜けて余裕がある訳じゃないから、マネージャーにも交代で参加してほしいんだ。都合が悪い日は、言ってくれてかまわない。」

あーまあしようがないかな。

マネージャーは私含めて4人いるし。

でも、私以外のマネージャーは、葉山先輩にキヤーキヤー言ってるだけであんまり仕事しない。

ふざけてんの？

「あの、葉山先輩。参加する面子は固定じゃなくて大丈夫なんですか？」

「確かに今までは固定だったんだけど、サッカー部内で去年それで少し揉めてね…。一応、各自でしっかり引継ぎをすれば大丈夫だと思うんだ。俺も毎日確認するつもりだしね。」

確かに、部活に熱意を注ぐ人からすれば、いい迷惑かも。

運営委員って大変なんだろうか。

正直やりたくない。

でもこれは、葉山先輩に恩を売るチャンス？

他のマネージャーに仕事をさせる機会にもなる。

それに、毎日葉山先輩と話す口実にもなる。

よし。

「葉山先輩。私でよければ、固定でも構いませんよ？まだ1年ですし、あまり詳しい事はわかりませんが。」

この提案に葉山先輩は驚いていた。

確かに自分からこんな事を言うようなキャラじゃない。

戸部先輩や他の部員は口々に褒めてくれてる。

他のマネージャーも私みたいな邪魔者がいなくなるからか、すごく喜んでる。

「あんだ達はこれを機に少しくらい仕事しろ。」

「いろは、本当にいいのか？ 部的にはもちろん助かるし、引継ぎの必要もなくなるからいいが、割り振られる係によっては、結構大変かもしれないよ？」

「構いませんよー。そこら辺はうまくやりますので。お任せください♪」

「なら悪いけどよろしく頼む。何かあればすぐ言ってくれ。協力できることは協力する。みんなも助けられるときは助けてやってくれ。ありがとう、いろは。」

「まーじ、いろはす、っべーわ。さっすがだわー。」

計算通り☆

うまくやるの部分で苦笑してたけど。

私以外は交代制になるみたい。

サッカー部の男子は、私が葉山先輩狙いなのも知ってるから、一緒にいても無駄にアピールとかしてこないし。

あとは楽な仕事に就けば、かんぺき♪

何かあれば先輩にも相談しよう。

元文実の先輩なら色々頼りになりそうだし。

めんどくさいけど、少し楽しみ。

なーんて、考えてる私は本当にバカだった。

それを、後から知る事になる。

何故か、また委員長の相模先輩。

そして、首脳部にいる先輩。

首脳部と委員の対立。

荒れに荒れて進まない会議や準備。

そんな面倒な未来が待ってるなんて。
この時の私は知る由もなかった…。

6. 運営委員は辛いです。 前編

今日の放課後から、体育祭の運営委員が始まる。

今日は、先輩のそこには行けない。

ごはんを食べたら、部室にいかないといけない。

葉山先輩と去年委員だった先輩と話し合い。

私以外、交代制だから方針を決めるらしい。

サッカー部からは、私を含めて3人。

部活ごとに仕事を決めるみたい。

だから、先ほどの仕事にするか決めておくらしい。

ここで、1つ問題がある。

委員を交代制にしても、当日も仕事があるため、誰が当日に仕事をするかも決めないといけない。

うわー。みんな嫌がるだろうなあ。

私は当日も確定なんだろうか。

「去年と同じなら、入場門とかプラカードの作成は当日の仕事はほとんどなかったよ。ちなみにサッカー部は去年これだった。」

うーん。どうなんだろう。

確かに、当日までに作るから、その後の仕事はなさそう。

「それってサッカー部だけで作るんですかね？」

「去年は柔道部と作ったから、1つの部活に任せるってことはないと思う。」

それなら、ありかもしれない。

私以外の2人は男子だろうし。

「じゃあ、大丈夫そうですね。葉山先輩もそれでいいですか？」

「ああ。実際に働いてくれるのはいろは達だからね。よろしく頼む。」

よし。けつてーい。

あとは、部内で共有すれば、問題なし。

それは葉山先輩がやってくれるらしい。

時間もあまりないので、挨拶して教室に戻る。

放課後

運営委員が行われる会議室。

生徒会の人達や各部活の委員。

そして、平塚先生。

生徒会長は、いないみたい。

席に着いて始まりを待つ。

少しして会議室のドアが開く。

「苦勞さま〜」

入ってきたのは生徒会長。

相変わらずぼわぼわしてる。

生徒会の人達は動きが家来みたい。

そして、その後ろから入ってきた人達を見て、声がでそうになった。

雪ノ下雪乃先輩。

由比ヶ浜結衣先輩。

そして、腐った目で猫背の男子、先輩だった。

思わず2度見してしまった。

なんで？なにしてるの？

あ、3人一緒ってことは、先輩の言ってた奉仕部かな？

きつと、私は口を開けて、間抜けな顔だったと思う。

結衣先輩が小さく手を振ってくれる。

先輩と目が合う。

そんな嫌そうな顔すんな！

予想外の遭遇だった。

生徒会長や先輩達は平塚先輩と話してる。

やっぱり、部活みたい。

文化祭に続いて、体育祭まで。

働きたくないとは何だったのか。

先輩達が来てから少し時間がたった。

まだ始めないのかな。

周りも同じみたいで、みんな先輩達に視線を送ってる。

その時だった。

「遅くなっちゃってごめんなきーい。」

また2度見した私は悪くない。

無遠慮に会議室に入ってきた人物。

それは、先輩の噂の元凶、相模先輩だった。

知らず、相模先輩を睨む。

私以外にも結構な人達が相模先輩を睨む。

そんなこと、お構いなしにモブっぽい人達に手を振ってる相模先輩。

ようやく、それに気付いたのか席に着いた。

「えっと、すみません。…委員長をやります、相模南です。」

は？はあ？委員長？

今度は先輩を睨む。

どーゆうこと？

なんでまたこの人が委員長？

なんでまた一緒に仕事してんの？

そんな感じに念を送る。

気付いた先輩は、すぐに目を反らした。

まあいいです。今度説明してもらいます。

そんな感じで先輩に念を送ってる間に会議は始まった。

目玉競技を決めるみたい。

生徒会長が意見を求めるも、なかなか手が挙がらない。

そんな空気を吹き飛ばしたのは、結衣先輩だった。

「部活対抗リレーとかっ！」

楽しそうに元気いっぱいに答える結衣先輩。

素敵な人だなあ。

葉山先輩に会いに行くと、必ず三浦先輩に絡まれる。

それを、いつも助けてくれる結衣先輩。

優しいし、何よりあの胸。

格差社会だなあ…。

下らないことを考えている間に、雪ノ下先輩やまたもや結衣先輩が

意見を出す。

でも、全て平塚先生に却下される。

そんなこと言ったら、何もできなくなる？

それでも、生徒会長は意見を促す。

うーん。何かあるかな。あ、

「はいっ！大綱引きとかどうですか？」

折角、意見をだしたけど、平塚先生の「地味だなあ…」で潰された。

確かに目玉競技にしては、地味だけど…。

その後も色々意見はでる。

全部潰されちゃったけど。

しかも、途中から連想ゲームみたいで最後なんて

『大岡はチエリー』

になっている。

先輩が悲しそうな顔してる。

先輩もチエリーですもんねっ♪

相模先輩も意見を促す。

いや、あんた何もしてないじゃん。

委員長なんだから、あんたも提案しろ。

睨んでいたら、先輩と目が合う。

腐った眼でそんな見つめないで下さいよ！

先輩も意見だしなさいっ！

そんな思いが通じたのか、先輩は目を反らした。

あれから意見もせず、空気は最悪。

生徒会長と相模先輩が意見を促すけど、誰も答えようとしなない。

これ終わらないなあ…。

サッカー部の2人も帰ったそうにしてる。

私もこれなら部活行きたい。

でも、あれだけ意見でて全部ダメならこうなるよね。

そう思っていたら、先輩達が話し始めた。

先輩がまた変なこと言ってる。

変なところで平塚先生も同意してる。
それでいいんですか？平塚先生…。
結局、先輩が訳わかんないことを言っ
て、外部から意見を貰うこと
になった。

生徒会長が相模先輩に確認する。

「は、はい。そうですね。あんまりいいアイディアも出てないし。」

相模先輩も同意したときだった。

近くから呟くような声が聞こえた。

「偉そうに。」「ホントだよーねー。」

それは、相模先輩が会議室に来たときに手を振って、話しかけたモ
ブっぽい人達だった。

はるかだかゆつこだか、そんな感じ。

実は仲悪いのかな。

まあ女子の間では、よくある事だ。

平塚先生も了承。先輩と結衣先輩が話してる。

先輩？ちよつと結衣先輩と近くない？

ちよつと照れてますよね？

結衣先輩もちよつと顔が赤く見える。

私には、あざといしか言わないくせに。

むー。なんかムカつく。

結衣先輩がおそらく電話のために外にでて、少し。

会議室にきたのは、海老名先輩と太った先輩。

先輩達が呼んだ理由を説明する。

どうやら、太った先輩は先輩の知り合いみたい。

先輩。個性的な方とお知り合いですね…。

太った先輩はぎざ虫先輩というらしい。

海老名先輩がそう呼んでいた。

頼まれた2人は引き受けてくれたみたいだけど、何故か勝負をする
ような雰囲気では会議室を後にした。

私達もそこで解散になった。

—————

あれから土日も挟んで数日。

週末の会議で目玉競技は無事に決まった。

結局、ざぎ虫先輩の案が女子の目玉競技に。

海老名先輩の案が男子の目玉競技になった。

女子が『チバセン？』

騎馬戦みたいなものだと思う。

何故か先輩が説明してた。

男子が『棒倒し』

読んで字の如くそのまま。

大将を決めて対決を煽るらしい。

途中、興奮した海老名先輩が退出した。

白組の大将は葉山先輩。赤組は未定。

そんな感じで順調に進んでます。

とはいかなかった。

はるかどゆっこが文句を言い始めたからだ。

部活があるから、仕事量多いのは嫌だとか。

なんでこーもグダグダしますかねー。

最後は、見兼ねた平塚先生が無理矢理解散させた。

次回の会議は、中止。

大丈夫かなあ。

結局仕事も決まらないので、葉山先輩に頼んで、初日に一緒に行つた2人も委員に固定にしてもらった。

2人共、快く引き受けてくれたみたい。よかった。

ちなみに、先輩とは初会議の次の日に話した。
やっぱり奉仕部関係だった。

依頼が重なって、ああいう形になったらしい。
内容は、個人情報だから教えてくれなかった。

あのはるかどゆっこは、元文実らしい。

しかも屋上に、葉山先輩と一緒に相模先輩を探しにきた2人だった。

先輩の予想では、最初に噂を流したのも、相模先輩とこの2人。

今は、クラスの相模一派が頑張ってるらしい。

だから、運営委員でも話しかけるなだって。

あと「相模を睨みすぎ」って怒られた。

余計な事するなと釘もさされた。

先輩はお人好しすぎます！

そんな事があって今日は久々の会議。

みんなやる気なさそう。

遅れてくる人達までいる。

前回あんな感じだったし、しょうがないのかな。

少し遅れて、会議が始まる。

と思ったら、相模先輩がはるかどゆっこに謝った。

一応、他の人達も納得したらしい。

そこからは、現場シフトの改善案だったり、目玉競技の人的コスト

削減だったり。

結衣先輩がフォローしながら、雪ノ下先輩が淡々と説明する。

先輩は、何も喋らず、周囲を伺っている。

サッカー部に関しては、元々大会の事も考えての面子だから、どんなシフトでも問題はない。

一応他の部活も、しっかりキャプテンなどに確認を取ったらしい。

へー、すごいなー。

この数日で、ここまで形にしたんだ。

結局、サッカー部は製作物作成になった。

あと野球部も。

終わり次第、他の作業へ。

設置は、前日に男性陣でするみたい。

当日も少しだけ仕事がある。

プラカード持って整列させたりとか。

奉仕部の先輩達もがんばってる。

先輩を助けるためにも、私もがんばろう。

明日から、作業開始だ！

と、意気込んでいた時期がありました。

最近こんなばっかりだよー。

サッカー部が1年だけなのをいい事に、「大会がー」とか言って野球部の人達はすぐ部活に行く。

ここ数日そんな感じだ。

一応、首脳部側から結衣先輩と生徒会の役員さんが手伝いに来てくれるけど、私と結衣先輩があまり慣れていないのもあって、作業の進みは遅い。

生徒会の役員さんが、野球部の人達を説得してくれたけど、遠目に見てるだけで、手伝おうとしない。

近付いてきたと思ったら、話しかけるだけ。

てゆーか、女の子が作業してんだから手伝え！

だから、大岡はチェリーなんだよ。

大岡って人は、いないけど。

私がムカついていると、結衣先輩がどこかへ行ってしまった。

さすがに、嫌になったのかなー。

サッカー部の2人も、飲み物を買に行った。

私と結衣先輩の分も買ってきてくれるらしい。

少し経って、結衣先輩が先輩を連れて戻ってきた。

え？先輩？先輩だー！

私も2人に駆け寄る。

「なに、この状況…。」

「いやー、あはは。」

そりゃ、そう言いたくなりますよね。

「すいません。今サッカー部の2人は飲み物買いに行ってくれてますので。」

「意外だな。ちゃんと真面目に仕事してんのな。」

あ、普通に話すんですね。

あんまり人もいないからかな。

結衣先輩は、私と先輩が知り合いだなんて思ってないみたいで、自分言われたと思ったみたい。

「あたしだってちゃんと仕事するし。」

「いや、お前じゃなくて一色のほうな。」

「わたし達は毎日ちゃんとしてますうー。わたし達はですけどね！わたし達は！サッカー部は！」

ちようどいいので、野球部の人達にも聞こえるように言っちゃった。

気まずそうな顔してても知りませんから。

「お、おう。」

「そうだよーいろはちゃん達は毎日ちゃんと仕事してくれてるんだよ！ん？ヒツキーいろはちゃんと知り合い？」

ですよねー。そう思いますよね。

むしろ、今までよくバレなかったなー。

隠してたわけじゃないけど。

てゆーか、ヒツキーって（笑）

結衣先輩のセンス…。

「実は「バツカ。俺がこんなリア充みたいな奴と知り合いなわけねーだろ。ほら仕事しよーぜ。」

思い切り被せてきましたね。

へー。ふーん。知り合いですらないと。

結衣先輩もそーだよねーとか言ってるし。

先輩はそのまま歩いて行って、役員さんと交代。

結衣先輩も向かい側に腰をおろす。

先輩、貸しーつですから。

「あー、結衣先輩。この前、ぎぎ虫先輩？が会議のとき呼んでたのを聞いただけですよー。だから心配しなくていいですよ。」

「あーそういう事かー。って、べ、別にそんな心配とかしてないし!!何の心配だし!。ってゆーかヒツキーもいつまで照れてんの?。デレデレすんなし!!」

これ結衣先輩の態度は明らかに…。

へー青春ですなー、先輩。

戸塚先輩といい、結衣先輩といい。

どこがぼっちなんですかねー?先輩。

「て、照れてねーしーデレデレとかしてねーし!ただビックリしただけだし!」

先輩、結衣先輩みたいになってるし。

結衣先輩も真似すんなしとか言ってるし。

あ、私もだ。

うん。ちよつと落ち着こう。

すうー。はあー。

「なんでお前は急に深呼吸してんだよ…。」
うるさいです!

また思い出して恥ずかしくなったりしてないんだからねっ!

うん、今のはない。

ちよつと落ち着いた。

結衣先輩がじとーつとした目で見てます。

「むー、やっぱなんか仲良くない?」

できました。天然物のむー、です。

可愛いなー、結衣先輩。

そりゃ、私があざとく見えるのもしようがない。

ちよつと悔しいなあ。

先輩は無視して仕事してる。

結衣先輩も「無視すんなし」とか言っつて、先輩を叩く。

どつちが仲良いんですかねー。

「俺を叩くな。クギを叩け。クギを。」

「誰がうまいこと言えと。」

ちよつと面白いからムカつく。

さて、そろそろ真面目に仕事しよう。

この時私の中には、よくわからない感情があった。

結衣先輩の態度を見たら、先輩とのことを知られたくないと思つた。

だから、適当に誤魔化した。

あの時、ホントの事を言えたはずなのに。

自然体で、私より全然可愛い結衣先輩。

そんな結衣先輩の好意は、多分先輩に向いてる。

先輩の態度も、私に対する態度とは少し違う気がした。

結衣先輩のことが好きなんですか？

そんな事を考えると、少しだけ胸が痛む。

この痛みの名前を、私はまだ知らない。

7. 運営委員は辛いです。 中編

あの後、少ししてから先輩は戻った。
結衣先輩と『THE・青春』みたいな会話してた。
先輩が戻ったあと、ギリギリまで作業してその日は終わりになっ
た。

こんな状態で体育祭は大丈夫だろうか。
各部活からきている人達の士気は低い。
また文化祭みたいになるのかな…。
また先輩が…。
ううん。前は、蚊帳の外だった。
今回は、私も中にいる。
きつと、できることがある。
そんな決意をして、家路を歩く。

次の日。

朝練を終えて、昇降口に入る。
なんか戸部先輩が騒いでる。
朝練もあつたのに元気だなあ。
靴箱にゴミを入れられたらしい。
そんな小学生みたいなこと、する人いるんだ。
戸部先輩は、べーべー言いながら、葉山先輩に連れて行かれた。
戸部先輩、どんまいです。
授業中は、ずっと考え事。
体育祭運営委員のこと。
私に何ができるのか。
そもそもなんでこんな風になってるんだらう。
1番の原因は、間違いなくはるかどっこい。
あの人達の呼び捨てももう普通だなあ。
あの人達は、体育祭の邪魔をしたい？

でも、だったら運営委員なんて来ないはず。

そういえば、会議初日のあの2人の言葉。

『偉そうに。』『ホントだよねー。』

相模先輩が原因？

でも、あの人は文実のときは一緒だった。

それが、なんで今回敵に？

あの2人は実は真面目組だった？

もしそうなら、先輩の悪い噂なんて流す？

あーダメだ。わかんない。

こうなったら…。

「て事でですねー、ヒッキーせんぱい。わたしに何ができるか考えてくれませんか？」

そう。先輩に聞く。

きつと、先輩は裏まで見えてる。

私には見えない事が、見えてる気がする。

「待て。全然意味わからん。なに？ついに頭おかしくなった？あとヒッキーせんぱいはやめて。マジで。」

「まず、なんで相模先輩とはるかどゆっこはあんな風になってるんですか？文実では、3人とも仲良くサボってたんですよね？なんで今更仲間割れみたいになるんです？」

まずは、現状を正しく知ろう。

じゃないと何もできない、と思う。

「あー、俺の主観だがいいか？」

私は頷いて先を促す。

「おそらく1番は、立場の違いだろう。文実のときは3人一緒。なのに、今回は相模は首脳部側。あいつらは現場班。少なくとも対等じゃねえな。そして、初日からの相模の態度。それらが、相模と首脳部側への反感に繋がってる。」

なるほど。

確かに初日の態度とか、あの2人じゃなくてもムカつく。

遅刻してきて、意見は出さない。

そのくせ、周りには意見を促す。

「せんぱい。正直わたしは自業自得だと思うし、せんぱいの噂をそんなに広めた相模先輩がこんな風になっていて、いい気味だと思います。それでも、せんぱいは相模先輩を見捨てないんですよね？」

先輩は少し考える。

先輩はそんなこと思わないのかな。

「正直、俺は相模なんかどうでもいい。でも、依頼だからしょうがない。」

依頼だから。

だから、投げ捨てない。

相模先輩のためじゃない。

奉仕部にきた依頼を、全うするため。

「だったら、わたしが相模先輩なんか放っておいて、普通に体育祭を楽しんで下さいって依頼したら受けてくれますか？」

そんなわけない。

きつと先輩は1度受けた依頼を投げ出さない。

文化祭がその証拠だ。

「それは……、すまん。」

だよね。

自分で言つたくせに、その答えに安心する。

「ですよー。わかってました。だから、依頼じゃなくてこれはお願いです。わたしにも手伝わせてください。せんぱいがまた傷付いたりしないように、わたしにできることをさせてください。ダメですか？」

「お前がそこまでする必要はないだろ。ただでさえサッカー部は真面目に仕事してくれてる。それで、充分助かってる。」

それは、サッカー部としてだ。

確かに、先輩の助けになればって思った。

でも、そうじゃないんです。

「もう、嫌なんです。本当の事を知ってても、噂の否定さえできない。それなのに、噂を聞くと腹が立って、後からせんぱいに全部教えても

らって。確かに、わたしは奉仕部じゃないです。でも、今回は部外者でもないです。見てるだけは、イヤです。」

私にできる事があるのかわからない。

これは、私の勝手な押し付けだ。

ウザがられるだけかもしれない。

今回は、そんな事にはならないかもしれない。

でも、またあんな思いをするくらいなら。

「はあく。分かった。お前にも頼る。それでいいか？」

ごめんなさい、先輩。

ワガママばかりで。

困らせてばかりで。

「はいっ!!!!ありがとうございますーす。せんぱい♪」

「…はあ。変なところで頑固な、お前。」

やっぱあざといわ、お前。

そう言っって笑う先輩。

久しぶりに見た気がする。

先輩の優しい笑顔。

「はちまんせんぱいには言われたくないでーす♪」

だから、私も精一杯のあざとさで返す。

私にとっては、まだただの先輩。

だから、先輩にとって、ただのあざとい後輩でいい。

真っ赤な顔を隠すために、そっぽを向いた先輩。

そつちを向いててください。

私も多分、少し顔が赤いので。

—————

そして、放課後。

あれから、お互い普通に戻るまで無言。

やっと戻った頃には、昼休み残り5分だった。

でも、そんな沈黙が少し心地よかった。

よし！今日も運営委員だ。がんばろう。

いくら私がそう思っているても、周りはそうじゃない。

会議の時間なのに、止まらないお喋り。

ほとんどが、2年生なのに。

恥ずかしくないの？

相模先輩が進捗状況を聞いても、誰も答えない。

だったら、勝手にしよう。

私が、この人達に合わせる必要はない。

「んっ。んっ。あー報告していいですかね？入場ゲート、プラカードの作成は、順調とは言えませんが、少しずつ進んでます。」

いーね。一齐に静かになった。

首脳部側も現場班も。

先輩そんな顔しないで下さい。

大丈夫ですから。

当たり前前の仕事をしただけですよ？

誰も喋らないなら、もう少し。

「あ、応援とかは大丈夫です。葉山先輩から、サッカー部はいつでも手伝うって言うってもらってるので。以上です。」

あなたたちは、この名前に逆らえないでしょ？

嫌われたくないもんね。

嘘は1つも言っていない。

運営委員をすると決めた時、言ってくれた事だ。

「う、うん。わかった。ありがとう。」

ようやく、静かになった会議室。

目玉競技の進捗状況。

雪ノ下先輩が報告する。

男子は問題なし。

はるかどゆっこが動いたのは、女子の競技。

さすがの結衣先輩もため息。

先輩、めんどくさいって顔にでてますよ。
で、雪ノ下先輩、怖いです。

口では丁寧な感じなのに。

先輩の言ってた『氷の女王』。

その意味が少しわかった。

はるかどゆっこが言った事を簡単にまとめると、

『危ない、怪我したくない』

『大会前だから』

だって。今さら？

あんたら、普段練習してんじゃないの？

じゃもう体育祭でなきやいいじゃん。

それに周囲の女子が同調する。

所詮、マネージャーの私は何も言えない。

自分が試合にでるわけじゃないから。

結局、何もできないのかな。

先輩と目が合うと、先輩が小さく首を振る。

そして、雪ノ下先輩に視線を投げた。

すぐに雪ノ下先輩の手が拳がる。

そこからは、凄かった。

今、考え得る対応策。

それを、当然のように述べていく。

ああ、先輩も信頼するはずだ。

あんな事、私には無理だ。

時間をかければ、思いつくかもしれない。

だけど、この数秒で。

1度も止まることなく、完璧に。

私が、何かしようなんて思い上がりだ。

最初からいらなかったんだ。

キツツイなあ。

あの2人がまだ何か言ってるみたい。

でも、頭が理解しない。

周りが立ち上がる。
終わったのかな。

サッカー部の2人が声をかけてくる。
後から行くとだけ伝える。

2人も何か感じ取ったのか、先に行ってくれた。

予想以上にシヨックを受けてるのかな？

先輩にあんな事を言っておきながら。

結局、心配をかけただけ。

葉山先輩を盾にして、逃げただけ。

そんな事が頭の中をぐるぐる回って。

消えなくて。消せなくて。

そんな時だった。

「1年C組の一色いろはさん。で合ってるかしら？」

先ほどまで聞いていた声。

なんで私に？

私は、はい。とだけ答える。

「少し時間をもらえるかしら？部活のほうは大丈夫？」

次は、首肯だけ。

こんな凄い人が、何の用だろう。

先輩に信頼されて、頼られる人。

「もしよければ、首脳部側の会議に参加してほしいのだけれど。無理

には言わないわ。あくまで、一色さんさえよければ。」

そこで、ようやく私は顔をあげた。

さつきみたいな冷たい雰囲気はない。

「どうして、わたしなんですか？わたしには、なにもできません。」

先輩には頼れる貴女がいる。

優しい味方もいる。

私は不要でしょうか？

「そうね。私としても、お礼を言いたいことはあるわ。けど、それは本人に聞きなさい。」

そう言っって後ろを向く雪ノ下先輩。

頭を掻いてる先輩がいる。

すぐ後ろにいたんだ。気づかなかつたな。

「一色。力を貸してほしい。ダメか？」

どうして？先輩も見てたでしょ？

私じゃ、何もできないですよ？

私なんか？

「一色？ちよつ、お前なんで…。」

「あら、話しかけただけで後輩を泣かせるなんて、流石ね？比企谷君。一色さん、大丈夫よ。これでも一応害は…ない、とは言い切れないわね。」

泣いてる？わたしが？

そんなこと…。

え？ホントだ。

なんで？ちよつと待って。

人前で泣くとかホントありえない。

「おい。まず俺が泣かした前提をやめろ。そして、言い切れ。害はない。」

先輩達の夫婦漫才はいいんですよ。

漫才しながら、ハンカチ渡さないで下さい。

私の事、あざといとか言えませんか？

「害はあるじゃない。比企谷菌。」

ヒキガヤ菌？

感染力高そうですね？先輩。

てゆーかこの2人、仲良いな。

先輩のハンカチを借りて、涙を拭く。

人前で泣いたのなんて、いつぶりかな。

しかも、気付かないとか。

「お前それ、小町もだからな。」

また妹さんですか？

ホント、シスコンですね。

「あら、小町さんは小町さんでしょう？あなたと一緒にするのは小町

さんに失礼よ。」

「あの、せんぱいのシスコンは分かりました。とりあえず少しお手洗
いに行つてきてもいいですか？化粧とか、ちよつとですね。」

雪ノ下先輩が許してくれたので、会議室をでる。

会議室では、先輩がまだ何か言つてる。

はあー、なにやつてんだろ。

しかも、なんで泣いたのか自分でもわからない。

トイレの鏡で確認。

幸い、顔はひどくない。

ナチュラルメイクのおかげ。

ただ、まだ少し目が赤い。

あああああああ。

恥ずかしい。

トイレを出ると、先輩がいた。

いや、なんで？

顔見られたくないとか分かりませんか？

先輩は、「おう」とか言つてる。

おうじゃないよ、ばか。

「大丈夫か？てかどうした？」

どうしたんでようね。

自分でもよくわからない。

何て答えればいいんだろう。

「何かあつたなら、今日はいいぞ？言えることなら明日聞いてやる。

だから、無理はすんな。」

「あざとい…。あざといです、せんぱい。大丈夫なので早く戻りま
しょう。」

先輩と一緒に廊下を歩く。

実はこれが初めてだったりする。

ねえ、先輩。

心配してくれるんですね。

話聞いてくれるんですね。

明日が、あるんですね。

迷惑じゃないですか？

ホントはうつとうしくないですか？

「せんぱい？変な事聞いていいですか？」

勝手に先輩の力になろうとして。

それができなくて落ち込んで。

訳も分からず、泣いて。

「わたしは邪魔じゃないですか？迷惑じゃないですか？」

きつと、気を使って頼つてくれて。

先輩の枷にはなりたくないです。

「アホかお前。そう思ってる奴と一緒に飯食わねえよ。」

捻くれた答え。

それと同時に、頭に置かれた手。

大きくて、あつたかくて。

少し、乱暴に撫でられる。

それが、何故か心地良くて。

ズルいなあ。

先輩のほうが絶対あざといよ。

「えへへ。素直に言っつていいんですよー？いろは、隣にいてくれて

正直に、ほら？」

「おう。明日から別のところで飯食うわ。」

先輩の手が離れる。

まだ少しあつたかい。

「わー、ごめんなさい。ごめんなさい。」

ふふっ。あーあ。

泣いた事なんかどーでもよくなっちゃった。

先輩も恥ずかしい思いすればいい。

先輩の袖を掴んで、こつちを向かせる。

人がいなくて、よかった。

「はちまんせんぱい？許して？」

顔を真っ赤に染めた先輩は、自分だけ足早に会議室へ戻っていつ

た。

あの顔で戻っちゃうんだ。

結衣先輩に怒られても、知りませんよ？

廊下の窓を開けて、顔を冷ます。

秋の涼しさを肌で感じる。

少し火照った顔にはちようどいい。

もうちよつとだけ、時間を下さい。

このまま戻ると私も怒られちゃいます。

先輩、何ができるかわかんないけど、私がんばります。

8. 運営委員は辛いです。終

あれから、顔を何度か触れて確かめて、ようやく会議室に戻った私。待っていたのは、零度の視線×2。

ひいい、先輩？助けて。

目だけで先輩を探す。

椅子に座って目を反らす先輩がいた。

「一色さん？」「いろはちゃん？」

「後でね♪」

あー、今日は夕日が綺麗だなあ。

サッカー部はがんばってるかなあ。

サッカー部？

あ、忘れてた。

連絡してないや。

「あの、葉山先輩に連絡だけしてきていいですか？部活は行けそうにないんで。」

あ、連絡しといたよー。

と軽く言う結衣先輩。

そんな逃したくありませんか？

と思つてたら、

「こっちが無理言つて残つてもらふのだから、先に連絡したのだけだ。」

なんか心配した顔してる。

余計な事しちゃった？とか思ってます？

特に結衣先輩。シヨボーンとした犬みたい。

かわいー。よしよししたら怒りますかね？

よしよしとか考えて、さっきの事を思い出す。

知らず、自分の手を頭に乗せる。

やっぱり全然違う…。

そんな事してると、先輩と目が合う。

顔ごと反らされた。

なにそれ、かわい：くない。キモい。
危ない危ない。

眼の腐ってる先輩が可愛い？

ないない。よくてキモ可愛い。

なにそれ、結局どっちよ？

閑話休題（使い方あつてる？）

全員が席に着く。

ここに残っているのは、6人＋生徒会役員。

委員長の相模南先輩。

生徒会長の城廻めぐり先輩。

奉仕部部长の雪ノ下雪乃先輩。

アホの子担当、由比ヶ浜結衣先輩。

そして我らが先輩、ひきがやはちまん先輩。

（実は先輩の漢字は知らない）

あと私、一色いろは。

そして、生徒会の役員さんたち。

凄い面子ですね。

私ここにいていいのかな？

さつきまで、和気藹々としてたのに。

今は空気が重いです。

「城廻先輩、先に1つよろしいでしょうか？」

「あ、そうだね。先に言つとこうか。」

なんだろう。2人ともこっち向いて。

実は呼んでないとか？

もう帰れとか？

怖いよー。

とか思ってたなら、頭を下げられた。

え？なんで？

「一色さん。今日の会議の最初のこと、覚えてる？」

城廻先輩の言葉に私は頷く。

「あの時、一色さんが声をあげてくれなかったら、空気を壊してまで発言してくれなかったら、あの空気はずっとあのままだったわ。だから、ありがとう。」

今度は、雪ノ下先輩。

あんなことでいいーんですか？

私それしかしてないですよ？

それに、

「わたしがしなくても誰か答えてましたよね？結衣先輩とか。だから余計なことしたかなーと思ってたんですけど。」

「一色。それは違う。あの空気の中で、現場班から自発的に声が上がった事に意味があるんだ。だから、全員止まっただろう。俺たち首脳部側も含めて。」

よかった。意味があつたんだ。

先輩に心配かけただけかと思つてた。

「そうだよー！すごかったよ、いろはちゃん！」

結衣先輩が、褒めてくれる。

嬉しい。

先輩の、先輩達の役に立てたんだ。

「あの、一色さん。うちからも。誰もうちの声なんて聞いてないって思つてた。だから、ありがとう。」

相模先輩まで。

こんな事言う人じゃないと思つてた。

でも、私はあなたが許せません。

先輩は、まだきつと苦しんでる。

「別に相模先輩のためじゃないです。それに、わたしは相模先輩に対して、どうしても許せな「一色！」…むー、わかりました。あの空気にムカついただけですよー。」

いいじゃないですか。

言える機会なんてそうそうない。

むしろ、ありがとうなんていらぬ。

先輩の噂を流すのをやめてくれればいい。

言ったら怒られるんだろうなあ。

「一色さん。生徒会を代表してお礼を言うね。本当にありがとう。毎日の準備のこともね。」

「それは、他の2人に言ってあげてください。わたしはあまり役に立ってないです。」

「比企谷君みたいね。」「ヒッキーはい。」

ボソツと言わないで、奉仕部女子！

先輩もなんでちよつと照れてるんですか。

私も照れちゃうんでやめてください。

早く、会議しましょう。

視線を城廻先輩に向ける。

「さて、どうするか、話し合おうか…。」

城廻先輩の言葉で、また空気が重くなる。

「でも、ゆきのんが説明したこと以上のものってない気がするんですけど…。」

先輩もそれに同意する。

私だって、あの時完璧だって思った。

少し沈黙が続く。

そんな中、口を開いたのは相模先輩だった。

「うちが辞めればいいのか…。」
「はあ…。」

結衣先輩と相模先輩が話してる。

正直、どうでもいい。

私には関係ない。

先輩達がやってきたことは、無駄になるけど。

それで、なにも起きないならそれでいい。

結衣先輩は次があるかもって言うけど。

ここで逃げて、次があるの？

文実で逃げて、ここがもう次でしょ？

「…けれど、それでいいの？」

雪ノ下先輩も同意見らしい。

次もいつかもないかもしれない、と。

先輩は黙ってる。

先輩はどう思ってるの？

あれ？何も考えてなさそう？

ホントに考えてなさそう。

誰もしゃべらない。

あるのは沈黙だけ。

どうするのかな。

「相模さんはよくやっているとと思うよ。」

え？

相模先輩も同じ反応。

本人も意外なんだ…。

城廻先輩の話。

意外だった。

生徒会長になるような人だから。

勝手に凄い人だと思ってた。

色んな苦悩があつたんだ。

どの行事でも人前に立って。

でも、自分は凄くないって。

役員のおかげだつて。

だから、相模さんもがんばろうって。

こんな事言える人は充分凄いと思う。

だからこそ、相模先輩に届いたのかもしれない。

どうかな？

って微笑みながら、聞く城廻先輩。

相模先輩はゆっくり頷いた。

ここからは、これからの事。

相模先輩は続投。

ならどうするか。

私、役に立つのかな？

方針は、向こうに折れさせる。

雪ノ下先輩にもぶつぶつ言う人達。

折れるのかなあ。

会議は続く。

説得は無理。まあそうだよね。

人員補強？

「あの、人員補強ならサッカー部とかダメですか？お願いすればみんな手伝ってくれそうですけど…。」

誰も答えてくれない。

え？結構マジメに言ったんですけど。

無視はひどいと思う。

「ああ、一色。それはとりあえず後回しだ。先にサッカー部を呼べば、あいつらは出席すらしなくなる。だから、まずはあいつらを黙らせる。」

みんなが先輩を見る。

どうするんだろう。

そんな事ができるの？

「あいつらと同じ手を使おう。」

「具体的には？」

「相互確証破壊ってやつだよ。」

そうごかくしようはかい？

なにそれかっこいい。

雪ノ下先輩はそれだけで分かったらしい。

また、夫婦漫才してるし。

私は、全くわからない。

多分、結衣先輩も城廻先輩も。

委員長の相模先輩も。

城廻先輩が先輩に問う。

あいつらの体育祭を人質にとる。

びつくりした。本当に。

この人の頭はどうなってるの？

きっと私がいくら考えても、浮かんでこない。
はあ？とか言ってる相模先輩。

本気で殴りますよ。

ようやくみんな理解して。

城廻先輩の言葉が印象的だった。

「比企谷君って、やっぱり最低だね。」

言葉の割に、微笑を浮かべて。

少し、嬉しそうで。

だから、きつと言葉通りの意味じゃない。

そこに込めた意味はわからないけど。

この日はこれで終了。

私は勝負の会議の日に出番があるらしい。

帰り際に先輩が、葉山先輩に棒倒しの大将の事を仄めかしてけって

言ってきた。

有力候補らしいですよー、くらいでいいらしい。

とりあえず、その日の内にメールを送った。

好感触だった。大丈夫でしょう。

ちなみに奉仕部女子2人からは逃げました。

~~~~~

次の日から、また昼休みは先輩とごはん。

放課後は製作物。

その繰り返し。

先輩に相互確認破壊かつこいいです。

って言ったら、超ドヤ顔された。

先輩、その顔はないわー。キモい。

そして、遂に勝負の日。

体育祭前、最後の全体会議。  
会議開始まで数分。

私の任務は、

『俺達が案を仕掛けやすいように敵役に徹しろ。奴らがもし黙ったりしたら、煽れ』

らしい。私に先輩達の敵になれと。

部員の2人も協力してくれる。

私も力になれるんだ。

誰でもできるけど、私が任された。

だから、精一杯敵になろう。

「では、定刻になりましたので全体会議を始めます。」

相模先輩の言葉で幕開けだ。

まずは、進捗状況の確認。

今回は、ここは動かない。

周りの委員の態度は、ひどいけどここは我慢。

そして遂に『チバセン』に議題が移る。

前回、雪ノ下先輩が提案した安全対策。

先輩達が考えたコスト削減。

首脳部でがんばってない人なんていない。

あの相模先輩でさえ、今も堂々と喋ってる。

ここで、はるかどゆつこが動く。

前と同じとか安全がーとか。

馬鹿の1つ覚えかよ。

さて、仕事だ。

「あのーその前の席に偉そうに座ってる先輩方は、ここ数日何をしていたんですかー？散々引つ張った結果がこれ？こっちは毎日作業してんのにー。」

これに、部員2人も乗っかる。

「だよなー」「年上だからって」

これには、周りに対する毒も入ってる。  
これくらい許してください。

部員2人はもろに野球部への愚痴。

これで、周りの声は一層大きくなった。

もう一押しだ。

「委員長ー？だんまりですかー？」

わざと黙ってる相模先輩を攻撃する。

結果、現場班が煽られる。

周りからも、何か言えよーとか聞こえる。

それでも、話さない相模先輩。

それを見て、現場班も黙る。

そろそろじやないですか？

相模先輩がゆつくり口を開く。

これ以上は策はないこと。

不満があるなら体育祭参加は自己責任。

危険があるのは、『チバセン』だけじゃない。

どの競技もケガのリスクは同じ。

だから、体育祭でるな。

部外者は、参加・見学も認めない。

ここで、またはるかどゆつこが茶々を入れる。

それに対して先輩が答える。

完全に校内の行事だーとか。

部外者は参加なしとか。

「えー？じゃ体育祭参加しない人は、休んでいーんですかー？」

これも、先輩から言われてた。

ここに突っ込む人間がいなかったら、私の仕事。

これもすぐに先輩が答える。

修学旅行と同様で自習。

それは、イヤだなー。

仮にそうなくても、参加しよう。

もう私がわざと煽る必要もない。

現場班からは、不満の嵐だ。

私は適当にブルー言つとく。

そして、こつからだ。

先輩の相互確証破壊がこの程度だと？

ふふっ、あまーい。

体育祭出欠確認を事前に全校生徒。

今の委員の状況も全て説明。

現場班がごねてることも。

そのせいで、体育祭ができないかもつて。

そうなった時、生徒達の悪意は？

当然あなたたちですよ。

散々、先輩を多数で傷付けたんでしょ？

多数派に潰されるかもしれない恐怖を知ればいい。

→は、先輩の受け売りだけど。

まだ、ぶつぶつ言ってる。

相模先輩に嫌がらせしたいだけでしょ？

本当は『チバセン』なんかどーでもいんでしょ？

ほら、結局は相模先輩の文句になる。

聞き捨てならないことが聞こえた。

文化祭適当にした？

あんたらもでしょ。

その人？悪く言ってた？

それも、あんたらもでしょ。

嫌いなその人？

先輩だって、好きでいるわけじゃないし。

ダメだ。ごめんなさい先輩。

私は我慢できません。

「……けるな。」

隣のサッカー部員が驚いた顔でこつちを見る。

結衣先輩が先輩を庇う。

先輩が話し始めたのとタイミングは同じだった。  
私は机を思い切り叩いた。

「いや、確かに相模はぜん『バンっ』バカ、「うるさい。」  
うん。意味わかりませんね。

先輩話す。

私机バンっ！

先輩は、私を止めようと「バカ」。

相模先輩の「うるさい」。

先輩は完全に遮られ。

私は出鼻を挫かれ。

視線も、先輩↓私↓相模先輩。

相模先輩は、そのまま話し始めた。

「あんたは黙っててよ。うるさい、いつもいつも何様のつもりなの？」

はあ？

「はあ？」

あ、声に出ちやつた。

雪ノ下先輩も続く。

「相模さん、あなたの今の発言は…「うるさいっ！」

そこからは、子供みたいだった。

恥も外聞もなく、涙も隠さず。

ただ泣きじやくつた。

相模先輩は外へ。

結局、現場班を黙らせたのは、そんな泣き喚いた相模先輩だった。

先輩曰く、感情論には感情論。

ヒステリーにはヒステリーらしい。

先輩の相互確証破壊とは、なんだったのか。

かつこいいのに。相互確証破壊。

あ、ちなみに私は会議の後、先輩にめちやくちや説教されました。

一歩間違えば、お前が喚いて、訳のわからない会議になったとのこ

とです。

その件については、ごめんなさい。

でも、とにかく。  
ようやく目玉競技も決定した。  
運営委員の方針も決まった。  
その後は早かった。  
製作物を男子に任せ、私はミシン。  
私の女子力が少し上がった。  
雪ノ下先輩やヤンキー川崎先輩と衣装作り。  
その後は、ざぎ虫先輩が来たり。  
三浦先輩が来て、ツンデレ？披露したり。  
楽しく時間が過ぎました。  
これだけ頑張ったんだから、体育祭楽しいよね!!

## 体育祭当日

本日は晴天なり。  
てことで色々乗り越えてー。  
やっと、やっとたどりついた体育祭！  
うえーい！うえーい！  
色々がんばったなあ。  
ちなみに  
奉仕部&めぐり先輩 「赤組」  
わたし 「白組」  
どーせ私は敵ですうー。  
この分け方、悪意を感じる。  
ちなみに、先輩方は救護班。  
先輩は、一回だけ走って、ずっとテントらしい。  
いーなあ、私もそっちがいい。  
首脳部はそんな仕事があったなんて。  
あーあ、つまんなーい。

私は遠くから、先輩達を見てるだけ。

あ、めぐり先輩も合流した。

3人で「おー」してる。

めぐり先輩と奉仕部の温度差…。

皆さんもつと乗ってあげましょうよ。

遠目に先輩と目が合った気がした。

気のせいかな。

はあ、なんか遠いなあ。

今日のお仕事。

出場選手を整列させるお仕事が一件。

しかも、割と早い時間。

あとは、葉山先輩でも眺めてよう。

開会式も終わり、体育祭スタート。

私も製作に携わった、入場門。

そして、各プラカード。

それが使われてるのを見ると、嬉しかったりします。

うん。やってよかった。

さくつと仕事も終わり、あとはヒマだ。

あ、先輩走ってましたよ。

絶対、流してたけど。

高校生だし、そんなもんかな。

プログラムも進み、午前中終了。

葉山先輩が大活躍です。

葉山先輩はずつと女子に囲まれてた。

今までの私なら、あそこにいたのかな。

そんな姿を冷めた目で見てる自分がいて。

かといって先輩達のほうは見たくなくて。

なんか先輩が恋しいみたいで嫌じゃん？

ムカつくし、負けた気になるし？

先輩はごはんどうするんだろう。



今日は3人で食べるのかな。

私はいつもの場所に行こう。

先輩のベストプレイス。

静かで、たまに海からの風が吹いて。

ぼつちな先輩が見つけた場所。

こんな所で？って最初は思った。

でも、落ち着く。

1人はやっぱり寂しいけど。

はあ。先輩こないのかな。

いやいや、今日は無理でしょ。

「お疲れさん。なんで首振ってるの？犬？」

「ふえ？せ、せんぱい？なんで…。」

あざとい。とか言いながら腰を下ろした先輩。

私の分の飲み物も渡してくる。

絶対先輩のほうがいいよ。

いて欲しいって思った時に現れるとか。

隣で、元々俺のベストプレイスだろ、とか言ってるけど、そうじゃ

ないですよ。

「そうじゃなくて、こっちにいいんですか？」

「捨てられた子犬みたいな顔してこっちのテントを眺めるバカな後輩

がいなきや、あっちで食ったんだけどな。」

そんな顔してないし。してないはず。

『なんですか？俺はお前の事ちゃんと見てるアピールですか、まだま

だ足りないと思うのでもっとちゃんと見てくれないと無理です。ご

めんなさい。』

いつもの私ならこんな感じのはず。

でも、今はそんな言葉もでてこない。

わざと先輩達のほうを、見ないようにしてたのに。

だから、葉山先輩を見てたのに。

たまにチラッと見てただけなのに。

気付かれてたんですね。

気付いて、わざわざ来てくれたんですね。

ズルいなあ。でも、嬉しい。

「それでわざわざわたしのところに来るとか、はちまんせんぱいは、ほんだけわたしの事が好きなんですかね。もう、しようがないですね。」

ふざけてこんな事言ってるけど、私は嬉しさを隠せてないんだろうなあ。

顔を赤くしながら、アホか。とかあざとい。とか言ってるけど、照れてるのバレバレですよ？

もしかして、本当に私のことが好きなんですか？

そんなこと、あるわけないけど。

先輩には、私より近くに素敵な人達がいるもん。

私じゃ、候補にもならないと思う。

それに、結衣先輩は先輩のこと大好きっぽいもん。

雪ノ下先輩も先輩のことは意識してると思うし。

だから、私なんてほっとけばいいのに。

そう思うのに、そう思ってるのに。

なんでこんなに胸が締め付けられるの？

なんでこんなに痛いのか？

先輩が2人を優しく見てるのが嫌で。

私に向けて欲しいって思う。

2人に対して劣等感が湧く。

先輩の隣に2人がいると、どうしても見たくないって思う。

先輩の隣は、私の場所じゃない。

そう思っちゃうから、見れない。

「せんぱい。好きってなんですか？わたしわからないんです。」

この気持ちはなんですか？

ただの独占欲ですか？

わからないんです。

先輩に対する気持ちが。

「…わからん。俺は全て勘違いだったから。誰かを好きになったこと

なんてないのかもな。まあ葉山は難しい相手だと思うが。時間をかけて知っていくしかないんじゃないか？」

葉山先輩かあ…。

どうなんだろ。

そりゃ、かつこいいし、素敵な人だと思う。

でも、今はそれだけしかない。

葉山先輩の笑顔より、先輩の笑顔がいい。

滅多に見れないけど。

誰にでも見せる笑顔じゃない。

先輩の優しさが表にでたような笑顔。

そんな先輩の顔のほうが、見たいて思う。

「葉山先輩は関係ないです。もし、わたしが時間をかけてせんぱいを知りたいって言ったら、逃げずに近くにいてくれますか？わたしを突き放さずに今まで通り会ってくれますか？」

「もしかして口説いてます？勘違いしたくないので無理です。ごめんなさい。」

こんのアホ先輩が…！

真面目に聞いたのにー！

「茶化さないでください！真面目に聞いてるんです。せんぱいの本音が知りたいです。」

「……。なんで俺なんだ？意味ないだろ。」

なんでこんな捻くれてるかな。

よーし、女は度胸だ。

「意味があるかどうかを決めるのはわたしです。正直に言いますね。せんぱいに対して、わたしは多分好意を持っています。それが恋愛感情なのかわかりません。だから、せんぱいの近くにおいてこの気持ちどつちなのか知りたいです。せんぱいのことを知っていききたいです。」

先輩はポカーンって感じ。

でも、これが多分私の正直な気持ち。

人として先輩が好きかって言われれば、好き。

恋してるかって言われるとわからない。

散々考えてたけど、こういうことだと思う。

あ、これだけは言っところ。

「先に言っときますね。勘違いじゃないですよ。好きなのは確定です。事実です。これが恋なのかわからないんです。わたしも、今まで誰かをちゃんと好きになったことがないからわからないんです。」

だから、お願いします。

本当に勝手だけど、近くにいさせて下さい。

「お前、葉山のことが好きなんじゃないのかよ…。」

そーなんですよねー。

先輩に対しても言っただけだからなー。

でも、さつき気付いた。

葉山先輩の隣に三浦先輩がいても、嫌な気持ちになっただけじゃないんですよ。

張り合ってやろうとかは思っただけ。

恋愛感情はなかったんだらうな。

好きになりたかっただけ。

この人ならっと思っただけ自分を否定したくなっただけ。

だから、ちゃんと口に出して言おう。

憧れだけで、好きっと思っただけ私との決別。

ここからが、スタートだ。

「憧れはあります。あんな女の子の理想そのままな人いませんでしたし。表面だけを見てこの人ならっと思っただけです。それを好きっと思っただけです。せんぱいの良く言う勘違いっやっです。」

なんかスツキリした。

悩みが1つなくなった感じ。

自分で言っつて、すごく納得できた。

「……。俺は、人の好意がわからない。お前がこれだけ言っつてくれても、嘘なんじゃないか、裏があるんじゃないかっと思う。お前の好意が恋愛感情じゃなかったら、どうせお前もいなくなる。恋愛感情だったとしても、きつと信じられない。だから…」

悪いけど、その先は言わせません。

最初からいないほうがいいとか言うんでしょ？

もう遅いです。

「じゃあーじゃあまず友達になりましょう。お互いのことを知って、いろんな事を一緒にしましょう。そして、時間かかってもいいからわたしを信じて下さい。」

先輩は戸塚先輩のことも友達とは言わない。

天使とか言っつて、頑なに友達と呼ばない。

戸塚先輩は、友達つて言っつてたけど。

だから、私先輩公認の友達第1号になる。

「笑わせんな。友達ほど信用できないもんもねーよ。」

「今までのせんぱいの周りと一緒にしないでください。大丈夫です。わたしも友達なんて信用してませんから。だから、お互いにまず、信用できる友達を目指しましょう！」

逃がさないですよ、先輩。

もし、恋愛感情じゃなかったからと言っつて、先輩と離れるのは私もいやだ。

「絶対にあり得ないが、もし俺がお前に惚れたらどーすんだ？絶対にないけど。」

「その時は、ちゃんと告白してください。それに、そうやってあり得ないとか絶対とか言っつてる時点で、多分脈アリです。せんぱい捻くれますもん。せんぱい手出してください。」

私の想像だけだ。

捻くれた性格は、せんぱいの予防線。

踏み込ませないための、踏み込まないための。

だったら、いつか私が壊します。

これが、その為の一步です。

「はやく!!」

先輩は、ビクッと手を出した。

そう、それでいーんです。

私は先輩の手を掴む。

またビクってした（笑）  
きも可愛い。

私もちよつと恥ずかしい。

「せんぱい。まずは、まずはですよ？友達としてこれからよろしくお願ひします。もう握手したから成立ですから。はい、せんぱいとわたしは友達ー。もう解約できませーん。」

先輩は文句言ってるけど、知りません。

てゆーか、今までも友達みたいなものでしょ。

ほぼ毎日、一緒にご飯食べてたんだから。

あ、いー事思いついた♪

「せんぱい。せっかく友達になつたんだから、下の名前で呼ぶってどーですか？はちまんせんぱいはどー思います？！」

「百歩譲って友達は認めても、名前呼びは無理だ。絶対無理。」

あ、友達は認めてくれるんだ♪

素の私も、猫被つた私も認めてくれる、初めての年上の友達。

一回でいいからいろはって呼ばせたい。

あれを使う時がきた。

「はちまんせんぱい？いろはって呼んで？お願い…。」

あ、固まつちやつた。

本気だしすぎたみたい。てへっ。

もうしようがないなあー。

よしよーし。戻っておいでー。

「ば、バキヤじゃねーの？頭撫でんな。あざとい。もーやめて。恥ずか死ぬ。」

ぷっ、噛んだ。バキヤって（笑）

もー可愛いなあー。よしよーし。

ふふっ♪

友達が死ぬ前にやめてあげよう。

あー楽しいなあー。

先輩が来るまで、テンション低かったのに。

ありがとうございます、先輩。

「よしっ！午後もがんばりますかねー。はちまんせんぱいも目玉競技がんばってくださいね。心の中で応援しますから。葉山先輩に勝つたらまたなでなでしてあげます。」

「いらねーよ。お前もケガすんなよ。」

先輩のおかげでやる気回復。

まあ、私も目玉競技だけなんだけど。

午後も、そのまま白組優勢。

やっぱり、葉山先輩がすごい。

うん。葉山先輩は目の保養って感じで。

先輩もかつこ悪くないんだけどなー。

優しく笑った時は、ちよつとドキつとするし。

あれ、かつこいいんだけどなあ。

問題はあの眼だよなあー。あと猫背。

眼は、私は嫌いじゃないからいいや。

猫背は今度思い切り伸ばしてあげよう。

現在の点差は50点。

残すは目玉競技のみ。

先に女子の『チバセン』。

その後、男子の『棒倒し』。

体育祭の勝ち負けはどーでもいいんだけど。

でも、雪ノ下先輩と結衣先輩に勝つチャンス。

よーし、やる気でてきた。

「一色さん、手加減はしないわ。」

「いろはちゃん。負けないよー。」

わざわざ2人も声を掛けてくれた。

ふっ、甘いですねー。

「大丈夫です。雪ノ下先輩には勝てないし、結衣先輩も他の人が狙い

そうなので、私は隠れてがんばりますから。」

そう。白組が勝てば、私の勝ちですから。

私は大将騎でもないし。  
じゃ、がんばりますかねー。

はい。普通に負けました。

こつちには、三浦先輩もヤンキー川崎先輩もいたのに。

あ、私は隠れてたのに、雪ノ下先輩に普通に負けました。

雪ノ下先輩が強すぎる。

なんなんですかね、あの人。チーターや！

あとは、実況が戸部先輩達なのが悪い。

やる気が損なわれます。マジで。

くそう。悔しいですっ！

少しへこみながら、退場する。

雪ノ下先輩達は先輩とハイタッチしてる。

むーずるいずるいずるいー。

と思つてたら、すれ違う時に頭をポンつと叩かれ、お疲れさんつて

言ってくれました。

くっ、あざとい。

気分がよくなったので、大人しく座る。

先輩、がんばってくださいよ。

棒倒しが始まる。

実況は、三浦先輩と海老名先輩。

白組大将が葉山先輩。赤組は戸塚先輩。

王様 vs 王子様。

白組は円陣を組んで気合充分。

赤組はあんまりやる気ない。

まあ、気持ちはわかる。

相手が葉山先輩だもんねー。

そう思っていたら、先輩と話してたざぎ虫先輩が声を張り上げた。

簡単に言えば、男子の僻み根性そのまま。

ちよつとかわいそうになったけど、きもかったです。

でも、何故かそれで士気の上がった赤組男子。



やっぱ、みんな思ってるの？

葉山先輩と先輩が遠目で見つめ合ってる。

葉山先輩は爽やかに笑った。

それを受けて、先輩も少し顔つきが変わった。

やっぱこの2人仲良くない？

なんてゆるーかライバル？

「せんばい。がんばれ。」

号砲が鳴り響く。

両方から何人か飛び出していく。

歓声や雄叫びが入り混じり、私も少しテンションがあがる。

1番テンション上がったのは海老名先輩だけだ。

やっぱり白組のほうがやる気があるらしい。

先輩は、端のほうを悠々と歩いていく。

白組の陣地まで来ても誰も気づかない。

真ん中付近のざぎ虫先輩に気をとられ、誰も先輩をみていない。

見てるのは私と、多分奉仕部の2人。

普段、ステルスとか言ってるけど、馬鹿にできないかもしれない。

と思ったら、先輩は頭に包帯を巻いた。

きたない。さすが、先輩。きたない。

もつと正々堂々と葉山先輩を倒してよー。

まあ、先輩らしいけど。

そのまま先輩が倒して終わりとはならなかった。

葉山先輩はしっかり見ていたらしい。

んー、やっぱりライバル？

聞こえないけど、2人は話してる。

「いろはは、俺がもらう」

「君には渡さない」

んー、イイね。絶対言っていないけど。

そして、先輩が囲まれる。

あー、残念。もう少しだったのに。  
と思った瞬間だった。

「材木座ー」

珍しく先輩が叫び、ぎぎ虫先輩が走り出す。

先輩は、囧だったらしい。

そのまま、勢いをつけたぎぎ虫先輩は、戸部先輩達をまとめて押し  
のけ、ポールに突っ込んだ。

少しだけ静かになり、みんながポールを見る。

少し揺れたあとポールが倒れ、歓声が爆発した。

凄：。ホントに勝っちゃった。

作戦考えたの先輩だろーなあ。

よし、約束通り頭撫でてあげよっ！

なんにしても、先輩もお疲れ様です！

そう思っていた時期が私にもありました。

体育祭から数日。

片付けや事後処理も無事終了。

今は昼休みのベストプレイス。

「あはは。ズルで反則負けって。包帯まで使ったのにー。せんぱいサ  
イコーですね。ぷっ。ふふふ。」

あの後、棒倒しは両方に反則があったということでノーゲームに  
なった。

結果、優勝は白組。イエーイ。

奉仕部的には、依頼を半分しか達成できなかったらしいけど、私は  
すごく、すごく楽しい体育祭だった。

やはり、奉仕部の2人も先輩を見ていたらしく、少しだけ小言を言  
われたらしい。

先輩曰く、誰も見てないと思ってたらしい。

甘いですねー先輩。

私はほとんど先輩を見てましたよ。

「でも、作戦もズルもせんぱいらしくてよかったですよ。ついでに原則になるところも。でも、本当に葉山先輩に勝った先輩にはご褒美のなでなでです。」

逃げようとする先輩を捕まえて頭を撫でる。

やめろ、恥ずかしいとか言ってるけど、知りません。

あー、満足。

先輩は恥ずかしいのか、逆を向いてぶつぶついています。

「せんぱい！わたしも運営委員がんばったので頭撫でてください。早く、はい、どうぞ。」

先輩は、無理とか言ってるけど、この前も触ったくせにーとか言ったら、恐る恐る私の頭に手を乗せた。

えへへっ、これいーなあ。

もういい？って聞く先輩にまだっ！って言って、結局10分くらい撫でてもらった。

「わたし、せんぱいに頭撫でられるの好きですー。これから毎日なでの時間を作りましょう。」

マジナイスなアイデアでしょー。

先輩は嫌がってるけど、気にしない。

おねだりに弱いですからね、先輩。

あ、そうだ。

どうしてもしなきゃいけない事があった。

「せんぱい。友達になったんだから、番号とアドレス交換しましょうー！ラインやってます？」

「ほれ、お前がやってくれ。ラインはしない。既読スルーとかお前怒りそうだし。」

なんで既読スルーする前提なんですか！

私は自分のと先輩のに登録していく。

先輩の電話帳、少なっ！

ふーん、やっぱ結衣先輩は入ってるんだ。

ぱっと見、結衣先輩ってわかんないけど。

なんて登録しようかなー。

ここは、普通に『いろは(嫁)』にしよう。

私のは、『はちまん先輩』です。

先輩にスマホを返す。

「せんぱい。既読スルーしても怒らないんでライン入れましょうよー。連絡しやすいですからー。それにラインなら一言で返信とか普通だから顔文字とかもあんまりりませんよ?」

「え?マジ?。由比ヶ浜とか一言で返すと超うるさいぞ?」

そんな事言いながらスマホをいじる先輩。

むー、私と話してくださいよー。

なんか、ん?とかできた。とか言ってる。

ゲームでもしてんのかな。

先輩が急にコーヒーを吹き出した。

え?なに?

「ゲホっ。お、お前なんだ(嫁)って。アホか。」

あ、今気付いたんだ。

いーじゃないですか。

結衣先輩のもそのままなんだから。

「なあ、ライン入れたけどどーすりゃいいの?」

「せんぱいって可愛いですよ。口ではしないとかが言うのに結局するんだから。」

「よし、ライン消す」「ごめんなさい」

先輩のスマホを借りて設定やらをすませる。

ふふ。私しかいない。ちよつと嬉しい。

結衣先輩はガラケーだもんね。

小町ちゃんもガラケーなのかな。

「あんまりスマホ見ないから、無視しても怒んなよ?あと既読スルーのときはめんどくさい時だから、連続で送ってくるなよ。」

あーはいはいわかりましたー。

先輩がマメなタイプなんて思ってたんですから。

これで、先輩が修学旅行に行ってる間も連絡できる。

私も先輩と京都行きたかったなー。

こういう時、同じ年じゃないとキツイなー。

あと少ししたら先輩は、修学旅行。

文化祭、体育祭、修学旅行。

私も来年は大変だ。

いい修学旅行になるといいですね、先輩。

## 8. 5 先輩の気持ち。

文化祭も体育祭も終わり、秋の夜長を楽しむ。

こんな日は、マツ缶がうまい。

少し欠けた月を見て、1つ息を吐く。

「はあ…。」

最近、なんとというかすごいやつと出会った。

こちらのパーソナルスペースなんて、まるで関係ない。

そいつの意思で、距離感で、ぐいぐい詰めてくる。

最初は、またうっとうしい奴に目をつけられたと思った。

容姿の良さと、洗練された男を虜にする仕草。

所謂、清楚系ゆるふわビッチ。

おそらく中学の頃の俺なら、即落ち、即告白、そして振られていただろう。

本当にあいつと中学の頃に出会わなくてよかった。

そんな印象も今はどこかへ飛んでいった。

あざとい。あざといのだが、ぶっちゃけ可愛い。

外見の話じゃない。いや、見た目も可愛いんだけどね。

そんな後輩との日々を、少し振り返ろうと思う。

始まりはあの屋上。

相模や葉山が去ったあと、空を見上げる俺に急に話しかけてきた。

マジ、最初幽霊かと思ったわ。

あれは驚いた。どこに隠れてたんだよ。

どうしようもなく、あざとかった。

突き放しても話しかけてきて。

俺の行動の意図を探ってくる。

あげく、告つてもないのに振られ、気持ち悪いだの根暗だの。

ただ、最後のあいつの劳いの言葉だけは、俺の気分とかを察してか  
けてくれたつてのが分かった。

あざとかったけどな。

次が確か休み明けだったか。

あいつは俺の噂を聞いて、何故か怒ってた。

話した時間は10分足らず、そんな俺の噂を聞いて怒る。

俺の行動を少し見たくらいで、勝手にわかった気になってんじやねえよって思った。

勝手に理解した気になって、勝手に怒ってる。

ああ、勘違い女なんだなって本気で思ってた。

噂の真相を調べる？

お前みたいなのやつに限って、明日にはみんなと噂で盛り上がってるだろうが。

案の定、次の日は現れず、クラスで俺の文句でも言ってるだろうなあとか考えてたんだけどな。

でも、そうじゃなかった。

偶然らしいが、元文実の女子を見つけて、文実で何があったのかを本当に全て聞いたらしい。

そして、また俺の前に現れた。元文実の女子を引き連れて。

あー遂にきたか。直接文句を言いに来るやつが。

その辺の奴よりマシかななんて思ってたんだが…。

お礼を言われた時は、少し驚いた。

そして、少しだけ嬉しかった。

ああ、分かってくれた奴もいたんだと思った。

俺の真意はどうあれ、そんな奴が文実にいたんだなと思った。

だからこそそんな奴が、俺のせいで誰かから悪意を向けられるのだけは、どうしても避けたかった。

だから、藤沢のお礼は受け取れなかった。

あいつ、人に話してなければいいけどな…。

そして、あざとい後輩。

俺が何を言っても諦めず、自分の気持ちを真正面からぶつけやがる。

待て待て、あざとさ忘れてきてんぞ。

知った気になって怒ることの何が悪い。  
俺のことを悪く言わない人がいて嬉しい。

それも全部、勘違いで切り捨てるのか。

私達は、敵じゃない。

もうね、びつくりしたわ。

嘘を言っているようにも見えない。

泣きそうな顔で、俺に反論するヒマも与えず、馬鹿みたいに真っ直ぐにさ。

文化祭直後から、周りは敵だらけだった。

クラスでは戸塚と由比ヶ浜以外は、俺を白い目で見てる。

廊下を歩けば、不快な視線に嘲笑。

落ち着けるのは、部室のみ。

そんな中で、顔見知りだったわけでもない、学年の違う女子2人。  
そんな奴らに、少しだけ救われた気がした。

そしてあざとい後輩は、ベストプレイスに入り浸る。

いや確かに来るって言ってたよ？

でもさ、ほぼ毎日来るんだよ。

毎日は来ないって言ったくせに、雨の日は来ないから毎日じゃないとか屁理屈こねやがって。

そういう屁理屈は、俺の分野だったの。

最初のほうは何度も、俺といるなって言ったんだよ？

「嫌でーす♪」じゃねえよ！ボケ。

言葉の後ろに音符が見えてんだよ、あざとい。

そのくせ、急に真面目に「迷惑ですか？」とか聞いてきやがる。  
ずるい、さすがいろはす、ずるい。

あいつは小町と少し被るんだよ。

迷惑だなんて言えるかアホが。

そして始まる俺への質問大会。

なに？あの子ヒマなの？

俺の事聞ってるヒマがあつたら、男落としてこい。



好きなものを答えたら、シスコンと言われ。将来の夢を答えたら、ダメ人間と言われ。

成績（国語）をドヤ顔で答えたら、ひかれ。

数学の点数を答えたら、馬鹿にされ。

八幡のライフは0だったわ。マジで。

そんなある日、戸塚が練習を切り上げやってきた。

少し離れたところから、「はちまーん。」と手を振る戸塚。

もうね、マジ天使。好きだ！結婚しよ。

バカ後輩は、俺の名前で笑ってた。

うん。絶対に許さないノートに書いたわ。

俺の戸塚への対応を見て、ドン引きする後輩。

俺との関係を聞かれて、ヒ・ミ・ツです♪とか言い出した時はさすがにデコピンしたわ。

戸塚がお前に影響されたらどうしてくれんだ、バカ後輩。

ん？小悪魔戸塚？なにそれ最高じゃん。がんばれ、アホ後輩。

戸塚が俺との関係を聞かれて、最高の笑顔で

「八幡は僕の友達だよっ！」

って答えた時は、抱き締めようかと思った。

そして、彼氏じゃないのかと絶望した。

大丈夫。まだ時間はある。これからだ。

ホモ？なに言ってるんだこのバカ後輩は。

「戸塚の性別は戸塚だろー！」って言ったら、ドン引きされた。解せぬ。

そして、体育祭運営委員。

前より騒がしい昼休みを過ごしていたある日、バカ後輩は来なかった。

べ、別に寂しかったわけじゃないんだからねっ！

気持ち悪いな、うん。

少し物足りないなとか思い、あの後輩に毒されていることに気付く。

マジか…。あのぼっちである事に誇りを持っていた俺が…。

ちよつと、本気で距離置こうかなどと考えていた放課後。依頼で向かった会議室に奴がいた。

おい！お前こんなとこにいるキャラじゃねーだろうが！目が合つて、思わず顔を顰めた俺は悪くない。

そして、相模を見た瞬間の顔つたらもうね。

怖いよいろはす。横のサッカー部員ひいてたからね。

俺もその後睨まれたけど。

『なんでまた相模と仕事してんだ？あ？』

多分こんな感じ。目が超怖かった。

目玉競技を決める時、あいつ大綱引きとか言つてたっけ？

俺は、少し笑いそうになった。

大岡はチェリーの時に、俺を見たのは忘れてねーからな。

あの時の優しい視線は辛かったなあ。

先輩もでしょ？みたいな。

次の日のベストプレイス。

色々と問い詰められた。

なんでまた相模といるんだとか。

あいつは心配してたんだらうな。

いい奴じゃん、いろはす。

まあ、悪い奴じゃないのは分かつてたんだが。

相模に余計な事すんなよって、釘はさした。

結局、この日以降も距離を置くことはできなかった。

だって、どうせ運営委員で会うんだぜ？

みんないる前で、なんでですか！とか言いかねん。

あの場には、相模やらゆっこやらいたし。

あいつは巻き込みたくなかった。

んで数日後。

由比ヶ浜に連れられ、製作物を手伝いに行つたとき、あいつは意外にもちやんと仕事をした。

どうせ、男共をうまく使ってたろうと思ってたんだけどな。  
由比ヶ浜によれば、ちゃんと毎日仕事してたらしい。

あのときは、少し見直した。

由比ヶ浜にバレるとめんどいなあとと思って、知り合いじゃないことにしたら、由比ヶ浜のパンツ見るとか言いだしやがって。

あれ絶対仕返しだろ、あのバカ。

その後も、ヒツキー先輩だの八幡先輩だの。

ただ、八幡先輩はめちやくちやグツときた。

あれはやばいわ。

しかも、あいつあれから味をしめてちよくちよく使ってたきやがる。

あのとき、なんで由比ヶ浜に俺らのことをあいつが隠したのかはわからん。

次の日は、すげー濃い1日だった。

朝から、靴箱にはゴミが入れられてたし。

まあ戸部の靴箱にパスしたんだが。

昼はバカ後輩。

もーなんなの、あいつ。

なんで普段あざといくせに、たまに思いきり感情的なんだよ。

あの日はヤバかったわ。

自分にも何かできないかとか。

俺が傷つくのはイヤだとか。

まあ、文実ほどひどくないにしろ、あのときの運営委員もなかなかヤバかったしな。

挙げ句の果てには、依頼するから相模を放って体育祭を楽しめとか。

んで、見てるだけはイヤだから手伝わせろだと。

どんだけ心配してんだよ。

お前は俺の母ちゃんかよ。

あれー？おかしいなー。実の母ちゃんにはそんな心配されたことないぞー？

あれ、目から汗が…。

まあ、嬉しかったんだけどな。

そりやそうだろう？

あいつからしたら、偶然会っただけの、ちよつとおかしい先輩なだけだっただろうに。

おい、ちよつとじゃねえだろ、とか言った奴。出てこい！

あ？ふざけてねえと恥ずかしいんだよ。言わせんな。

俺からしたら初めてできた後輩で、その後輩があんなこと言ってくるんだ。

そりや、嬉しいだろ。

不覚にもちよつとウルつときたくらいだわ。

んで、放課後のあの会議な。

会議が始まる前に、雪ノ下には話しといた。

現場班にも、味方を作ろうって。

終わったら紹介するってことで、一応どいつかは教えておいたが。

早速やらかした。

マジでバカかと思つたわ。

周りはほぼ先輩の状況で、全員黙らせやがって。

まあ、感謝してないこともない。

で、会議が終わつたのに俯いたまま動かない。

雪ノ下が話し掛けても、頷くだけ。

顔を上げて、話し掛けたら泣きやがって。

どんだけびっくりさせんだよ。

心配？してたに決まつてんだろ！

むしろ、現場班になんかされて泣いてるなら、全員報復してやるって思つてたくらいだわ。

あいつが化粧直しに行ったのを追いかけて。

あ、ストーカーじゃないし、トイレからはちゃんと離れてたから。

出てきたと思えば、迷惑じゃないかだの邪魔じゃないかだの。

だったら、力を貸せなんて言わねえだろ。

俺に対しては心配しすぎだし、たまにわけわからんこと気にするし。

おい、ヤメろ。俺。あの上目遣いの八幡先輩を思い出すな。

戸塚戸塚戸塚戸塚。ふー落ち着いた。

おい、いろはすでてくん。もう諦めよう。

そこからは、あいつも首脳部の会議に加わって。

キョロキョロしてるあいつは、かわいい、ゲフンゲフン、ちょっとおもしろかった。

あいつが、みんなからお礼を言われて。

そこで相模に突っかかろうとしやがって。

あいつあの時止めなかつたら、絶対俺の噂のこと言うつもりだったろ。

なんでめぐり先輩に俺みたいな受け答えしたんだよ。  
奉仕部2人も俺みたいとか言いやがって。

あれからは、いつも通りだったな。

あいつとベストプレイスで昼飯食って、放課後は仕事して。

おい、学生のうちから社畜じゃねえか。

あいつは、相互確証破壊がえらく気に入ったらしい。

かっこいいって言うからドヤ顔したら、ガチでひかれるってどういうことだよ…。解せぬ。

そして、最終会議の日。

あいつとは、事前に打ち合わせしておいた。

ちゃんと、注意もした。

相模自身に反感が集まれば、首脳部の他の人間にも飛び火するかもしれない。そうなくてもキレるなど。

途中までうまくやってくれて、俺もあいつに頼んどいてよかったわーとか考えてたのに。

あいつ煽り耐性低すぎない？

思い切り机叩きやがって。

大したこと言われてなかったろ…。

あいつも相模も、俺が話すときに被せてくんじゃねーよ。

あいつは、相模のセリフにも反応しやがった。

はあ？じゃねーから。

ちゃんと聞こえてたから。あいつから出たとは思えないような声だったけど。

あいつを怒らせないようにしようと思いましたまる

そこからは体育祭まで早かったわ。

毎日、毎日、仕事。マジ社畜。

あいつは、いつの間にかチバセンの衣装作りに参加してた。

川なんとかさき、略して川崎にびびりながらも、真面目に働いてた。以上。

で、体育祭な。

朝、あいつを運営委員で見かけた時は、これ以上ないってくらい元氣そうにした。

なのに、競技終わって戻る時に見たら、ショボーンみたいな顔してやがった。

葉山を囲んでる集団に入るわけでもなく、俺らのテントのほうを見たり葉山のほうを見たり。

最近、運営委員で忙しかったから、葉山との距離感を掴み損ねてんのかねーくらいにしか、思ってたなかったのにな。

まさか、あんなこと言われるなんて想像もしてなかったわ。

少しだけ、本当に少しだけあいつのことが気になって、俺もベストプレイスへ向かった。

最初は、様子を見て戻るつもりだったんだけどな。

泣いてたわけじゃない。

それなのに、ベストプレイスで1人ぼーっとしてるあいつを見て、何故か、家出して泣いてた小町を思い出した。

しようがねえなあと思つて近付いて行ったら、急に犬みたいにブン首振つてた。

もうね、そつからはあれだよあれ。

急に、好きつてなんなのか、だと。

なんで俺に聞くんだよつて思つたわ。

黒歴史しかない俺に分かるわけねえだろ。

それが分かつてれば勘違いなんかしてねえよ。

それが、俺の正直な気持ちだった。

本気で葉山のことだと思つてたんだ。

だからあんな顔してたんだなつて。

それなのに、あいつは俺のことを知りたいつて。

逃げずに側にいてくれるかつて。

ふざけて、話題を変えようとした。

あそこですぐに無理だと言えないのは、俺の弱さなんだろうな。

思い切り突き放すべきだったのか。

もうそれも、今更なんだが。

そこからは俺自身、色んな感情でぐちゃぐちゃになって、全てが後

手に回つてた。

いや、あいつに対してはいつもそうだったな。

感情で真つ直ぐぶつかつてくるあいつに、勝てたことなんて一度も

なかった。

いつもはあざといくせに、計算高くてクレバーなくせに、急に感情

に任せて言葉を紡ぐあいつを、止められたことなんて一度もなかった

じゃねえか。

だから、ふざけた時点で俺は負けてたんだらう。

いつもは無駄に働くくせに、こんな時はちつとも役に立たねえな、

俺の脳みそは。

あいつは、一色いろはは、俺に好意を持つてるらしい。

それが恋愛感情なのかわからない。

だから知りたいんだ、つて。

自分の気持ちも、俺のことも。

あの時の俺は間抜けな顔をしてたと思う。  
初めて、他人から直接伝えられた好意。

こんなにも、嬉しいもんなんだな。  
こんなにも、怖いもんなんだな。

その時も、思い出してる今も同じ気持ちだ。

勘違いだらって言わせてすらもらえなかった。

あいつ先読みしすぎだろ。

でも、それはいそうですか？って言える人間じゃないんだよ、俺は。  
疑って、裏を読もうとするのが、俺なんだ。

いつもならドツキリだと思うんだろう。

何の冗談だって言えただろう。

あいつが話してる顔を見て、朝からのあいつを見ていて、それが言えるほど、俺は腐ってなかったらしい。

それでも、結局俺は葉山に逃げた。

あれだけあいつの口から聞いてたんだ。

これで、止められるって思ってた。

だって、あいつが葉山への好意を完全に否定するなんて思わないだろう？

まさか、そっちを勘違い扱いとか誰が予想するんだよ。

だから、俺もしつかり伝えようと思った。

伝えようって、突き放そうって。

最後まで言わせてすらもらえなかったけどな。

本当は、もう2度と俺に関わるなって、言うつもりだった。

お前が俺といっても、無駄になるだけだつて。

だったら、もう関わらないほうがいいだろうって。

それを、見透かしたように遮られて、友達になろうと言われて。

私も友達なんて信用してないから大丈夫、って何が大丈夫なんですかね？

てゆうか、友達ってなんだよ？いた事ねえから分かんねえよ。

結局、俺のクソみたいな反抗は全て流され、封じられて、自分でもわけのわからない仮定の話は、あいつのポジティブシンキングで潰さ



れた。

で、結局は力技だぜ？

何あれ？ズルいよね？

あいつの声にビビって、手を出してしまった俺は悪くない。

そして、握手で契約が成立してしまった。

あいつバカかよ。解約できませーんってなんだよ。

クーリングオフくらい導入しろよ！

そうやって詐欺が増えるんだぞ！

最後はあれだ、俺にだけ効くチート技だ。

もうね、上目遣いでウルウルお目目であんな事言われたら、そりや

無理だろ。ふざけんな。

ハチパンマンは、顔が熟れたら力がでないんだぞ。

馬鹿後輩が、頭まで撫でやがって。

本当に恥ずか死ぬかと思いました。

いや、思い出してる今もあれよ？けっこうヤバイぜ。

クソツ、おい、出てくんな一色。

あ、恥ずか死ぬと静死ぬって似てるよね。

平塚先生ええええ！死んじやイヤあああ！

よし、落ち着いた。

平塚先生。貴女の事は、一生忘れません。

長々と自分語りをしてきたが、結局何を言いたいかっていうとだ

な、あれだよ、一色が可愛いってことだ。

もーなんなんだよ、あいつー。

いや、見た目も可愛いよ？でも、そこじゃないんだよ。

わかるだろ？わかんない？いや、わかれよっ！

今まで小町以外いなかったんだよ。

俺のために怒ってくれて、近くにいたいって言ってくれる人間なん

て誰もいなかったんだ。

俺のために何かできないかなんて、言われた事もないんだよ。

本気で突き放せるわけないだろ。  
俺が傷付くことを、あれだけ嫌がってくれる後輩を傷つけられるわけないだろ。

そんな後輩が可愛くて仕方ないんだよ。

って話だ。

## 9. 勝手な後輩。

文化祭・体育祭も終わり、秋も終盤。

ブレザー着ないと、少し寒くなってきた。

もう、すぐそこまで冬が近付いてきてる。

冬に入れば、クリスマス・年末年始・バレンタイン。

色んな行事がどんどんやってくる。

少し先の私が多くなってるか分からないけど、少し楽しみだ。

先輩達2年生は、あと1週間で修学旅行。

3泊4日で京都へ。

しかも、そのまま土日に入るため、先輩とは1週間近く会えないことになる。

むー、私も学校休んで着いていつちやダメかな。

だって、4日間も1人でご飯だよ？

藤沢さんをお願いしようかな。

先輩とはいつも通りです。

ベストプレイスと一緒にご飯を食べて、ちよくちよく頭を撫でてもらってます。

変わったことと言えば、先輩の態度が少しだけ軟化？した事と毎日ラインをしてるくらい。

とは言っても、先輩は先輩です。

ラインの返事は、基本一言というか2文字。

起きてます？って送れば、『おう』。

朝の挨拶を送っても、『おう』。

少し寒いですねって送れば、『だな』。

いや、嬉しいんですよ？

あれだけ返さないみたいな事言ってたのに、ほとんどちゃんと返してくれるし。

ただ、ただね、もう少しなんかないですか？  
せめて、おはようくらい送ってほしいです。

って言ったら、次の日から『おはよ』になりました。  
ちよつとだけ、進歩しましたね♪

あとは、何も言わなくてもたまに撫でてくれます。

その時の先輩の顔がすごく好きです。

好きなんですけど、なんとというか私を撫でるお父さんにそっくり  
で、愛娘扱い？

喜ぶべきか、悲しむべきか。

まあ、嬉しいんですけどね！

そんな日常を送っていた私ですが、最近許せない男がいる。

誰だかわかります？

『と』から始まり、『べ』で終わる男です。

そう、戸部です。

もうね、呼び捨てでいいんです。

ホント、うるさいんですよ。

部活中に『ナニタニ君、ナニタニ君』って。

誰かがファウルをすれば、

『いや〜、今のはないわ〜。それナニタニ君だよ〜』

ってね。黙れ戸部。

先輩に聞けば、教室でもそんな感じらしい。

先輩はちよつとお馬鹿さんなので、

『俺がクラスのブームの中心にいるんだぜ』

とか言ってた。

そうやって、気にしないようにしてるんだろうけど。

だから、私は戸部に怒ってます。

最近はその人のドリンクだけ水道水です。

準備するだけでも、感謝してよ。

怒ってても準備する私、マジ天使！

最近、サッカー部にいることに意味があるのかなんて思ってたります。  
します。

葉山先輩目当てで入った部活。  
マネージャーも私だけじゃない。

このままいる意味あるのかな。

まあ、辞めたとしても、先輩も部活だから一緒にいたりすることはできないんだけどね。

だから、これは保留です。

今は放課後、部活の準備中。

珍しく、少し葉山先輩が遅れてきた。

遅れたって言っても、まだ始まってないけど。

ただ、戸部先輩が来ません。

いつも、葉山先輩にくつついてるのに。

練習が始まって、少し。

ようやく戸部先輩があらわれた。

べーべー言いながら、部室に駆け込む。

なにしてたのか聞くと、はぐらかす。

ほー、遅れといてそれですか。

私が怒る権利もないんですけどね。

「隼人君、ワリー。助かったわー。」

とか言いながら、練習に混ざる戸部先輩。

そのとき、知ってる名前が戸部先輩の口から聞こえた。

「結衣達も引き受けてくれて、マジよかったわー」

結衣達？引き受ける？あ、奉仕部…。

依頼かな？戸部先輩が？

てゆーか、戸部先輩も奉仕部知ってるんだ。

2年では、割と有名なのかな。

ふーん、戸部先輩でも悩むことあるんですね。

何か変なものでも食べたんだらうか。

まあ、戸部先輩の悩みなんてどうでもいい。

それで先輩に何もなければ。

うーん。先輩に聞いても、教えてくれないよね。

探るべきだろうか。

時期的に考えれば、修学旅行絡み？

戸部先輩、奉仕部、修学旅行。

ここから導きだされるのは……、

うん。全然分かりません。

とりあえず様子見かな。

それから、数日。

気付いたことがある。

戸部先輩が先輩をネタにしなくなった。

あの遅れた日から、急に。

ちなみに次の日も、遅れてきた。

真面目にして下さいよ、もう。

そして、馬鹿みたいにテンション高い。

先輩は、あまり変化ない。

京都自体は、割と楽しみらしい。

お寺とか小説の舞台とか。

あと小町ちゃんの合格祈願とか。

楽しいといーですね、先輩。

ちなみに、依頼のことは聞いてません。

いつも個人情報とか言って、依頼の内容までは教えてくれないので。

今日は修学旅行2日前。

明日は前日ということもあり、2年生は部活休み。

戸部先輩に探りを入れるなら、今日がラストチャンス。

先輩が無理をしなければどうでもいいんだけど、依頼のためなら後先省みないのが先輩。

心配しすぎかもしれない。

知って安心したいだけ。

んーどうしよう…。

よし！

このまま先輩がいけない間もモヤモヤするくらいなら、確かめよう。

「戸部せんぱーい、部室から荷物持ってくるの手伝ってもらってもいいですかー？」

戸部先輩は、こういう時ホント使える。

まあ、素直に言えば、いい人である。

今も、すぐ行くわくとか言って、文句も言わない。

部室に入って、すぐ切り出す。

「戸部先輩、奉仕部にどんな依頼したんですか？あ、そのも持っていきます。」

戸部先輩は、「つべー、いろはす何で知ってるん？」とか言いながら、荷物を取ってくれる。

私も、体育祭のときにちよつと関わりがあつた事を簡単に伝え、誰にも言いませんからと聞き出す。

何度かお願いして、やつと教えてくれた。

修学旅行で告白すること。

相手は、なんと海老名先輩。

そして、そのサポートを依頼したこと。

珍しく、照れながら話す戸部先輩。

ちよつとキモいですよ？

ただ、1つだけ言つところ。

「戸部先輩。振られたくないのは分かります。でも、絶対に成功する告白なんて多分ありませんよ？」

戸部先輩も分かつてはいるらしい。

だから、少しでも確率を上げるために、依頼したらしい。

まあ、これならサポートだけだし、先輩が何かしちゃう心配もないんだらうな。

厄介そうな依頼じゃなくてよかった。

「わかっているならいいです。戸部先輩も頑張ってくださいね。一応応援してますから。あんまり、奉仕部に迷惑かけちゃダメですよ？」

「おう！まーじいろはすいい奴だわ。ヤル気でたわ。」

まあ、一応お世話になってますからね。  
先輩のこと、ネタにしたのは許さないけど。  
でも、奉仕部って恋愛相談みたいなのも受けるんだ。  
ちよつと、意外だなあ。  
雪ノ下先輩とか、受けそうにないのに。

修学旅行前日。

先輩と最後のご飯。

まあ、本当に最後ってわけじゃないんだけど。  
明日から、半分は1人だもんな。

半分は、藤沢さんが一緒に食べてくれます！

藤沢さんは、毎日でもいいよって言ってくれたけど、藤沢さんにも  
クラスの友達がいるし。

さすがに悪いかなって。

あーやだなー。寂しいなー。

そんな思いをのせて、先輩を見る。

先輩もどうした？って気づいてくれた。

「わたしも、京都市行きたいです。せんぱいと一緒に。正直、ちよつと寂  
しいなって。」

先輩は、短く息を吐いて、私の頭に手をのせた。

もう、優しいなあ。

落ち着く。ちよつとだけ寂しい気持ちや和らいだ。

「まあ連絡もするし、おみやげも買ってくるからそれで許せ。」

ふふっ。先輩が悪いわけじゃないのに。

でも、連絡してくれるんですね。

おみやげは、楽しみにしてますねっ！

「約束ですよ？おみやげは食べ物じゃなくて、形に残るものがいいで  
す。せんぱいからの、初めての贈り物なので。」

そんな大層なもんじゃねーだろ。とか、俺センスないぞ？とか言っ  
てるけど、いいんですよ。

先輩が私に選んでくれれば、それで。



多分、それだけで私は嬉しいから。

そこからは、夜電話してもいいかとか、写メも送ってとか色々話してたら、昼休みもあと僅か。

写メは送ってくれないって。

私たちも来年京都だったら、楽しみが減るからって。

電話は、気が向いたらだって。

まあ、そーですよね。

修学旅行の夜とか、楽しみの1つでもありますもんね。

先輩はどうか知らないけど。

「でわ、八幡せんぱい。気を付けて京都を楽しんでください。いろはは、千葉であなたを待っておりまあす。」

あざとい。と言いながら、頭を撫でてくれた先輩。

どっちがですか。

でも、本当に気を付けて、行ってらっしゃい。

この修学旅行が、先輩の大切な思い出になることを、心から願っています。

私の中にもいないのは、少し寂しいけど。

—————

今日は、先輩が修学旅行に行つて3日目。

昼休みがすごく長く感じる。

特に1人でご飯食べた日。

今日も1人だけ。

いないのはわかつてるのに。

先輩を探す、私がいいた。

本当に寂しかった。

藤沢さんの存在は、ホントにありがたい。

こうやって、いない時に気付くんだな。  
先輩の存在がどれだけ大きいのか。  
変わらない日常が、どれだけ大切なのか。  
体育祭の日に、突き放されなくてよかった。  
無理矢理に近かったけど、先輩が離れていなくて本当によかつた。

先輩。無事に、帰ってきて下さいね。

先輩からは、一応毎日連絡がきてます。

新幹線のなかの戸塚先輩が、可愛かったとか。  
人が多くて疲れたとか。

平塚先生が可哀想とか。

戸塚先輩とお風呂入れなかったとか。

マツ缶がないとか。

戸塚先輩が可愛いとか。

どんだけ戸塚先輩のこと、好きなんですかー！  
もつとこう、寂しくないか？とか。

お前がいないとダメだ！とか。

こう、あるでしょ？

確かに先輩がそんなこと送ってきたら、別の人が送ったのかつてちよつと疑うけど。

にしても、まあ楽しめてるのかな。

戸塚先輩には、私も感謝ですね。

クラスでも、この修学旅行でも、先輩の近くにいってくれる戸塚先輩。本当にありがとうございます。

そんな事を考えていると、スマホが震える。

『小町の合格祈願ナウ』

ふふ、先輩がナウって。

どんな顔で打ってるんだろう。

想像したら笑える。

『小町ちゃんが、私の後輩になるように、私の分まで祈って下さいね』

？』

多分、すぐに返信はこない。

先輩だもんね。しょうがない。

『まかせろー！』

あ、きた。

珍しく、！なんか使っちゃって。

小町ちゃんと戸塚先輩に勝てる気がしない。

好きすぎでしょ。

私のことも、そこに入れてもらえるようにがんばろう。

今日は、日曜日。

結局、先輩からの連絡はそれ以降なかった。

先輩が帰ってきたはずの日も、その次の日も。

一回だけラインを送ってみたけど、返ってこない。

連絡先を交換したときに言われたことが気になって、それ以上送ることができずにいた。

嫌われた？でもなんで？

最近は、少し距離も近くなったと思ってたのに。

もし、嫌われてないなら、先輩に何かあったのかな。

あつたとすれば、3日目？

夜は、一回は連絡してくれてたし。

修学旅行先で事故とかなら、学校も大騒ぎのはず。

あー、ウザがられるの覚悟で先輩に電話してみよう。

すー、はー。よし。

でないなー。

さすがにもうお昼だし、起きてるよね？

『おう。どうした？』

あ、でてくれた。とりあえず無事でよかった。

「すいません。ずっと連絡なかったの、ちよつと心配で。でも、事故とかじゃなさそうなんで、よかったです。」

『ああ、わるい。ちよつと疲れててな。』

んー。まあしょうがないかな。

それにしても、いつも以上に声に張りが無い。

「そうですね。もしかして寝てましたか？その、せんぱいが喋りたくなかったら、切りますよ？」

先輩の負担にはなりたくないしなあ。

一応、無事は確認できたし。

『起きてたぞ。なに？そんな嫌そうか？』

嫌ってわけじゃないのかな。

やっぱり、なんかあった？

「いつも以上に、声に張りが無いというか、元気が無いというか。嫌じゃないならいいんですけど。あの、もしかして修学旅行でなんかありました？」

『……なんもねえよ。』

嘘ですね。

先輩は、こっちが予想外の事を言わない限り、返答は早い。

それくらい私も分かりますから。

でも、それを今の先輩に言っただけいいのかな。

「わたしには話せませんか？言いたくないのですか？」

『だからなんも嘘はつかないで欲しいです。話したくないなら話さなくていいです。1つだけ答えて下さい。戸部先輩の依頼が関係していますか？』

『っ……なんでお前が知ってる？』

「ちよつと用事ができたんで失礼しますね。また、明日のお昼に。」

勝手に探ったのは、後から怒ってください。

そして、勝手に今から調べるのも後から怒ってください。

先輩の返事を待たずに電話を切る。

そして、そのまま別の人に電話する。

もしかしたら、本当に嫌われるかも。

でも、あんな先輩の声聞いたことない。

だから、ごめんなさい。

『うえーい。いろはすどした〜？』

元気ですねー、戸部先輩。

「あ、戸部先輩。お疲れ様です。あ、告白どーでした？彼女持ちになりました？ちよつと気になってたんですよー。」

フラれてはなさそう。

フラれてたらウザいくらい落ち込みそうだし。

『あくそれ聞いちやう？早速すぎっしょ？それがさく、告白できんかったんよー！する前にされた的な？』

ええ!?

まさかですネ。そんな感じに見えなかったのに。

「海老名先輩も戸部先輩のこと好きだったんですか!？」

『あく、違っしょ。俺が告るまえに他の奴が横から告ったんよー！マジないわー、ホントないわー。』

は？いやいや、まさか。

先輩じゃないよね？

「そ、そうなんですネー。」

『それまでも結構助けてくれたんよ。アドバイスとかさく。マジ感謝してたんよ？俺が緊張してる時も声かけてくれたし。なんだヒキタニ君めっちゃいい奴じゃくんとか思ってたのに。ヒドクね？』

もう、その後は適当に相槌を打っただけだった。

最後に、口止めされて電話を切った。

葉山先輩が口外するなって言ったらしい。

私は、告白する事知ってたから話したみたい。

え、どうゆうこと？

先輩が海老名先輩に告った…。

戸部先輩の話では、フラれたらしいけど。

ダメだ…。これ夢かなあ。

あー、ちゃんと痛いや。

「ねえ？いたいよお…。せんぱい。」

言ってくれてもよかったじゃん。

好きな人がいるなら、教えてよ。

私バカみたいじゃん。

んーん、バカなんだ。

先輩のためって言い訳して。

勝手に依頼を調べたりして。

結果も勝手に調べて。

それで勝手に落ち込んで。

先輩からしたらいい迷惑じゃん。

だから、これは自業自得だ。

私が悪いのに。

そう言い聞かせてるのに。

勝手に溢れてこないでよ。

泣く権利なんかないじゃん。

お願いだから、止まってよ…。

10. 勝手な後輩。 暴走編

目を開けたら、少し薄暗かった。

あーなんだ、夢だったのか。

目をこすると、涙が手についた。

現実でも泣いてんじやん。ダサっ。

スマホを探して、時間を確認する。

夕方の5時すぎ。

おそるおそる履歴を確認する。

はは、夢じゃなかったかー。

そっか…。

泣き疲れて寝ちやっただけだったんだ。

結局、自分勝手な私も現実で。

先輩が、海老名先輩に告白したのも現実で。

修学旅行前から全部夢だったらよかったのに。

先輩、本当にごめんなさい。

でも、キツイなあ。

こんなので実感させられるんだ。

これは、恋だったんだ…。

ちゃんと、先輩のこと好きだったんだ…。

でも、もう叶わないんだ…。

もう、また涙でてきた。

できれば、ちゃんと告白して終わりたい。

好きな人がいるのに迷惑だよ。

でも、戸部先輩の告白を邪魔して告白するなんて、先輩も熱いところあるんですね。

せめて、別々に告って戸部先輩にもチャンスをあけて下さいよ。

ちよつとだけ、戸部先輩が可哀想。

自分勝手なのは分かってるんだけど。

なんで、教えてくれなかったんですか？

好きな人がいるってだけでも、言ってくればよかったのに。  
こんな事なら、ちゃんと聞いとけばよかった。

先輩は好きな人いるんですか？って。  
奉仕部のどちらかだと思ってた。

なんで、海老名先輩なんだろう。

確かに綺麗な人だと思う。

でも、先輩とそんなに接点あったのかな？

先輩の電話帳にもいなかった。

一目惚れとかだったりするのかな。

私は出会うのが遅かったのかな。

でも、先輩は私みたいな苦手って言ってたし。

早く出会ってても、結果は変わらないのかも。

体育祭のときも、絶対有り得ないって言われたし。

あれは、本音だったんだ。

脈アリとか言っちゃって、ホント恥ずかしい。

海老名先輩が羨ましい。

勘違いしないって言ってた先輩が好きになるってことは、本気で好きなんだろう。

修学旅行では、先輩はフラれたみたいだけど、これで海老名先輩も意識したりするのかな。

もし、付き合ったら昼休みも会えないや。

そうやって先輩との時間がなくなっていくんだろうか。

ダメだ。先輩の事ばかり。

同じような事が、頭を周って。

先輩に話を聞きたい。

どんなところ好きになったとか。

いつから好きだったとか。

でも、きつと耐えられない。

聞いてるうちに泣いちゃうんだろうな。

ラインで聞けば、泣いてもバレないかな。

でも、先輩もフラれたばっかだしんどいよね。



しんどい時、頼って欲しいんだけどな。  
でも、これはまた私の勝手な感情だ。

私が友達って思っても、先輩はきつとそうじゃないし。  
はあー。なんなんだろ。

さつきから、自分で考えて、自分で否定して。

部屋に閉じこもってるからかな。

少し、散歩でもしよう。

家をでて、少し遠くの自販機を目指す。

もう、辺りは暗くなってる。

少しだけ、星がでてる。

先輩としたいことがいっぱいあった。

デートにも行きたかった。

学校から一緒に帰ってたかった。

できないわけじゃない。

でも、好きな人がいるなら、邪魔したくない。

自販機に辿りついて、お金を入れる。

目についたのは、マッ缶。

たまには、いいかな。

先輩のを奪って1度だけ飲んだ事がある。

その時は、飲めないって思った。

マッ缶を持って、近くの公園まで歩く。

ベンチに座って口をつける。

「甘いなあ…。」

結局外に出ても、先輩のことばかり。

飲み物も、先輩の好きなもの。

初恋の味はマッ缶。なんて。

自覚した瞬間、失恋したけど。

失恋って、辛いんだ。

『人生は苦いから、コーヒーくらい甘くていい…』

迷言だと思ってたのに。

こんな時は同意しちゃう。

今は、この甘さが心地いい。  
そろそろ帰ろう。

少し、気分転換になったし。  
明日のお昼、どうしようかな。

先輩がフラれて本気で凹んでたら。

話くらい聞いてあげたい。

少しでも、慰めてあげたい。

私自身、先輩に会いたい。

電話して直接聞いてみようかな。

先輩はでてくれるんだろうか。

帰ってきた私は、ベッドの上でスマホを睨む。

あとは、発信を押しだけ。

がんばれ、私。あ、押しちゃった。

「あ、あの、せんぱいこんばんは。今大丈夫ですか？」

やばい。なんか緊張する。

気持ちに自覚すると、こんなに違うんだ。

『ああ。どうした？』

「せんぱい。わたしでよければいつでも話聞きますから。ちゃんとした恋愛経験ないんでアドバイスとか下手かもしれないけど、がんばりますから、辛いときは話してください。」

ああー、私急に何言ってるの。

ちよつと、落ち着いて、ホントに。

『お、おう。別に恋愛相談とか求めてないんだが。』

「なんでですか！一回の告白で諦めるんですか？あれだけ黒歴史とか言ってたせんぱいが告白したってことは、本気で好きなんですよね？諦めていいんですか？」

『あーお前からしたらそうなるんだな。まあ、そうだよな。戸部から聞いたのか？』

ん？お前からしたらってどういうこと？

「はい。勝手なこととしてごめんなさい。正直、せんぱいに好きな人がいたのはショックでした。せめて、それだけでも教えてほしかったで

す。」

『やっぱりお前にはちゃんと話すべきなんだろうな。なあ一色。話の続きは明日でもいいか？俺も少し時間がほしい。』

ちやんと話すってどういうこと？

海老名先輩の話かな。

「わたしはいいですけど。あのせんぱい？無理して明日じゃなくてもいいんですよ？わたしなんて後回しでいいですから、自分の心配をしてください。」

『あー、そうじゃないんだ。こんなに早くお前が知るとは思ってたなかったんだ。なんてゆーか、心の準備みたいもんだ。』

先輩が心の準備するの？

私のほうが心折れそうだけど。

「少しよく分かりませんが、明日話してくれるんですよ？わたしも準備しときます。じゃあ、せんぱい。おやすみなさい。」

『おう。またな。』

ふうー。何か緊張で疲れたよー。

明日、何を聞かされるんだろう。

もしかして、思い切り突き放される？

明日そんなことされたら、私死ぬかも。

先輩、ホントに手加減してくださいね？

翌日

あー、ヤバイ。

この授業終わったら、もう昼休みだよ。

先輩に会えるー。でも怖い。

もう嬉しさと怖さで既に死にそう。

心臓の音がばねえです。

あー終わっちゃった。

と、とりあえず飲み物を買に行きましょう。

先輩はパンだから、ちょうどいいはず。

今日もマツ缶にしましょう。

甘すぎてご飯には合わないけど。

どんな話なのかなー。不安だ。

あーヤバイ。着いちやう。

あ、先輩だー！

「せんぱーい！お久しぶりです。」

そのまま抱きついてしまおうかと思った。

でも、先輩の顔を見たら、できなかつた。

なんていうんだろう。

生気がないっていうか、いつも以上にやる気なさそうっていうか。

こんな先輩初めて見た。

噂が酷かつた時期でも、ここまでじゃなかつた。

やっぱり、相当辛いんだよね。

告白してない私が辛いんだもん。

「おう。久しぶり。これ、おみやげな。とりあえず飯食ってから話そうぜ。」

先輩が買ってきてくれたのは、ある有名キャラのご当地ストラップだつた。

お礼を言つて受け取る。

嬉しい。ありがとうございます、先輩。

先輩がパンを食べ始めたので、私もお弁当を食べる。

ヤバイ。隣に先輩がいる。

ちよつと、それだけでドキドキする。

色んな意味で緊張しながらのご飯。

先輩は先に食べ終わって待っていてくれる。

その間もずっと元気がない。

私も食べ終わって、話が始まる。

あー、怖いよ。

「一色、途中で言いたい事があつても、とりあえず最後まで聞いてほしい。全部話し終わって、お前が2度と話したくないと思つたらそのま

ま戻ってもらってかまわない。何か言わないと気がすまないときは、罵倒でもなんでもしてくれ。」

なんですか、それ。

本当に怖いよ。今から何言われるの？

「わかりました。とりあえず最後まで聞きます。」

「お前も知つてると思うが、戸部の依頼は『告白のサポート』だった。まあ、その依頼を受けたわけだが、海老名さんは脈がありそうには見えない。フラれた後は、自分達でなんとかするって言ってたし、サポートだけならそんな難しい依頼じゃない。フラれても何の責任もないしな。」

一旦切つて、先輩は飲み物に口をつける。

ここまでは、私も知つてる話だ。

「修学旅行の前日、今度は海老名さんが部室にきた。まあ、いつも通り腐つてて、その時は何が言いたいか分からなかった。だから、俺らもあんまり気にしてなかったんだ。そこからは、戸部の依頼のために由比ヶ浜があれやこれや考えて、雪ノ下も色々場所を調べたりしてた。」  
ここまでは、何もおかしいところはない。

むしろ、そんな依頼でもしつかりやるんだって思った。

「そんな中で、少しおかしい動きをする奴がいたり、三浦に怒られたり。で、3日目、多分お前にライン送る前か後に海老名さんが接触してきた。この時に海老名さんの言いたい事が、やっと分かった。まあ簡単にいえば、告白の未然防止。戸部の雰囲気やらで気付いてたんだろーな。葉山にも相談してたみたいだったし。」

ここまで聞いて、ようやく分かった。

なんで先輩が海老名先輩に告白したのか。

「二応、告白の場所も決まっつて、あとは移動していざ告白だったんだが、さつきのおかしい動きの奴と、話す事になつてな。そいつも何も変えたくない。戸部が告白してフラれれば、下手をすればグループ自体なくなる。きつと、そいつも海老名さんもそれをわかつた。」

だからなに？

先輩にそんなグループ関係ないじゃん。

「もう、お前も分かっていると思う。戸部がフラれず、あのグループを変えない。それができるのは、あいつらのその願いを知っていたのは俺だけだった。だから、俺が海老名さんにフラれることで、その答えを戸部に聞かせて告白をやめさせた。もう少し、聞いてくれ。」  
握りしめてる手が痛い。

先輩早くして下さい。

「俺は、理解できたんだ。あいつらの変えたくないっていう思いも、失いたくないっていう思いも。全員が真剣に悩んだ。だから、やった。やり方は最低だと思う。でも、それが1番効率がよかった。お前にも嫌な思いをさせたと思う。だから、本当にすまん。これで終わらだ。」

少しだけ聞きたいことがある。

まだ抑えて。落ち着いて。

「質問があります。奉仕部の2人はそれを見てたんですか？見てたら2人の反応は？」

「確かに見てたが、あいつらは戸部の依頼しか知らない。雪ノ下は、俺のやり方が嫌い。由比ヶ浜は、もっと人の気持ちを考えて、だ。」

そりゃ、目の前で見せられたら2人ともそうなる。

私もいて何も知らなければ、泣き喚いたかも。

「次です。私に話したのは何故ですか？」

「……方法を決めたとき、お前が伝えてくれた事を踏みにじる事になると思った。だから、一色がこの事を知ったらいざれ話そうと思っただ。」

それは、分かってくれますね。

だったら、結衣先輩達の気持ちも分かってあげて下さい。

「最後です。本当に、先輩は海老名先輩の事を好きでもなんでもないんですね？」

「……ああ。」

「せんばい。こっち向いて下さい。」

私は先輩の頬を叩いた。

「先輩言っていましたよね？ドツキリやら嘘告白やらこれまでされてき

たつて。確かにそれしか方法がなかったかもしれない。でも、それはやっちゃいけないと思います。されてきた先輩だからこそ、やってほしくなかったです。」

先輩は、自分だけ嫌われて終わるならいいと思ってる。わざと名前を言わなかった人もいる。

多分、私がサッカー部のマネージャーだから。

私があの時憧れはあるとか言ったからかな。

「比企谷先輩。サイツテーです。さようなら。」

痛い。先輩を叩いた手も心も。

ごめんなさい。先輩。

嫌いになってくれて構いません。

だから、今はそこを動かないで下さい。

時間はあと15分。

きっと先輩はこんな事望んでない。

ううん。誰も望んでないかもしれない。

あの人達に、そんなつもりないかもしれない。

それでも、今回は私は許せない。

足早に廊下を歩く。

先輩。叩いてごめんなさい。

ひどい事言つてごめんなさい。

傷付けてごめんなさい。

また、余計で勝手な事します。ごめんなさい。

見えた。

私は、21Fのドアを思い切り開けた。

「失礼します。」

急に凄い勢いで開けられたドアを見て、皆固まってる。

何度か見に来たことあるけど、いつも通り教室の後方で固まってるグループ。

「あ、結衣先輩もいたんですね。ちょうどよかったです。平塚先生が

呼んでましたよ。なんか話があるって。」

「でも、いろはちゃん」お願いします。結衣先輩。私が平塚先生に怒られちゃうんで、早めにお願ひします。」

「う、うん。分かった。行ってくる。」

結衣先輩ごめんなさい。

戻るまでに終わらせますから。

「三浦先輩と戸部先輩は絶対に口を出さないで下さい。悪いですけど2人に用はありまけん。文句なら後から聞きますのでお願いしませう。」

戸部先輩は、ある意味1番の被害者だろう。

そして、三浦先輩はどうなんだろう。

「とりあえず、2人に聞きますね？自分達のグループの事を先輩に押し付けたのはなんでですか？なんで先輩を利用したんですか？」

「い、いろは、何を…。」

「わかりますよね。修学旅行の話です。あと、いろはって呼ばないでください。気持ちわるいです。」

「…すまない。一色の言う先輩っていうのは？」

「わかってますよね？名前はここでは出しません。ここは、あの人の敵ばかりでしょ？葉山先輩達が押し付けた相手なんて1人しかいないでしょ？」

「待ってくれ！俺は、俺達はいっしょに押し付けたわけじゃないんだ！」

そーですね。きっと先輩もそう言ってくれますよ。

でも、これは私から見えてどう思うかなんですよ。

「葉山先輩。黙ってましたけど、文化祭2日目の屋上、私はあの場にいきました。先輩に『どうしてそんなやり方しか』みたいなこと言ってきましたよね？わかってたんですよね？あの人土壇場でどういうやり方をするか。」

「それはっ…。」

「はい。分かってたんですね。海老名先輩、あの人だけに頼んだのはなんですか？結衣先輩でもいーでしょ？相手に伝えてもらえばよかったですよね？貴女も、分かってたんですよね？先輩なら



きつと何とかしてくるって。」

「彼なら分かってくれると思っただから…。」

「葉山先輩のグループは先輩をなんだと思ってるんですか？名前もまともに呼ばないくせに。何かあっても先輩を助けようとしなくせに。そのくせ自分達のグループのことはあの人にやらせて。」

「本当に押し付けるつもりはなかったんだ。確かにあいつのやり方は知ってた。でも、あのやり方は間違ってる。」

「じゃあ、葉山先輩ならどーしたんですか？戸部先輩からも海老名先輩からも頼まれて、何もできずに無様に先輩に丸投げした葉山先輩のやり方はどんなやり方ですか？」

「っ…それは。」

「あんさーあんたさつきから、何様のつもりだし。」

「三浦先輩。もし、葉山先輩が他のグループを守るために利用されたらどうしますか？怒りませんか？」

「怒るに決まってるじゃん！それがなんだし。」

「私が今ここにいるのは、それと一緒です。大好きな人が利用されたようにしか思えないんです！怒ったらわるいですか？」

「あー、わかったし。あーしは何も言わない。その代わり後から話聞かせな。」

三浦先輩は、物分かりいいですね。

聞きたくない事かもしれないよ。

「葉山先輩、海老名先輩。きつと先輩だって、貴方たちに利用されたとか、押し付けられたとか思ってますん！でも、全く関係ない私が話を聞いたら、そうとしか見えないんです。先輩だって傷付くんですよ。平気そうな顔して、何でもない風に装ってても、傷だらけなんです。先輩を巻き込まないで下さいよ。どうして、どうして先輩ばかり…。」

泣いちやダメだ。

まだ、泣くな。

「…先輩は優しいから、これで何かあっても、自分の責任だって言います。あなたたちを恨むこともないです。でも、もしこれで先輩の大切

な居場所が壊れたら、私は貴方達を絶対に許しませんから。あと、変えたくないとか言ってたみたいですけど、貴方達が勝手に先輩を頼ったことで、結衣先輩は確実に傷付いてますから。」

「一色!?お前なんで…。」

早いですよ。先輩。

なんで来ちゃうんですか？

「あー、完全に予想外だったわ。一色とりあえずこい。」

ちよつと待つて下さい。

まだ、言つてないことがあるんですよ。

「待つて下さい。まだ…「いいから！悪かったよ。お前の事なめてたわ。」

「葉山も、お前らも迷惑かけたな。俺のせいだ。こいつは悪くねえんだ。だからすまん。」

先輩が私の手を引っ張つて教室をでる。

迷惑かけてごめんなさい。

—————

教室（三浦優美子）

「なにあれー」「またあいつー？」

「てかあの1年何様ー？」

ちつ。なんなんこいつら。いる時に言えし。

「うっさいし！あんたらの中にあいつみたいに隼人に面と向かつて文句言える奴がいんの？いなくなつてからしか言えないんだつたら黙つてろ！あいつらになんかしたらあーし許さないから！」

これで黙るんなら最初から言うなつづうの。

にしても、一色の奴いつからヒキ才狙いになったん？

あ、結衣帰つて来たし。

「ねえヒツキーちゃんときてくれた？」

「一色連れてどっか行つたし。つーか結衣ー、あーしもいくところあるから、先生に言つといてー。あ、ついでにヒキオも。」

「ちよつ、優美子?」

「あ、結衣ー、ヒキオに屋上にしろつて言つといて。」

だつて、まだあいつらの話聞いてないし。

ヒキオ達が海老名にちよつかいかけてたのは知つてつけど、その後どうなったのか、あーし知らないし。

あーし、戸部がフラれたと思つてたんだけど…。

どーゆー事だし。

とりあえず屋上にいけばいいつしよ。

――

先輩と、ベストプレイスに向かつてた。

手は引つ張られたまんま。

あの、先輩、そろそろ恥ずかしいです。

言わないんですけどね。

「お前、三浦になんか言つた?」

「三浦先輩?なんでですか?」

なんか、結衣先輩からメールがきたらしい。

三浦先輩が屋上にしろつて言つてるらしい。

ちよつと、あれマジだったんですか?

困りますー。

結局、屋上に向かう事に。

「で?叩かれて凹んでた俺は、由比ヶ浜に教室に行けつて言われたんだけど、お前なにをしたの?」

「迷惑かけてごめんなさい。ぐすつ勝手なことして、ひぐ、ごめんな、さい。」

あー、我慢してたのに。

泣いちゃった。

「お、おい。怒ってないから。マジで泣くな。」

「だって、だつてえー」

先輩はこないつもりだったのに。

私が言わないと気がすまなかっただけなのに。

結局先輩に謝らせてしまった。

結局先輩も注目を浴びてしまった。

屋上到着。

結局、手は掴まれたままだった。

三浦先輩がいたからすぐ離れたけど。

「あんたらなんであーしより遅いし。先に行ったじゃん。」

三浦先輩早いですね。

「で？隼人と海老名はヒキオになにさせたん？」

「一色が何を言ったか知らんが、あいつらに何かさせられたわけじゃない。俺が勝手にやっただけだ。」

そうかもしれない。

先輩は本気でそう思ってるのかもしれない。

「じゃあ、なんで関係もないせんぱいなんですか？せんぱい達が受けた依頼は戸部先輩のだけじゃないですか！自分達で依頼しにきててせんぱいに何とかしろなんて、わけわからないじゃないですか！」

全部、あの人達の勝手じゃん。

奉仕部に依頼に行つたくせに、あとから変えたくないとか私には意味がわからない。

「それに、戸部先輩の思いはどうなるんですか？これはせんぱいもですよ？人に頼るのはどうかと思います。それでも、戸部先輩は本気だったんですよ！それをグループのために潰されて、それを頼んだ人達は平気な顔で戸部先輩と喋って。せんぱいはまた戸部先輩から悪く思われるんですよ！」

今回、1番蔑ろにされたのは戸部先輩だと思う。  
伝えることすら許されなかった戸部先輩。

その戸部先輩から恨まれるかもしれない先輩。  
それ以外の人達は傷もつかない。

「一色ちよつと落ち着けし。多分、あーしも悪いし。ヒキオにあーしも言ったんだ。今が楽しいからって。今が変わるのはイヤだって。」  
「三浦は関係ない。お前は海老名さんが呼び出されたことも知ってたんだろ？それでも、止めなかった。お前だけは戸部の告白を認めてたんじゃないのか？」

「別に認めてたわけじゃねーし。でも、誰かを好きになる気持ちにフタなんてできないっしょ？あーしはちゃんと告白してフラれろって思ってただけ。」

それが正しいことだと思う。

私だって先輩が好きだ。

まだ、面と向かって伝えられないけど、フラれてもいいから告白する時はちゃんと伝えたい。

「結局、隼人と海老名はヒキオになにを頼んだん？で、ヒキオはなにしたん？全部話してほしいし。あーしのグループでもあるんだから無関係じゃないっしょ？」

「せんぱいが話さないならわたしが話しますから。」

先輩は大きく溜め息を吐いて、話し始めた。

私に話してくれたことと、同じ内容だった。

「そっか…。一色が怒る気持ちもわかったし。でも、あんたはもうちよつと考えな。ヒキオのためだとしても、隼人相手に教室であんな事してどーなるか分かんないわけじゃないっしょ？」

「でも…。」

「分かるよ。大好きな先輩が傷付いて許せなかったんしょ？でもあんたがそれでイジメにでもあってみ？そうだったらヒキオはまた傷付くんじゃないの？」

その言葉に私は何も言えなくなる。

確かにそうだ。

そうなつたら、きつと先輩は自分を責める。

「ごめんなさい…。」

「でもあーしあんたの事見直したし。ぶっちゃけ隼人の事もステータスだけで近付いてる薄っぺらい女だと思つてたし。今のあんたのほうが全然かわいーし、かつこいいよ。」

なに？この人までずるい。

なんなんですか。もう。

あんまり泣きたくないんですけど。

「ヒキオ…。あーしが代表して謝るし。ホントゴメン。」

そう言つて三浦先輩は深々と頭を下げた。

三浦先輩が謝つてる姿を初めて見た。

でも、先輩は受け取らないんだろうな。

「俺が勝手にしたことだ。お前らのためにやったわけじゃない。謝られる理由もな痛い！痛いから！2人して蹴るなよ…。」

ほらね。ホントにこの人は…。

「あんさあ、ヒキオ。あーしらのグループがあんたに迷惑かけたのは事実つしよ？だから素直に聞けし。」

そうですね。蹴られて当然です。

むしろ、三浦先輩じゃなくてあの2人が土下座すべきです。

「はあ。分かった…。ただ、一色も三浦もこの件はこれで終わりにしてほしい。」

「なんで？あーしはちゃんとかいつらと話すし。これをそのままにしちやダメつしよ。とりあえず一色はもうなんもすんなし。」

あーもう。わかりましたー。

でも、三浦先輩でいい人だったんですね。

威張つてばっかの人だと思つてました。

「待て三浦。葉山と海老名さんの気持ちはどうなる。あいつらだつてお前らの事が大事だから悩んでたんだろ。」

「じゃあ、それを言つても貰えなかったあーしは、あーしと戸部はなんなん？それに全部ヒキオに背負わせるのはあーしも許せないし。だからヒキオは気にしなくていいーし。あーしが勝手にやる事だから口

出しすんなし。」

あーこれ先輩の負けですね。

いつも先輩が人に言う事ですもんね。

「三浦先輩ありがとうございます。」

私の気持ちをわかってくれて。

先輩のことをわかってくれて。

貴女に話して本当によかったです。

「別にいいし。あんたももし何かあったらすぐ言うし。あと、これからあんたの事いろはって呼ぶから。いーっしょ?」

本当に素敵な人ですね。

葉山先輩にはもったいないんじゃないですか?

「はいっ!ありがとうございます!優美子せいんぱい♪」

「あ、あんたまで名前と呼ぶなし!あーし先に戻るから。ヒキオ、いろはともちゃんと話しなよ。」

ちよつと照れながら戻っていききました。

かわいーですね♪優美子先輩♪

「はあ。一色、マジであんな事はやめてくれ。由比ヶ浜から連絡きたときは本気であせったわ。」

「それは本当にごめんなさい。あと、ほっぺ痛くないですか?ちよつと赤くなってます。叩いたのも本当にごめんなさい。」

私が叩いてしまった頬に触れる。

結構、力入れちゃったからなあ。

本当にごめんなさい。

「本気で嫌われたと思ったし、それでも仕方ないと思ってたんだ。だから、お前が怒ってくれたことは嬉しかった。でも、三浦も言った通りそれでお前に何かあれば、俺は自分を許せなくなる。だから無茶はすんな。」

嫌うわけではない。嫌いになれるわけではない。

それに、本当は告白が本気じゃないって知って嬉しかった。

「ごめんなさい。でも結衣先輩が連絡するのは予想外でした。ホントは先輩にバレずに終わるつもりだったんです。わたしも嫌われるの

覚悟でせんぱいにあんな事しましたから。」

「なんで俺が嫌いになるんだよ。お前が俺に対して怒ったことはなんも間違っていないだろ。まあビンタはめっちゃ効いたわ。」

う…。ホントすいません。

でも、そう思ってくれるならよかったです。

「せんぱい。お願いがあります。きつとせんぱいは何かあればまた、自分が傷付くかもしれない方法をとるんだと思います。別にそれをやめてとは言いません。きつとせんぱいは他の方法がなければ、それを選びます。」

多分これはあつてると思う。

まだ、先輩の事は少ししか知らないけど。

だから。

「せめて、話してください。やる前に余裕があるときは教えてください。そして辛いときは言ってください。隠さないでください。」

「そんなやり方認めないとは言わないんだな。」

それは、先輩自身の否定だと思う。

だから、認めないとは言えない。

「だってわたしは文化祭の時、それを見てせんぱいの事知りたいうって思ったから。理解したいうって思ったから。確かに噂とかはイヤでしたけど。あ、せんぱいのやり方はともかく、嘘告白だけは今後一切みとめません。殴ってでも止めます。」

「そうか…。なあ、一色。ありがとう。お前に会えてよかったわ。」

「へ？え？な、な、なんですか？告白ですか？そういうのはもつと直接的な表現でちゃんと伝えてください。じゃないと無理です。ごめんなさい。」

ああー、いきなりすぎだよ先輩。

あせりすぎて訳わかんないこと言ったじゃん。

「なんでフラれんだよ…。まあ、正直な気持ちだ。たまには、口に出しとこうと思つてな。」

えへへ。嬉しいなあ。

先輩。私がんばりますから。



先輩が頼れるような後輩になれるように。

先輩も好きって思ってくれるように。

だから、もう少し時間をください。

「せんぱい。わたしもせんぱいに会えて良かったです。こんな勝手に迷惑ばかりかける後輩だけど、これからもよろしくお願いしますね。せーんぱい♪」

「…あざとい。まあ、こっちこそな。友達なんだろう？よろしく頼む。」

多分、先輩が友達って言うてくれたのはこれが初めてだ。

少しだけ、ただの後輩から進歩したのかな。

これからだよね？

少しずつ、進んでいければいい。

いつか、先輩の横で恋人として笑える日がくればいいな。

わたしをこんな風にしたのはあなたです。

だから、いつか責任とってくださいいね♪

## 11. 会長候補の後輩。

屋上で先輩に言われた事を噛み締めながら、ご機嫌で歩いていた私に、自分のクラスに近付くたびに周囲の女子からの嫌な視線が刺さる。

昼休みの事が、もう1年の教室にまで広まったのかと思い、めんどくさいなあと息を吐いた。

そんな私に、耳障りな声をかけるクラスの女子。

名前なんて忘れたし、その厚化粧のとおりケバ子でいいや。前に色々あつてから全く話してなかったから、少し警戒する。

「あゝいろはちゃん選挙でるんでしょ。私達めっちゃ応援してるから。」

はあ？急になんなの？

ついにボケちゃったんだろうか、かわいそうに。

そんな風に思いながら、思った事を口からそのまま吐き出した。

「えゝ怖い。生徒会長になるんでしょ？さすがだね。」

あんたの猫撫で声のほうが怖いよ。

私の真似のつもり？

「いや、意味わかんないし。その無駄に厚い化粧が脳までいってんじゃない？ボケるにはまだ早いよ？」

先輩に「お前と会えて良かった」といわれ、幸せな気分ですべてきた私を一瞬で壊されて、精神不安定な私。

普段は嫌いな子でも、もう少し優しいんですよ？

「はあ？あんたがそうやって調子に乗ってられんのも今のうちだから！せいぜい恥かけば？」

捨て台詞を吐いて逃げていくケバ子を見て、突き刺さる視線の意味を理解した。

ケバ子が言った、選挙・生徒会長という言葉で、何かしたんだろうなって思った。

2つの言葉だけでは、何をされたかはまだちよつとわかんない。

次の授業の担当の先生が入って来たから、とりあえず教科書をだし

てケバ子の言葉の意味を考える。

1つだけ思い浮かんだことは、生徒会長に立候補させられた。

さすがにそんな馬鹿な事しないと思うし、普通にあり得ないことだ  
と思う。

だって、立候補とかを管理するのが生徒会なら、生徒会長は顔見知  
りのめぐり先輩だもん。

めぐり先輩、いくらぼわぼわしてても私の顔忘れたってことはあり  
ませんよね？

ただ、どうしても気になるのが、私を陥れたことが確定したみたい  
なケバ子の言い方と顔。ムカつく。

でもさあ、私体育祭運営委員で、一応めぐり先輩だけじゃなくて役  
員さんとも仕事してたんだけどなあ。

もし、これで立候補させられてたら、生徒会役員は誰も私の顔を覚  
えてないことになるんですが…。

まだ、諦めるような時間じゃないと、陵南のツンツン頭が脳内で語  
りかけてくるので、とりあえず、放課後めぐり先輩に会いに行こうと  
決めた。

ようやく授業も全部終わり、終わったーと思っていたら、最後のS  
HRで担任にトドメ刺されました。

「みんな！聞いてくれ！今度の生徒会選挙で一色が生徒会長に立候補  
した。応援してやってくれ！一色！期待してるぞー！」

はいっ！担任もボケていらっしやいました。あほなんですか？マ  
ジで。

「はい？いや、ちよっ「一色さんすごい。前から生徒会長になりた  
いって言ってたもんね〜！」

否定しようとしたらケバ子の声にのみこまれ、ケバ子2の、私も聞  
いたことある〜で何も言えなくなった。

とりあえず、主犯はケバ子とケバ子2です。

よーし、とりあえずあいつらは許さんと思ってたら担任からの解散  
宣言。

よくこんなくだらないうことおもいつくよね。はあーめんどくさい。

このまま、本当に生徒会長になったりしないよねと不安になりながら、めぐり先輩に会いにいくために教室をでた。

3年生のフロアに着いて、近くを歩いていた人に、めぐり先輩のクラスを聞いてまた歩き出す。

まだいてくれるといいけど、そんなことを思いながら、教室の廊下側にいる名も知らぬ先輩に声をかけて、めぐり先輩を呼んでもらった。

出てきてくれためぐり先輩に挨拶をして、生徒会選挙の事で来たことを伝えると、めっちゃ嬉しそうに立候補した事にお礼をいわれた。マジですかー？

ねえ嘘でしょ？めぐりん。私立候補とかしたの？いや、してないよ！

「その事なんですけど、わたし立候補してないんです。嵌められたみたいで。」

驚いためぐりんは、私の立候補を受理した人が生徒会室にいるから、確認しに行こうと言って歩き出した。

という事は、めぐり先輩がいないときに私（偽物）は、立候補を受理されたという事になる。

生徒会長がいる時にそういうのやってよー。

めぐり先輩はちょうど先生に呼ばれていて、生徒会室に戻ったときに、生徒会長候補が現れたと聞かされたらしい。

めぐり先輩は、その立候補者が私だと知ってすごく喜んでくれたみたいだった。

運営委員のときの私を見て、ちゃんと仕事してくれる人でよかったですってくれたらしい。

あの時の私は、先輩の役にたちたいっていう目標があったからがんばれただけです。

私が自分で立候補したわけじゃなく、誰かに嵌められ、生徒会がそ

れを見過ごした事をめちやくちや落ち込むめぐり先輩。

ズーンとへこんでるめぐり先輩に、気軽に気にしないで下さいなんて言えなかった。

めぐり先輩は、直接私に会いに来なかった事も、とても後悔してるみたいで、ごめんね、とずっと謝っていた。

もしかしたら、今回の事で一番傷付いているのはめぐり先輩かもしれない。

私も冗談で、顔を覚えられなかった私も悪いって言うてみたけど、逆効果だったらしくもつとへこんだしまった。

なんかごめんさい。

2人で生徒会室に向かい、ちょうど目的地が見えた辺りで、中から見慣れた少女がでてきた。

その子もちちに気付き、笑顔で手を振りながら近づいてくる。

最近、先輩繋がりで偶然知り合い、一緒に先輩に近付いた仲間でもある藤沢さんだった。

藤沢さんも生徒会室に用事だったのかと思い聞いてみると、意外だけれどすごく嬉しい言葉が返ってきた。

「私も生徒会に入りたくて推薦人名簿をもらいにきたの。一色さんが会長に立候補したって聞いて。私も一緒にがんばりたいなって思ってたんだ。」

何この子、超良い子じゃん。

まあ、知ってたんだけどさ。

そんな嬉しい事を言ってくれた藤沢さんだけど、私は伝えなきゃいけない。

私が自分で立候補したわけじゃないから、まだ生徒会長をする事になるか分からないと話すと、藤沢さんは凄く心配してくれて、少しだけ胸が痛んだ。

ごめんね。

私と一緒に生徒会に入る事を決めてくれた藤沢さんに、こんなつまらない嫌がらせで嫌な思いさせて。

私と藤沢さんの会話を聞いていためぐり先輩もまた落ち込んでし

まい、私にごめんねと繰り返した。

めぐり先輩に大丈夫だからと声をかけ、一緒に生徒会室に入る。生徒会室に入っても、落ち込んでいるめぐり先輩に役員さんがすぐに声をかけてくれる。

この前も思ったけど、愛されてるなあめぐり先輩。

ぐぬぬ、これが天然物と養殖物の差か…。

そんなめぐり先輩が、役員さん達にどストレートに私（偽物）の立候補を受理したのは誰か問いかけた。

1人の役員さんが手を挙げ、この子は誰？と尋ねると、役員さんは首を傾げた。

めぐり先輩の叫びが生徒会室に響き渡る。

「この子が一色いろはさんだよー!!偽物だったのー!!」

最初、わけわからんみたいな顔してた役員さんもようやく意味が分かったらしく、役員さんの顔から徐々に血の気がひいていった。

でも、こんな事するバカがいるなんて普通思わないから、しょうがないですよ。

そのままめぐり先輩と役員さんに伝え、私は気になってたことを尋ねてみた。

このまま、本当に候補として選挙にでなきゃいけないのか、立候補は取り消せないのか。

めぐり先輩は、初めての事態だから、生活指導の平塚先生に話を聞いてもらおうと提案してくれた。

私の推薦人名簿を持ち、めぐり先輩と今度は平塚先生のいる職員室へ向かう。

平塚先生が何とかしてくれるといいなー、なんて思いながら歩いていたら、めぐり先輩がまた謝ってきた。

めぐり先輩が悪いわけじゃないのに謝りすぎですよ？

そうやってめぐり先輩に謝られながら歩き、職員室を目指す。

職員室に入ると、すぐに平塚先生が話を聞いてくれた。

平塚先生に事情を話すと、私の担任と少し話してくると言ってくれて、これでなんとかなりそうだと思うた。

「ダメだ。こんな事言いたくないが、話にならない。」

そう思っていた私は、平塚先生から返ってきた言葉で、ダメだった事がすぐに分かった。

私の担任は、1年生にして生徒会長というものにすぐ拘っているらしく、担任の頭の中では、クラスと担任に支えられながら成長して生徒会長になる私、がいるらしい。アホや。

平塚先生から改めて私の意思を聞かれたけど、私の意志でもない仕事なんか当然したくないし、ケバ子達に押し付けられた責任なんて、背負いたくない。

それを凄く柔らかくして平塚先生に伝えた。

平塚先生から返ってきたのは、立候補の取り下げができないというもの、現状私しか立候補者がいないため、信任投票になるというものだった。

総武高校の選挙規約に、立候補の取り下げに関する項目が記載されていないらしい。

しかも信任投票になれば、生徒会長に当選するのはほぼ確定だと。そんな規約がどうか知らないし、それが無いんだったら作って下さいよー。

「じゃあ、わたしはこのままそこに載ってる子達の思惑通りに生徒会長をやらされるって事ですか？そんなの許されるんですか？」

思った事を素直に平塚先生に伝えると、連れて行きたい場所があるらしく、着いて来て欲しいと言われた。

もしかしたら、私達が考えつかないような案を出してくれるかもしれないと。

今日は、元々サッカー部に行くつもりもなかったし、正直こんな時にマネージャーの仕事なんかやってられない。

時間もあるし、現状どうしようもないし、素直についていくことにした。

校長とか教頭にでも話を聞くのかな。

めぐり先輩もついてきてくれるみたいで、廊下を3人で歩く。

やって来たのは特別棟の一角にある、何の変哲もない教室。

教室の入り口のプレートには何も書かれておらず、謎が深まる。  
こんな場所に、なにがあるのかな。

平塚先生が軽くノックし、少しの時間が空いて、中から聞き慣れた声が届いた。

ちよつと待って、嘘でしょ？今の先輩の声？

平塚先生が声をかけながら入室し、室内で何か喋ってる。

私はそんな声も全然耳に入らず、どうやって先輩にばれずに逃げようか、そればかり考えていた。

どうしてこれまで気付かなかったんだろ。

平塚先生と奉仕部の3人は、運営委員でも仲良さそうに喋っていた。

もしかして奉仕部の顧問って平塚先生？

でも、平塚先生がどうにもできないような事を、生徒に考えさせるなんて普通思わないよね。

だから私は悪くない。平塚先生が悪い。

それでも、先輩には私がこんことになっているのはバレたくないし、結衣先輩は今日のお昼に話を聞かせたくなくて嘘までついている。

結衣先輩は優美子先輩から話を聞いたのかな。

それとも優美子先輩は、まだグループで話し合っていないのかな。

色々と考えていると、私の制服の袖が引かれ、そのまま室内へ連れ込まれてしまった。

私が考え込んでいるうちに、どうやら平塚先生と奉仕部の話も終わっていたらしく、動かない私をめぐり先輩が引っぱってくれたらしい。

平塚先生にやっぱり帰りますと言うと、何故か先輩に否定された。

あなたは平塚じゃないでしょ！

平塚八幡、違和感ないけど私は絶対認めませんから！

廊下側から1番近いところに先輩がいて、次に結衣先輩、そして最後が雪ノ下先輩。

先輩と合ってしまった目をすぐに反らし、結衣先輩に愛想笑いを浮



かべ、雪ノ下先輩をチラ見して、結局私は俯くことにした。

だって先輩の目が、何があつたつてめつちや問いかけてくるんだもん。

そんな先輩の目から逃れ、視線を足元に集中しているうちに、平塚先生とめぐり先輩が、大方の説明をしてくれている。

雪ノ下先輩は選挙規約にも詳しいようで、めぐり先輩と話してる。

結衣先輩は、めぐり先輩の言った「公示」という言葉が分からず首を捻りながらこうじとつぶやき、平塚先生から説明されてる。

そして先輩、話が進むほどに少しずつ顔が険しくなつて、今はめつちや怖い顔で私を見えます。

どうしよう、先輩に知られちゃった。

先輩に、こんな嫌がらせされてるのは知られたくなかつたし、それを知られて必要以上に心配もかけたくなかつた。

今は、奉仕部の2人との間に出来てしまった溝を、少しでも早く埋めて欲しかった。

修学旅行の件で、雪ノ下先輩も結衣先輩も少なからずショックを受けたはずだし、先輩に聞いた話でも、先輩のとつたやり方に納得しているようには全く思えなかつた。

その証拠に、私がこの部屋に入ってから、3人に以前のような暖かさが無いような気がして…。

今の奉仕部に、こんな下らないことで迷惑かけなくなかつたなあ…。

「二色。もしかして俺といたから何かされてんのか？」

どうして気付かなかつたんだろ…。

心配とか迷惑かけたくないばかりで、先輩がどういう風にか全然分かつてなかつた。

聞こえてきた声は、いつものようなやる気のない声ではなく、かと言つて明るい声でもなく、少し冷たいと感じる声。

先輩、あなたのせいなんかじゃないです。

「せんぱいは関係ありません！絶対せんぱいのせいじゃないです！自分が原因だとか思わないで下さい。確かに今になってこんな事して

きた理由は分かりませんが。」

それでも、先輩のせいじゃないと言えるのはちゃんと理由があつて、ケバ子達が私と先輩がいることを知ってるなら、もつと前から何かしらあつたと思う。

先輩は、ちゃんと見れば顔も整ってるし、優しいし、他の人が思い付かないような事も、短時間で思い付くような人だ。

でも、先輩のことを何も知らない人が外見だけ見れば、気だるそうな雰囲気も相まって、クラスに1人はいそうな根暗キャラに見える。

そこに1年でも流れていた噂が加われば、ケバ子たちがその事をネタにしないわけがない。

それにベストプレイスで先輩とご飯食べる時も、先輩が周りを気にしながら私と一緒にいるのも知ってる。

私も先輩との時間を邪魔されたくないから、そういった事には気を付けてたし。

一応、先輩は納得してくれた。

先輩が他に何かされていなのか聞いてきたので、何もせれていないことを伝えると、安心したのか軽く息を吐いた。

先輩は平塚先生にも、相手の処分が軽いつか、特別に立候補を取り下げることができないのか聞いてくれたりした。

どちらも先輩の納得いく答えではなかったらしく、また先輩の表情が少し険しくなった。

「二色、なんで今日この事に気付いた？ 今日まで知らなかったんだろ？」

私は先輩に屋上で別れた後の事を話した。

周りの女子からの視線、ケバ子に言われたこと、担任にも急に知らされて、訳が分からずめぐり先輩に会いに行ったこと。

おそらく、主犯はクラスの2人だということ。

一応ケバ子との会話も教えて欲しいと言われ、私の部分だけ少し柔らかくして先輩に伝える。

一応、あの2人が私に敵対心を持つてる理由だけは、なんとなく分かっている。

入学当初、あの2人と私を入れたグループがクラスのトップグループだったけど、私ばかりが男子にチャホヤされ、挙句あの2人が狙っていた男子は2人とも私に告白してきた。

そこから、私だけがグループを外された形になったが、中学の頃も毎年そんな感じだったから、私は全然気にしてなかった。

他の女子グループもそれを知っていたからか、私をグループに入れようとはしなかった。

結局今は、毎日先輩に会いに行くから、クラスの中で女子から孤立していても全く問題なかった。

むしろ、煩わしい付き合いがない分、何も気にせず先輩のところに行けるし。

だから、なんで今になってこんな事をしてきたのか分からない。

それは分からないけど、先輩にも心配と迷惑をかけ、先輩は自分を責めようとしていたから、結果だけみれば、私にとっては1番効果のある嫌がらせになってしまった。

ああー、めっちゃムカつく。

先輩が少し考えたあと、選挙で落ちるだけなら応援演説が原因で落ちればいいと言ってきた。

責任は応援演説をした人間にあるし、うまくいけば私もノーダメージで切り抜けるかもしれないらしい。

先輩が自分で考えた事を人任せにするとは思えないから、きっと先輩自身が応援演説をするつもりだ。

私は先輩のやり方を否定したくないけど、私の事が原因で先輩が悪く言われたり、傷付くのは嫌だな…。

そう思っていると、雪ノ下先輩と結衣先輩が反対してくれた。

今日、屋上で先輩のやり方を否定しないって言ったばかりだったから、奉仕部の2人が反対してくれたのはありがたかった。

先輩は少し考えたあと、結局選挙に落ちてもそいつらの思惑通りになるんじゃないかって聞いてきた。

ケバ子が私に言った言葉をもう一度しっかり考えてみると、確かにそうともとれる。

多分先輩が言いたいのは、生徒会長にわざわざ立候補した1年が選挙で、しかも信任投票で無様に落ちて恥をかくってことだと思う。生徒会長になったとしたら、仕事ができなくて恥をかくって事なのかな。

でも、ケバ子達以外にも私を嵌めた子が28人もいるって事で、その子達の狙いはなに？

考えられるのは、選挙にでてきた私を笑いものしたい、落選した私を笑いものにしたい、生徒会長になって何もできない私を笑いものになりたい。

ケバ子達は分からないけど、他の子達はケバ子の案に悪ノリしただけというのも考えられる。

うーん、わかんないや。

「城廻先輩、仮に一色が生徒会長になったらどう思います？」

先輩の問いかけに、めぐり先輩は私に話してくれた通りのことを言ってくれて、最初は自分も見に行ってくって言ってくれた。

もし私が生徒会長になったら？

きつと藤沢さんも生徒会に入ってくれて、最初はめぐり先輩も見にくてくれる。

でもめぐり先輩の話だと、前期の生徒会の人達は誰もいないらしくて、全員が初めての生徒会らしい。

「私みたいなのが生徒会長なんかして大丈夫なのかな？」

それにいつ辞めてもいいけど、私はサッカー部のマネージャーもやってる。

雪ノ下先輩達は、他の候補を擁立して、その人に選挙で負けるしかないと言っていた。

確かに私よりも凄い人なんてたくさんいるし、そんな人達に負ければ笑われることもないのかな。

結局その日は結論もでないし、平塚先生の言葉で解散することになった。

私達が奉仕部の部室をでようとしたとき、雪ノ下先輩が平塚先生に

声をかけ、先輩は私に声をかけた。

雪ノ下先輩は平塚先生と話があるらしく、先輩は連絡するから少し校内で待っていてほしいと言われた。

こんなときじゃなければ、先輩と一緒に帰れることをすごく喜んだはずなのに…。

まあ、初めてだし嬉しいものは嬉しいんだけど。

そんな気持ちを抱えながら先輩を待つ私に、この後どんなことが起こるのかなんて、わかるはずもなかった。

## 12. 終わらない1日。

奉仕部の部室を出て、先輩から連絡がくるまでどこで待とうか考えながら歩く。

先輩は自転車通学だから、駐輪場で待とうかとも思ったけど、絶対寒いよね…。

そんなことを考えていると、めぐり先輩が生徒会室に誘ってくれた。

「私も少しだけ一色さんとお話したいことがあるんだ。」

めぐり先輩のその言葉に頷き、先輩に生徒会室で待っていることを一応ラインで送っておいた。

話に夢中になって先輩からの連絡に気付かなかったら、先輩は先に帰っちゃいそうだし。

めぐり先輩と生徒会室に向かいながら、廊下の窓から外を眺め、忙しく動くサッカー部を見つける。

目的は葉山先輩だったけど、戸部先輩をはじめ、色んな先輩達が優しくしてくれたし、可愛いがってくれた。

他のマネージャーよりはしっかり仕事してたし、そんなところを見せてくれたのかな。

『きつと生徒会長になってしまえば、今までのようにサッカー部に顔を出すこともなくなる。』

さつきまでは、いつ辞めてもいいなんて思ってたし、先輩と仲良くなつてからは、いる意味あるのかなんて考えてたけど、そう考えると少し寂しかった。

自分の気持ちが変わることが嫌で、先輩への気持ちもすぐ変わってしまうのかと不安になる。

そんな思いがそのまま顔にでていたのか、めぐり先輩がその場で俯いてしまった。

「一色さんごめんね。私達のせいだ…。」

こちらこそ、勘違いさせてごめんなさい。

めぐり先輩に生徒会選挙のことじゃないと伝え、切り替えるために

こちらから話を振る。

「めぐり先輩は、生徒会長をやっていて良かったって思いますか？」

さつきまでの申し訳なさそうな顔を一変させて、とても嬉しそうな顔で頷いてくれた。

私はどうなんだろう…。

このまま私以外の候補者も現れず、生徒会長になったとして、めぐり先輩みたいの後悔しないような日々を送れるのかな…。

ただでさえ、私の意志とは全く関係ない立候補で、本当に私が相応しいから推薦されたわけでもない。

嫌々仕事をする私しか思い浮かばない。

「めぐり先輩がそう思えた理由とかがって聞いてもいいですか？」

「私が一色さんと話したい事もそんな感じだから、生徒会室で落ち着いて話そう？もうすぐ着くし。」

確かに歩きながら話すことでもないよね。

さつきもお邪魔した生徒会室が見えてきて、生徒会長としてここに通う自分を想像する。

うん、似合わないなあ…。

少し笑ってしまった私を、めぐり先輩が不思議そうな顔で見てる。

たまに先輩も1人でニヤけてるけど、少しずつ似てきてるんじゃないかと思ひ、少しシヨックだった。

だってその時の先輩の顔は正直キモいもん！

めぐり先輩と生徒会室に入ると、残っていた役員さんが私に頭を下げてきた。

立候補のことをとても気にしてるみたい。

確かに役員さんにも責任があるかもだけど、悪いのは私を嵌めた連中だし、あまり気にしてほしくない。

「ホントに気にしないで下さい。めぐり先輩も謝りすぎってくらい謝ってくれたし。多分、1番シヨックを受けてたのもめぐり先輩なので…。」

そう言っても頭を上げてくれず私が困っていると、今度はめぐり先輩が役員さんに優しく語りかける。

「これは生徒会長の私の責任なんだから、そんなに落ち込まないで。いつも助けてくれてるんだから、こういう時くらい私がちゃんとするよ。一色さんも困ってるよ？ほら、今日はもういいから。」

ようやく役員さんは顔を上げて、今度はめぐり先輩に頭を下げ、肩を落としながら帰って行った。

ようやくめぐり先輩と2人になり、話が始まると思っていたらまた頭を下げられた。

もう、どんだけ謝るんですか。

「一色さん。ありがとね。一色さんは怒ってもいい立場なのに、優しい言葉かけてくれて。」

頭を下げてくれたのは、さっきの私の言葉に対するお礼だった。

私も慌ててめぐり先輩の責任でもない事を伝えて、本題に入る。

「それで、めぐり先輩のお話っていうのは…。」

めぐり先輩もようやく話を始める気になったらしく、椅子に座るよう促された。

「体育祭運営委員のとき、一色さんと初めて話した日に私が相模さんに言った事って覚えてるかな？」

その事は、私のなかでも凄く印象的だったからよく覚えてる。

あの話を聞いて、私のめぐり先輩の印象も少し変わったから。

私は頷いて先を促す。

「あの時言ったことは全部ホントの事だね。みんながいなければ私は何もできなかったの。今でも生徒会長として相応しいかって言われるとそんな事ないと思う。」

そんな事ない。

めぐり先輩に憧れてる後輩もいっぱいいると思うし、本当に相応しくなければ、役員さん達もあれだけめぐり先輩を慕ってないと思う。

「一色さんからしたら、嫌がらせを受けたせいでこんな事になってすごく嫌だと思う。やりたくないって思う気持ちも分かる。だからね、一色さん自身の気持ちで、一色さんの意思で考えてみてくれないかな。誰かに嫌がらせでやらされるんじゃないやなくて、最初から考えてみてほしいの。」



つまり、私を嵌めた子達のことなんて考えずに、私自身が生徒会長をやるか考えてほしいってことだよね…。

「あと、さっきの一色さんの質問の答えだけど、最初はね、私でよかったのかななんて思ってたんだ。でも、行事があるたびに色んな人からお疲れ様とか、楽しかったとか言ってもらえて、すごく嬉しかったの。だから、そう言ってもらえるたびに生徒会長になってよかったって思うんだ。」

キツイ時もあったけどね…、そう言っただけで話し終えためぐり先輩はとも綺麗で本当に素敵だった。

でも、私が同じようにできる？

確かに、めぐり先輩の言っただけを信じれば、めぐり先輩は仕事はできなかったのかもしれない。

でも、めぐり先輩の魅力みたいなのは、そういうところじゃないって私でもわかる。

役員の人達に慕われて、生徒達からも認められて、私にはそんな魅力ないし、誰も認めてくれないかもしれない。

仕事も全然自信ないし。

「わたしは、雪ノ下先輩みたいに優秀じゃないし、めぐり先輩みたいに誰からも好かれる人間じゃないです。見た目で男子が寄ってくるだけで。慕って助けてくれる人もいないです。」

「雪ノ下さんくらい優秀な人なんてそんなにいないよ。それに私だって誰からも好かれるわけじゃないし。比企谷君のこともそう思う？本気で一色さんの事心配してたと思うけど。」

確かに先輩は心配してくれるし、私が困ったら助けてくれると思う。

でも、私は先輩に迷惑をかけたくない。

一度甘えてしまえば、ずっと先輩に甘えそうだし。

「ホントはせんぱいには心配も迷惑もかけたくないんです。せんぱいは優しいから、色んな人のためにがんばるんです。本人は絶対に否定して自分のためって言いますけど。」

仕事だから、俺しかできないから、自分のためだから、そう言っ

たくさんの人を助けてしまう先輩。

助けてるつもりなんて先輩にないのかもしれないけど、文実にしろ、相模先輩にしろ、葉山先輩のグループにしろ、私が知ってるだけでもこんなたくさんの人が助けられてる。

だから、私は先輩を助けられるようになりたい。

どうしようもないときに、話を聞いて一緒に悩んで、先輩が頼ってくれるようになりたい。

私が生徒会長になって、先輩を頼るのは意味がない。

「一色さんは比企谷君のことちゃんとわかってるんだね。私は分かってあげられなかったから。ヒドい事も言っちゃったんだ。なんにも知らなかったくせに。」

そう言っって少し寂しそうに笑っためぐり先輩。

文化祭のときのことだろうけど、私が知れたのは藤沢さんのおかげと、あとは偶然だ。

何も知らなかったらめぐり先輩と同じだったと思うし、噂を信じて馬鹿にしてたかもしれない。

「せんぱいの話はやめましょう。可愛い女の子が2人でせんぱいの話なんてしてたら、せんぱいのクシャミが止まらなくなります。」

先輩の話は申し訳ないけど切らせてもらおう。

めぐり先輩がもし、先輩も生徒会にとか言いだしたら、私はその想像で止まらなくなりそうだし。

それにめぐり先輩まで先輩に好意を持たれてしまったら、私じゃ太刀打ちできなくなる。

悪く思ってるわけじゃなさそうだからいいのだ。

めぐり先輩も笑いながら同意してくれて、生徒会長の話に戻そうとしたとき、生徒会室のドアがノックされた。

めぐり先輩が返事をして、入ってきたのは先輩だった。

「あ、比企谷君。一色さん借りててごめんね。一色さんも急がなくていいから少しだけ考えてみてほしいな。また今度ゆっくり話そうね。」

先輩も軽く返事だけして私が立ち上がるのを待っていたので、カバ

ンを持って席を立った。

「はい！一度じっくり考えてみます。今日はずっと付き合ってくれてありがとうございますございました。」

めぐり先輩に頭を下げて、先輩と一緒に生徒会室をでる。

あ、先輩もちやんとお疲れつすとか言っていました。

生徒会室をでて、先輩と2人で廊下を歩きながら、めぐり先輩と話していたことを考えようとして、頭を振った。

生徒会長の件は後から考えることにして、今は先輩と一緒に帰ることをちやんと楽しもう。

だって私がしてみたかったことだし、今回が初めてだし、悩みながら一緒にいるなんてもつたいない。

私はそう思っているのに、先輩は難しい顔して何かをずっと考え込んでるみたい。

むうー。頬を膨らませて先輩を見つめっていると、それによく気付いた先輩が気まずそうに目を反らす。

ちがーう！気付いたんなら何か声かけてくださいよ！なんで目を反らすんですか！

「せんぱい。わたしはせんぱいと一緒に帰れることがとても嬉しいのです。それなのにせんぱいはずっと難しい顔をしてやがるのです。そんな思いを込めて見ていたら目を反らされたのです。せめて、なんでもいいのでお話しませんか？」

先輩は、あーとかすまんとか言ってますけど、いや分かっているんですよ？先輩が自分から話題を振ったりするのが苦手だって事は。

でもね、先輩。難しい顔でずっと悩んでるのであれば、私はそういう事を打ち明けてほしいんです。

そういう事を聞いて、あなたと一緒に悩みたいんです。

「まあ、お前が聞きたいことは後から話すわ。そういや、城廻先輩とは何話してたんだ？」

えへ。先輩もちやんと話してくれるみたいだし嬉しいな。

私が、めぐり先輩と話してたことを、先輩の話だけ抜いて話すと先

輩はまた考え込んだりした。

まあ、しょうがないよね。多分今日待つてくれって先輩が言ったのも生徒会選挙の話だろうし。

そのことを考えてくれるのは私のためだし、私が文句言っちゃダメだよ。

だからこそ何もない状態で、純粹に一緒に帰りたかったなあ。

靴箱まで来て、先輩と一旦別れ靴を履き替える。

先輩は自転車を取ってくるらしく、駐輪場のほうへ歩いていったので、私は校門のところで先輩を待つことにする。

今日は色んな事があったなあ。

校門に寄りかかりながら、今日あったことを思い出す。

1日にどれだけイベントを突っ込む気なのかと、さすがに文句を言いたくなるくらいには濃い1日だった。

そして、そんな1日の最後は先輩との下校って、なんか謎の力でも働いてるんじゃないの？

これで今日まだ月曜日ですからね。

明日からが怖いと思うくらいには、今日はヤバかった。

「寒い中待たせて悪かったな。」

私が明日からの日々を恐怖を抱いていると、自転車を押した先輩がやってきて、手を差し出した。

マジですか？まだ手を繋いで歩くのは早い気が…。

でもせっかく先輩から誘ってくれてるし…。

すごく勇気を出して先輩の手を掴むと、なぜか先輩が固まってしまった。

ちよつと！自分から誘ってきたといてなに固まってるんですか！

「い、いや、あのな、荷物をな…。」

な、なんでそんな紛らわしい事するんですか？バカですか？そーですか！バカは私です。

もおー、恥ずかしーよー。

さつと手を離してカバンを差し出すと、先輩が受け取って自転車の

カゴに入れてくれた。

い、行くか、なんて言って歩きだした先輩もすごく恥ずかしそうで、赤くなった耳を見ながら後をついていく。

きつと私の顔も赤いけど…。

お互いにさっきの事を気にしすぎて、会話も全くないまま少し薄暗くなつた通学路を歩いていく。

結局会話もないなら、思い切つて手を繋いだまま帰ればよかったなあなんて思つて先輩を見るけど、先輩の両手はしっかりと自転車のハンドルを掴んでいてちよつとガツカリ。

男の子と手を繋いだのは初めてじゃないのに、さっきはドキドキが凄くてちよつとビツクリした。

先輩に並ぶと横顔が見えて、一緒に帰っている事を実感して少し嬉しくなる。

そんな嬉しさがそのまま体を上がってきて、クスツと笑つてしまう。

先輩がこつちを見るけど、何もないと首を振つて少し足早に先輩の前にでる。

「あー、一色。今日の朝小町とケンカしてな…。正直家に居辛いんだが、どつか寄つてつてもいいか？」

先輩が、あの先輩が、自分から寄り道をお誘いしてくるなんて…。

昼休みですら、早く帰りたいなんて言つてるあの先輩が…。

私は立ち止まって先輩の顔をマジマジと見つめる。

うん。ちよつと暗いけど本物の先輩だ。

「せんぱい熱あります？あの帰りたい・働きたくない・めんどくさいの先輩ですよ？いくら小町ちゃんとケンカしたからって…。」

何だよその三原則とか言いながら先輩が歩きだそうとしたので、先輩のブレザーを掴み、阻止。

「どこに行きますか？もうあれですね！これ制服デートですね！やだなーわたし照れちゃいますー♪」

「あざとい。本当は小町以外乗せたくないんだが、遅くなるし後ろ乗れ。千葉でいいだろ。」

キヤー！どうしちやつたの!?!先輩！

もう付き合っちゃいますか？そうしましょう。

自転車で2人乗りまでしてくれるなんて、やっぱり今日はイベント盛りだくさんの日ですね！

先輩が自転車に跨ったのを見て、私も後ろに座る。

どうしよう、どこに掴まればいいのか？

後ろからギューってしたら先輩事故りそうだけど、正直私はしてみたい。

むむむ、せっかくだしやっちゃえ！せーの、ギュー！

「お、おい！バカ！肩とかでいーだろ!?!」

その後もヤメろとか離せとか言ってるけど、ぜったいに離しませんから。

恥ずかしいすごいドキドキするけど、幸せなんだもん。

はあー、先輩の背中と先輩の匂いー。

めちやくちや変態ぽいけど、私これ大丈夫ですかね。

ようやく諦めて自転車を漕ぎだした先輩は、小声でこいつは小町とか言ってますけど、聞こえてますからね？

「いろはですよ？せんぱい。」

先輩の後ろから耳元でそう囁くと、ひっと声を上げて自転車を止めてしまった。

もう、早くしないとどんどん暗くなって時間も遅くなるじゃないですかー！

先輩のお腹で組んだ手を離し、早く早くと背中を叩くとまた諦めて自転車を漕ぎだした。

さすがに小町ちゃんと2人乗りして慣れてるのか、中々に快適な道中、先輩の背中に軽く頭突きしたり、おでこでぐりぐりしてみたり。

2人乗りと先輩を堪能していると、自転車が止まる。

「ここからはさすがに降りたほうがいいな。」

先輩を堪能しすぎて全く気付かなかったけど、いつの間にか千葉についでいた。

自転車を降りて、周りを見渡せば、もう完全に日が暮れて夜の街になってる。

さーて、どこに行くのかなあーなんて考えていると、先輩が映画館とかがある方向に向かって歩き出した。

「話したい事もあるし、ドーナツ屋でいいか？ コーヒーもお代わりできるし。」

やってきましたドーナツ屋さん。

店内に入り、先輩がドーナツ2つとカフェオレ、私はドーナツ1つとホットコーヒー。

2階に上がり、先輩がカウンター席に腰を下ろす。

なんで2人で来てるのに、わざわざカウンター席をチョイスするんだこの先輩は…。

そんなに私と向かい合って座るのが恥ずかしいんですか？

それとも私がいること忘れてます？

私が心の中で先輩にグチグチ言っていると、1人の女性と目が合い、なんでこつち見てんだろと思っていると、その女性はヘッドホンを外し、手をヒラヒラさせながら話しかけてきた。

「珍しい顔がいるって思ったら、比企谷君浮気はダメだぞー。」

ええー!!この美女はまさかの先輩のお知り合いですか？

そう思って先輩を見ても、先輩は何故か少し嫌そうな顔で固まっていた。

ちよつと待つて！あの美女さつき浮気って言った？

なんなんですか！海老名先輩の次は年上美女ですか！

「せーんぱい？この美女とはどういった関係ですか？しかも浮気ってなんですか？」

自分で想定してたよりも低い声が出て、ちよつと自分でもビククリしてしまった。

先輩はビククつとして、おそろおそろ私に顔を向ける。

そーんな怯えたような顔しなくてもいいじゃないですかー。

「はあ…。どーも。一色、この人は雪ノ下の姉の雪ノ下陽乃さん。」

雪ノ下先輩のお姉さん？え？ええー！！？

先輩はそれだけ言って、雪ノ下先輩のお姉さんから離れた席に座ってしまった。

「へえー。先輩ってことは、比企谷君の後輩？初めましてだね。雪乃ちゃんのお姉ちゃんのお雪ノ下陽乃でーす。よろしくね。」

少し雪ノ下先輩に似てる？のかな。

へえーの部分で上から下まで品定めされているような目で見られたけど、先輩この人もしかして怖い人ですか？

「あ、1年の一色いろはです。よろしくです。」

それだけ言って私も逃げようとしたけど、雪ノ下さんはトレイを持って先輩の隣に座ってしまった。そこ私の席！

先輩が色々と言われてるけど、座る場所がない私はどうしようもないんだけど。

「はあー。雪ノ下さん、一色が困ってるんでーっ席ずれてもらっていいですか。」

しょうがないなーとか言ってるけど、先輩と元々来てたのは私ですから。

なんで私が邪魔者みたいになってんの？

でも、雪ノ下先輩とは性格が大分違うというか、何ていうんだろう、髪型は違うけど、明るくなつた雪ノ下先輩？

一応横にズレてくれたので、お礼を言っ席に着いた。

並びは陽乃さん、先輩、私。

てゆーか結局3人で並んで座るならテーブル席に移動しません？

「で？比企谷君はこーんな可愛い後輩とデート？」

「そんなわけないでしょ。依頼のことで少し話したいことがあっただけですよ。雪ノ下さんこそこんなところで何を？」

いや、確かにそうかもしれませんが、そんなにはつきり否定しなくてもいいじゃないですかー！

はあー、先輩は女心がわかってません。

「ふーん。依頼ねえ。私は友達とご飯行くまでの時間つぶし。」  
やっぱ怖い人ですよ、先輩。



探るような、全て見透かされてるような視線を向けられて、私は顔を反らした。

先輩が、友達くるなら別の場所で食べますのでと言っても、まだ時間あるからと離してくれない。

これ結局依頼のことも、先輩が後から話してくれるって言ったことも話せなくないですか？

そんなことを考えながら陽乃さんを盗み見ると、ちようど先輩が耳元で何か囁かれてるところだった。

むー、近いですよ。

結局私は喋ることもできず、先輩と陽乃さんが話してるのをボーッと聞いてるだけで、ここに来るまで楽しかったのになあと少し後悔していた。

あの時、ドーナツ屋じゃなくてスタバにしましょうって先輩に提案していれば、こんな事にはならなかったのに。

「えーと何色ちゃんだっけ？その子の依頼の話はしなくていいの？比企谷君。」

わざと言ってるのがわかって少しカチンときたので、先輩が話す前に会話に割り込んだ。

「二色ですー。一色いろはですー。部外者には聞かせられないので雪ノ下さんがいなくなったら話しますー！妹さんはわたしの名前を覚えてくれてたみたいですけど、お姉さんは聞いても覚えられないんですねー？」

先輩が、なにしてんだみたいな顔でこっちを見てるけど、人の名前前で遊んじやいけないんですー！

しかも、覚えているくせにワザと間違うなんて葉山先輩と一緒にじゃないですか。

「ふーん。一色ちゃんね。なかなか面白い子だねー。ねえ比企谷君、この子私がかもらつていい？」

そうやってすぐ先輩と話して、私を除け者にしようとするのは許せません。

「べー、わたしはせんぱいのもんですー。雪ノ下さんのものにはなり

ませーん。」

先輩が俺のじゃないとか、俺挟んでケンカしないでとか言ってるけど、気にしない。

雪ノ下さんも何が面白かったのかクスクス笑ってる。

先輩が私と陽乃さんにコーヒーのお代わりを聞いて、通りかかった店員さんにカップを渡してくれた。

ああー普通にカップ渡したけど、先輩に店変えましようって言えばよかった。

その後も雪ノ下さんが先輩に絡んで、私が横から口をはさんで、先輩が真ん中で嫌そうな顔して。

陽乃さんは私がおか言うたびにクスクス笑ってるし、絶対に私と先輩で遊んでるでしょこの人。

「ねえ、比企谷君。雪乃ちゃんは元気？」

そこからは雪ノ下先輩の話になったから、私は口をはさめずにまたコーヒーをちびちび飲んで会話が終わるのを待つ。

もおー、私達はホントに話したい事があるんだから、陽乃さんは速く友達のところに行ってくださいよー。

修学旅行がどうか、お土産がどうか、え？雪ノ下先輩お土産をわざわざ宅配便で送ったんですか？

雪ノ下先輩は実家に住んでるんじゃないんですかね？

「あのー雪ノ下先輩って一緒に住んでないんですか？」

なんと、雪ノ下先輩は高校生で既に1人暮らしらしい。

ん？て事は文実のとき、先輩は雪ノ下先輩の家というより、1人暮らしの部屋にお見舞いに行ったの？

ま、まあ1人で行ったわけじゃないんだから、何も間違いなんて起きてないよね。

雪ノ下先輩の話が終わり、次はなんですかーと思ってたら生徒会選挙の話になっていて、めぐり先輩の名前もでてきた。

そーいえば、運営委員のときにめぐり先輩が上の代がすごかったみたいなお話して、はるさんとか言ってたような。

「あのーめぐり先輩が言うはるさんって、もしかして雪ノ下さんのこ

とですか？」

「へー、めぐりの事も知ってるんだ。そうだよー。一色ちゃんも名前前で呼んでよー。んー、はるちゃんって呼ぶ？」

えー。だって先輩が雪ノ下さんって呼ぶし、はるのさんって呼ぶのは怖かったし、はるちゃんとか呼んだらどこかに埋められそうなんですけど…。

めぐり先輩がはるさん。だったら…

「じゃあ、はるさん先輩でいいですか？」

「ふふ。それでいいよ。あーあ、めぐりと一色ちゃんが同学年ならもう少し面白くなってたのになあ。」

ええー、私は絶対に嫌ですけど。だってめぐり先輩と同じ年だと、先輩の後輩になれないじゃないですかー。

先輩は、天然と養殖と一緒に生徒会とか言ってるけど、最近あなたの前くらいでしか猫被ってませんから。

「雪ノ下さん。城廻先輩の次の生徒会長が一色って言ったらどう思いますか？」

「ん？いいんじゃない？面白そうだし。一色ちゃんが立候補してるの？」

そこから先輩は、私が立候補させられたのをはるさん先輩に話してしまっただ。

いや、絶対面白がっていいじってきそうなんですけど、先輩が対処してくださいよ？

「へー。総武でもそんな頭悪い事する子達がいるんだね。で？一色ちゃんはどうしたいの？」

はるさん先輩の前半の声がすごく冷たくて怖かったし、絶対にいじられると思ってたから、少し驚いた。

「正直やりたくないんですけど、めぐり先輩からも嫌がらせとか関係なく考えてみてほしいって言われて…。わたしなんかには務まるとは思えないんですけど…。」

「そっか。めぐりは雪乃ちゃんに生徒会長を頼むと思ってたんだけどなー。一色ちゃん、生徒会長やってみたら？めぐりは嘘付けるような

子じゃないから、本気で言ってくれてると思うよ。」

めぐり先輩が本気で言ってくれてるのは、私もちゃんと分かっているけど、正直やっていける自信がない。

私が返答に困って黙っていると、

「ま、わたしはやらなかったけどね。面倒なわりに地味だし。」

はるさん先輩……。ちよつといい人なのかと思つてた私の気持ちを返してください。

しかも面倒はまだいいけど、地味って……。

「じゃーなんで勧めたんですかー！はるさん先輩の一言ですごくやる気なくなつたじゃないですかー。」

はるさん先輩はまたクスクス笑いながら、本音がでちゃったとか言ってる。

ああ…、本音なんですね。

「雪乃ちゃんは生徒会長やらないんだね。…つまんないなあ。」

最後の言葉がすごく冷たくて、私と、多分先輩もゾツとした。

そんな私達も見ながら、クスつと笑うはるさん先輩が怖くて、さっきの自分の態度を思い出して、もう一度ゾツとした。

私は今日家に帰れるのか不安になっていると、次は別の方向から先輩を呼ぶ声が聞こえた。

ほんつとに、今日なんなの？厄日？おかしくない？

神様はどうしても私と先輩に依頼の話をさせたくないらしい。

「…………折本。」

あー、厄日が終わらない。

### 13. 終わってみればいい1日で。

残り少ない温くなったコーヒーをポーッと眺め、現実を受け入れるべきか悩む。

今日は朝から色んな事がありすぎて、明日からの日々に恐怖を抱いたのは学校を出る前のこと。

神様は、明日どこるか今日を終わらせる気はまだないらしい。

食べ放題みたいな名前の芸人さんがここにいれば、○峠さんがこう叫ぶに違いない。

『なんて日だ!!』

私の頭の中では、もう10回は小○さんが叫んでる。

私も先輩も既にドーナツは食べ終えて、はるさん先輩が逃してくれさえすれば、ドーナツ屋からは帰れる状況で、そんな時に先輩の名前を呼ぶ新たな女性の声。

少しの間をおいて、先輩が女性の名前を呼ぶ。

「……折本。」

オリモトと呼ばれたその女性は、可愛い顔にパーマのかかったショートボブ、そして距離感を感じさせない態度で先輩をレアキャラ扱いしてる。

確かに、色々な面で他人とは違う先輩は、間違いなくレアキャラだけど…。

折本さんは先輩の頭の良さが意外らしく、総武であることに少しだけ驚いている。

そんな会話をしている先輩と折本さんだけど、明らかに先輩の様子がおかしいんだよね。

表情は少し硬いし、返答も少し鈍い。

もしかして元カノさん?とか思ったりしたけど、さすがに昔の彼氏の進学先くらい知ってるはずだし。

「どっちが彼女さん?」

「いや「はーい!私です!八幡せんぱいの彼女の二色いろはです。」

てゆーか嫁です。よろしくでーす。」

余計な事を考えていて反応できないところだったけど、なんとか間に合った。

今の質問には、どっちも違うだろうけど一応聞いとこうみたいな感情が、顔にも声にも色濃く出ていた。

あなたが先輩をバカにしたいのかは分からないけど、もしそうなら私の敵ということになる。

同級生なのかなんなのかわからないけど、先輩とそんなに関わりがあるわけじゃなさそうだし、少しだけ様子を見よう。

「えーマジ？超意外なだけどー！こんな可愛い彼女がいるとか比企谷やるじゃーん！」

うん、悪い人なのかどうかどうにも掴みにくい人だ。

先輩は否定しようとしてるけど、折本さんに肩を叩かれて何も言えないでいる。

「いやー、せんぱいはヤバいんですよー。周りに寄ってくるのは何故か美女ばかりだし。今日もそちらの年上美女に続いて折本さんまでできて…。」

私はさも彼氏の周囲を心配する彼女のようなフリをしつつ、折本さんも褒める。

褒められて喜ばない女の子なんていませんからね。

「えー、私も比企谷に寄ってきた美女扱いとか。なにそれウケる！」  
喜んでるのか、そんな扱いされて不本意なのかどっちか分からないけど、ウケるって言ってるからいいや。

「もしかして、比企谷君のお友達？」

はるさん先輩…。先輩に友達なんかいたの？って聞こえるんですけど、絶対そう思ってますよね？

折本さんとはるさん先輩がお互いに自己紹介をして、はるさん先輩が先輩に自分達はどんな関係か聞いてるけど、あなたはただの同級生の姉でしょ！

なんで、友達と同級生の姉の間を取って彼女になるんですか！

結局、学校の先輩・後輩で落ち着いたけど、私は後輩であり友達で

あり、先輩のスマホの中では嫁なので私の圧勝です。

折本かおりさんは、やはり先輩の中学の頃の同級生らしい。

んー、ただの同級生ならなんで先輩はあんな感じだったのかな。

折本さんは先輩のことをちゃんと「ヒキガヤ」って呼ぶし、ホントは普通にいい人なのかな。

先輩は中学時代の黒歴史がいっぱいあるみたいだし、それを知ってる人に会ったのが嫌だったのかな。

ここには、先輩と私で遊ぶことに（今日だけで）定評のあるはるさん先輩もいるし。

でも、先輩の名前をちゃんと呼ぶ人をいい人だとするなら、結衣先輩が極悪人になる気がする。

なんとって『ヒツキー』だもんね。

結衣先輩がそんなつもりないのは先輩に対する態度で分かるけど、知らない人が聞けば先輩は引きこもりだ（笑）

そんなバカな事を考えているうちに話は進み、話題ははるさん先輩の提案で先輩の昔の恋バナの話へ。

この流れはダメな気がするんだけど。

「あー、そういえば私、比企谷に告られたりしたんですよー。」  
はああああ!? マジで言ってるの!??

先輩は否定するのがめんどくさいのか何も言っていないから、設定では私彼女なんですけど?

普通過去のことだとしても、彼女（仮）の前でそういう事言う?

てゆーか、もしかしてこの人、先輩の黒歴史の一因だったりする?

話した事もないとか言ってるけど、先輩が会話もしないで勘違いとかするかな?

「へえ、比企谷君が告白ねえ〜。」

マズイ。あのはるさん先輩の目は、さっきまで私達で遊んでたときよりも、ヤバい気がする。

先輩も気まずそうに、昔のこととか言ってるけどその意図は折本さんには伝わっていないらしい。

その時のことを思い出しているのか先輩の表情が苦しそうで、今ま

で黙っていた自分に少し腹が立った。

「そう考えると、その時折本先輩が振ってくれて私はラッキーでしたねー！うまくいって今でも付き合っていたりしたら、わたしは大好きなせんぱいの隣にいれないって事ですもんね！よかったですねー、せんぱい？」

先輩は顔をあげて、こつちを見てくれた。

先輩がさっきまでどんな事を考えていたのか分からないけど、きよとんとした先輩に、苦しそうな感じはもうなかった。

そんな先輩の顔を見て、私も自然と微笑む。

「……そうだな。…ありがとな。」

えへへ。先輩の優しい顔は、今日の屋上以来見れてなかったからラッキーですねー♪

はるさん先輩が、すごい冷めた目で「ふくん。」とか言ってるけど、怖いので無視しましょう。

「折本先輩。折角話してくれるのはありがたいんですけど、せんぱいにとつては、少し辛い思い出だったみたいなので、その話は終わりにしてもらえませんか？」

ここで大事なのは、葉山先輩達の時のように、怒って感情的にならないようにすること。

それをまた繰り返せば、結局先輩に迷惑をかけて、また先輩に謝らせてしまうことになる。

へっへーん、私も少しは成長するのです！

「あ、あーごめんねー。私たまに空気読めなくてさー。あ、そうだ。じゃあ、葉山君って知ってる？」

もう。なんでこの人はピンポイントで地雷を踏んでくるんでしょうか。

先輩も今日のことがあるからか、また黙ってしまった。

「あーやつば知らない感じ？比企谷は接点なさそうだもんねー。いろはちゃんもあんまり接点ない？」

おー、まさかの距離感無視で、いろはちゃん呼びされるとは思ってた。



どうしよう、ここはなんて答えるべきなんだろう。

先輩は、知り合いじゃないとか言ってるし。

サッカー部のマネージャーです、なんて言っつて、紹介してくれなんて言われてもめんどくさいなあ。

「あーわたしはあの人のこと苦手なんであんまりですかねー。話したことくらいはあるんですけどねー。」

これが1番無難で、あとからめんどくさい事態にならない返答だと思うんだけど…。

「あーそうなんだ…。千佳、残念だったねー。この子も含めて紹介してほしいって子たくさんいるんだよー。」

そう言っつて、ようやくお友達を紹介すらしてない事に気付いた折本さんは、そのままその人を私達に紹介する。今さら!??

お友達の名前は、仲町千佳さんというらしい。

まあ2度と会う事もなさそうだし、会っても覚えてないだろうから別にいいや。

この人たちも、葉山先輩と接点ないと思われてる私のことなんて、全然興味ないだろうし。

この時、はるさん先輩が面白そうとか呟いたことを、私と先輩の耳はしっかりととらえていた。

「はーい、お姉さん紹介しちゃうぞー！」

そう言っつてそのまま携帯を取り出し、どこかに電話をかけ始めるはるさん先輩。

折本さん達もみんな戸惑ってるんですけど、まさかその相手って葉山先輩とかじゃないですよ？

「あ、隼人？今すぐ来れる？ていうか、来て。」

おーい、マジ何してんですか？はるさん先輩。

先輩も全く同じ意見だったらしく、そのままはるさん先輩をあんた呼びました。

先輩、はるさん先輩にあんたとか言ったら、そのまま東京湾でサメのエサになりますって…。

とりあえず、ここは戦略的撤退といきましょう。

「あ、はるさん先輩ー。わたしはあの人のこと苦手だし、先輩もあんまり接点あるわけじゃないんで、わたし達はこれで失礼しますねー。折本先輩達は楽しんでくださいーい。」

そう言っただけは立ち上がったものの、はるさん先輩からすぐに反撃をくらう。

「えー、いいじゃーん。一色ちゃんと比企谷君が帰っちゃったら、お姉さん寂しいな。ね、比企谷君は帰らないよねー?」

クツソー!この人ホントに帰らせる気ない。

というか、折本さん達に紹介っていうより、先輩と私で遊ぶために葉山先輩を呼んだって考えたほうが、まだ納得できる。

「あー、雪ノ下さん。一色が葉山のこと苦手なのはホントなんで今回は勘弁して下さい。それに俺らもただ遊びに来たってわけじゃないのは本当なんで。」

せ、せんぱーい!素敵です!愛してます!結婚しましょう!

て事ですんません、とか言いながら立ち上がって私の手を掴む先輩。

行くぞって言って、私を引っ張ってそのまま階段を降りて、ドーナツ屋を出る。

先輩、また手繋いでますけど、このまま夜の街を散歩してお泊まりとか言う展開になります?」

私が1人でかなり暴走をしていたら、店を出てすぐに手を離しやがった先輩。

「とりあえず今日はもう帰るか。あんまり遅くなってもお前が危ないし。送ってつたほうがいいか?」

「ふふっ。このくらいの時間なら大丈夫ですよ。駅からそのまま帰りますんで。今日は色々ありすぎてお互い疲れましたしね。せんぱいも早く帰ってゆつくり休んで下さい。」

話はまた今度なって言って、私の頭を撫でる先輩。

えーなんですかこれー、めっちゃときめいてるんですけど、どうすればいいですか?」

なんだかんだいって、先輩への思いが恋だと自覚してから初めて頭

を撫でてもらったけど、これまで以上に幸せ！

えへへー♪先輩は悪い男ですねー♪

駅までは先輩もついてきてくれると言ってくれて、2人で話しながら並んで歩く。

小町ちゃんとのケンカの原因は、修学旅行で何かあった事を目ざとく悟った小町ちゃんが、先輩に色々聞こうとして、その態度に先輩もウザいと言ってしまったことらしい。

今日の朝は、私にどう話すかを悩んでいたことも重なって、先輩もいつも通りの対応ができなかったみたい。

でも私に1度話したことで、小町ちゃんにも話す気にはなったらしく、帰って無視されなければ謝って話を聞いてもらうみたい。

がんばって下さいね、先輩。

駅の前で先輩と別れるときに、少し寂しくなって先輩のブレザーを掴むと先輩がまた頭を撫でてくれた。

「二色。さつきはありがとな。少し軽くなつたわ。お前は俺に遠慮してるのかもしれないが、困ったらちゃんと頼れ。俺ばかりお前に助けられても意味がないだろ。」

せんぱい…。

でも…、私は先輩の負担にはなりたくないです。

私のことで先輩が無駄に悩んだりするのは、私にとってすごく嫌なことなんです。

それに、私は先輩を少しでも助けてあげられたんだったらそれで充分なんです。

「はあ…。あのな、一色が俺に傷付いてほしくないとかよく言うだろう？それは俺も同じ気持ちなんだよ。なんて言ったらいいのかわからんが、そんな感じだ。」

せんぱい…、大好き。

その言葉が口から勝手に飛び出してしまっそうになる。

それくらい嬉しくて、胸があつたかくて、どうしようもなくなつた私は、言葉の変わりに先輩の胸に飛び込んだ。

先輩が想像通りに慌ててるけど、こうでもしないと今すぐ気持ちを伝えてしまいそうで。

伝えたくないわけじゃない、気持ちを先輩に知られたくないわけでもない、でも今は言えない。

今日の屋上で、色々な目標みたいなものを心に決めた。

でも今日の奉仕部を見てもう1つ思ったことがあって、私はあの2人には、先輩の近くにずっといてくれたあの2人だけには、ちゃんと向き合って勝ちたい。

今の奉仕部の状態で自分勝手には動きたくない。

勝ち負けじゃないのかもしれないけど、先輩の隣は渡しませんってちゃんと伝えたい。

修学旅行の真相を私しか知らない状態で、先輩に好意を持っている結衣先輩を出し抜くような事だけは、私はしたくない。

きっと結衣先輩も、先輩にこれ以上傷付いてほしくないって思ってるから。

雪ノ下先輩がどういう思いで、先輩のやり方が嫌いつて言ったのかは私には分からないけど。

もし雪ノ下先輩が先輩に対して好意を持っているなら、ちゃんとその思いを自覚して向き合ってほしい。

だからせめてそれまでは……。

「せんぱい。ありがとうございます。すごく嬉しいです。」

先輩に抱きついたまま、それだけを伝えてゆっくり離れる。

そのまま別れの挨拶だけをして、私は改札をくぐる。

少し遠くにいる先輩が、まだ私の事をしっかり見てくれているのに気付いて、先輩に向かって笑顔を見せた。

今日は厄日だっと思ってた。

色々な事が起きて、色々なことを思っ、なんて日だっ、何度も心の中で叫んだ。

でも、嫌なことばかりじゃなくて、嬉しい事もちゃんといっぱいあったから。

すぐに変わる自分の気持ちに不安になったりもしたけど、今日1日で大きくなった気持ちもあるから。

だから、明日からもがんばろう。

生徒会長のことも、私の事を笑ってる人達なんて無視して、ちゃんと1から考えてみよう。

めぐり先輩が言ってくれたみたいに、自分の気持ちをしっかり探してみよう。

明日からも良い日が続くといいな♪

## 14. 決意する後輩。

家に帰り着くまでの間も、帰り着いてからも、私はずっと生徒会選挙のことについて考えていた。

お風呂に入ってる間も、ご飯を食べている間も、自室に戻ってもその事が頭から離れない。

あそこまで話してくれたためぐり先輩、私と一緒にがんばりたいと言ってくれて、自分も立候補しようとしてくれていた藤沢さん。

嫌がらせも何もない状態で、2人から話を聞いていたとしたらどうだろうか。

うーん、それでも生徒会長っていうのは私には荷が重いし、学校をこういうふうにしたいとかっていう思いもない。

それに生徒会に入るなんて考え自体なかったからなあ。

私が今まで学校行事に関わったといえ、それこそ体育祭運営委員だけだ。

確かにあの時は、本番で自分が製作に携わった物が実際に使われているのを見て、嬉しくなったし満足感もあった。

でも、委員に先輩が関わっていなければ、私はあそこまでマジメに仕事してないと思う。

はるさん先輩が言ってたけど、生徒会長は地味で面倒らしい。

そう考えると、大きな行事以外にも地味な仕事だったり、面倒な仕事があるにしろ、それは嫌いだ。

先輩の事も関係ない地味で面倒な仕事を、私がマジメにやるとは思えないんだけどなあ…。

私が生徒会長になることで何かメリットがあるのかな…。

メリットがあるとすれば、めぐり先輩みたいに指定校推薦がもらえたり、もしかしたら就職のときなんか有利になるかもしれない。

今年から生徒会長をして、もし来年もそのまま生徒会長に就けば、おそらく内申はかなりよくなると思うし、2期連続で生徒会長なんて総武高校史上初めてだろう。

逆に学校的には、やる気のない生徒会長なんてデメリットしかないと思うし、他の生徒会のメンバーにとつても、そんな生徒会長なんて邪魔なだけだろう。

私だつてももしかしたらサッカー部のマネージャーはやめなさいといけないし、忙しい時は昼休みも仕事しないといけないかもしれない。

そうになると、先輩との時間まで奪われる。

うん。こう考えると絶対にやりたくないなあ…。

でも、今の状況は私がやりたくないと言つても、信任投票でそのまま生徒会長になつちゃうんだよねー。

「はあ。他に候補が見つからなかったらどうしよう…。」

でもなあ、先輩も言つてたけど、本当に生徒会長をやりたいたら今頃になって立候補してないなんておかしいし、雪ノ下先輩達が見つけてくれても、私に絶対に勝てる人じゃないと結局同じ。

自分でなんとかしようにも、今できることなんてこうやって考えることくらいだし。

「めぐり先輩も急がなくていいって言つてたし、ゆつくり考えよう。」  
少しだけ生徒会選挙の事は忘れて、先輩のことでも考えながら幸せな気分が寝よう。

そう思つて、今日の先輩との良かったことだけを思い出していたら、心も少し軽くなつていつの間にか寝てしまった。

あー携帯のアラームがうるさいし、お母さんが私を呼ぶ声も聞こえるし、せつかくいい夢見てたような気がするんだけどなあ…。

携帯に手を伸ばしてアラームを止めると、ラインの通知が来ていることに気付く。

もおー誰え？朝からめんどくさいなあ…。

『おはよーさん。小町と話せたわ』

せーんぱーい！

さつきまでめんどくさいとか思つてた自分なんて一瞬で忘れて、目もぼつちり覚めた。

それにしてもよかつたなあ。

先輩から話しかけても無視されるかもなんて言ってたし、先輩は小町ちゃんのことホントに好きだから、無事話せたみたいで私も嬉しい。

『おはよーごさいまーすーよかったですねせんぱい♪』

私も先輩にラインを返して、さつきから呼んでるお母さんに返事をして部屋を出る。

このまま学校でもいいことが続けばいいですね？先輩。

学校に向かっている間に結衣先輩から、今日も部室に来てっていう連絡があった事をのぞけば、いつも通りの通学だった。

でも教室に近付くにつれ、昨日と同じ不快な視線を送ってくる連中がいる。

平塚先生、指導するなら超本気で指導してくださいよ？

まあ、そんな視線1つ1つに反応してたって意味なんてないし、奴らの計画は狙い通りに進んでいる状況で、私が何かをしてもそれすら面白がるだけだろう。

教室について、ケバ子達からのムカつく視線も全て無視して、そのまま席についた。

そんな私を見て、ケバ子達がひそひそとムカつく顔で何かを言うけど、これも無視。

ムカつくけど、すっごいムカつくけど、今すぐ怒鳴ってやりたいけど、とりあえず無視。

ケバ子達の視線と態度によるストレスで、昼休みを迎えたころにはかなり疲れていた。

早く先輩のそこに行って少しでも癒されよ…。

そう思って教室から出た私を止めたのは、意外な人だった。

その人は、何も言わず私に近づいてきてそのまま教室の中まで戻されてしまった。

「いろは。あんた生徒会長になるってどーいう事だし。あーしあんたから何も聞いてないんだけど？」



そう、優美子先輩である。

確かに昨日、なんかあつたらすぐあーしのところに来いって言うてくれたけど、何で知ってるんでしょうか。

もしかして結衣先輩が相談でもしたんだろうか。

「あー、えーとなんといいいますか…。わたしも昨日優美子先輩と別れてから初めて知ったわけです…。」

ケバ子達がなんで？みたいな顔してるけど、私も同じ気持ちなんだけど。

「はあ？てことはなに？あんたになめたことしたバカがいるってわけ？どいつだし。あーしがしばくわ。」

「ちよ、ちよつと優美子先輩、しばくつて…。」

優美子先輩まで学校から処分されちゃいますよ。

あんな奴らのために優美子先輩に迷惑かけるわけにもいかないし、ここはとりあえず穏便に。

「まあまあ。ほつとけばいいですよ。優美子先輩が怒ってくれるだけで充分ですし。もう行きましよう？。」

優美子先輩の体を押しながら、とりあえず教室をでようとしたけど、また教室の入り口で止まってしまおう。

「あんたも甘いし。あんさあ、こいつになんかするならあーしを敵に回すつもりでしな。」

優美子先輩は全員に聞こえるようにそう言うのと、ようやく教室から一緒にでてくれた。

ケバ子達も怖かったんだろうけど、私も結構怖かったです。

先輩が優美子先輩の事を獄炎の女王とか言ってる意味がよく分かった気がします。

私がお礼を言うと、優美子先輩がなぜここに来たのか教えてくれた。

「ヒキオから聞いたし。朝あいつんところ行ったら、いろはがこれ以上余計なことされないようにつて頼まれたんよ。」

だから、お礼なら先輩に言え。そう言つて優美子先輩は歩いていってしまった。

でも途中で止まって、次はちゃんと相談しろって言ってくれた。なんなんですかねー、私の先輩達はみんなズルい…。

先輩はもちろん、優美子先輩なんて昨日までの印象最悪だったはずなのに。

なんでそんな後輩のためにここまでしてくれるんですか。

しかも、私も授業終わってすぐ教室でようとしたのに、それより早く1年の教室に来るって、私のためにどれだけ急いでくれたんですか。

遠くなる優美子先輩の背中にもう一度頭を下げて、私は先輩のところに急ぐ。

先輩にも、ちゃんとお礼を言わなきゃ。

「せんぱいー！」

いつも通りベストプレイスに座る先輩を見つけた瞬間、我慢できなくて叫んでしまった。

先輩が少しびびりくりして周囲を見渡してるけど、もうそんな事も気にならなかつた。

「せんぱい。優美子先輩から聞きました。正直びくりしたけど、ありがとうございました！」

先輩は、「なんでバラしてんだよ」とか言ってるけど、誰かが話さなきゃ優美子先輩がこんなに早く知るわけないでしょ！

そうなるかと結衣先輩か先輩しかいないんだから、結局すぐばれますって。

「とりあえず釘を刺した程度だ。短期間でまた何かされてもムカつくし。三浦もそれ聞いてかなり怒ってくれてたからな。」

そのあと先輩は、勝手に話したことを謝ってくれて、俺自身はなんにもしてないって言ってたけど、私のためにしてくれたことが本当に嬉しかった。

先輩はお願いしたというより、変な事されてなければいいけどって言っただけらしい。

それを聞いた優美子先輩が、あーしが行くわって言うてくれたみたい。

先輩もこんな早く動くとおもってなかったみたい。

その後、昨日考え込んでいた理由を先輩が話してくれた。

雪ノ下先輩が、同じやり方をとる必要はないって言ったらしく、部活も自由参加になったって。

しかも、先輩が部室をでるときに、馴れ合いなんてみたいいな事も言われたと。

1つ目は確実に修学旅行のことが尾を引いてると思うんだけど。

うーん、結衣先輩のことがあるのは分かるけど、なんで先輩は修学旅行のことを話さないんだろ…。

先輩が話さなくても、優美子先輩はグループで話すって言ってたんだから、結衣先輩が知るのも時間の問題なのに。

「せんぱい。それって確実に修学旅行の件が尾を引いてますよね？どうして話さないんですか？私にも話してくれたのに。」

「今さら話したってただの言い訳だろ。それに理由があったにせよ、俺がやったことは変わらないし、なくなるわけじゃない。あいつらだってそうだろ。」

確かに結衣先輩達が嫌だと思ったその時の気持ちが変わるわけじゃないし、なくなるわけじゃない。

でも、知らなければずっとそのままだと思う。

私だって、先輩が海老名先輩に告白をしたって聞いた時の気持ちが変わらなかったわけじゃない。

今は事実を知ったからこそ、本当じゃなくて良かったって思えるだけ。

私だって先輩が話してくれなければ、ずっと海老名先輩のことを好きだって勘違いしてたし、邪魔になると思って先輩から距離を置いたかもしれない。

先輩が話さなきや、結衣先輩達もずっと先輩の気持ち分かんないままじゃん。

「せんぱい。確かになくならないかもしれないけど、知らないままはもっと辛いと思うんです。わたしだってせんぱいが話してくれなかつたら今ここにいなかったかもしれない。」

私がそう言うと、先輩は黙ってしまった。

私が口を出していい問題じゃないのかもしれないし、先輩が伝えても2人は怒ったままかもしれない。

なんで言ってくれなかつたんだ、なんで1人でしたんだって言われるかもしれない。

それでも……。

「あっー！」

そこまで考えて、私の中で1つの仮説が生まれた。

今回、雪ノ下先輩が別々の方法でやるって言ったのには、そういう意味も含まれてるのかもしれない。

全てを分かっているわけじゃないけど、何かしら理由があつて先輩があんなことをしたのをちゃんと分かっている。

分かっているからこそ、先輩がなにも相談してくれずに1人でやってしまうなら、馴れ合わずに別々でやればいいと。

そんなやり方には協力しないし、自分達も勝手にやるからって感じなのかな。

雪ノ下先輩が、嘘告白のあと先輩に言った「やり方が嫌い」という言葉には、先輩のやり方だけじゃなくて、なんでも1人でやってしまう事も含まれてるんじゃないかな。

もしこの仮説が合ってるなら、やっぱり先輩はちゃんと話すべきだと思う。

特に結衣先輩は、見たくないものを目の前で見せられたわけだし、その理由を知るべきだと思う。

私も昨日は、これ以上結衣先輩に傷付いて欲しくなくて、嘘を言って遠ざけたけどそれは間違いだったのかも。

結衣先輩が傷付いたとしても、悲しんだとしても、ちゃんと知らせるべきだったのかもしれない。

「せんぱい。放課後、遅れて部室にきてくれませんか。勝手に話したりはしないので。それは約束します。少し確かめたいことがあるんです。」

私が聞いたって、雪ノ下先輩が正直に話してくれるとは限らない

し、なんでお前が知ってるんだって言われるかもしれない。  
結衣先輩だって、関係ない私には言いたくないかもしれない。  
お前には関係ないから首突っ込んでくるなって思われるかもしれない。

でも、このまま3人別々でやってたら奉仕部が崩れてしまう気がする。

それに、少ししか知らないけど、私が見た奉仕部は馴れ合いなんかじゃなかったと思う。

だから、雪ノ下先輩と結衣先輩のホントの気持ちが知りたい。

ホントにずっと別々でやっていって、先輩がいなくなっても2人は平気なのか。

まあ、いなくなるなんて先輩は一言も言っていないけど。

「ホントだな？あいつらに話したらさすがに俺も怒るぞ。」

大丈夫です。それは絶対に約束しますから。

それに、どんな理由があったのかは、ちゃんと先輩の口から伝えてほしいし。

「はい。20分くらいでいいので。お願いします！」

先輩は、渋々了承してくれた。

何度も、約束だからな、マジで頼むぞ、って言ってたけど。

よし！そうと決まれば、私自身、心の準備をしつかりしておかないかきや。

その後はご飯を食べて、少しだけ話したら昼休みは終わった。

教室に戻った私に、朝みたいに不快な視線はなくて、先輩と優美子先輩に心から感謝した。

あいつらにとっては、先生なんかより優美子先輩のほうがよっぽど怖いかもしれない。

クラスの男子達が、俺らも相談のるからとか言ってきたけど、あんたらこの前は何も言わなかったじゃん。

だから、「大丈夫。少し考えたいことがあるから」と適当に流した。

今はあんた達に構ってる余裕なんて一切ないから。

放課後までに色々と覚悟も決めないといけないし、どつ話すかとか

考えたい。

最近、授業マジメに受けてないなあ。

相手は、あの氷の女王・雪ノ下先輩と恋のライバル・結衣先輩。

こんな事するのが正しいかは分からないし、私の依頼のために動いてくれている2人には、ホントに失礼かもしれない。

もしかしたら、このせいで私の依頼なんて放棄されることになるかもしれない。

その時は、自業自得だと諦めて生徒会長になろう。

そうなつても私は2人の本音を知りたいし、今までの奉仕部に戻ってほしいと思う。

先輩は2人を信頼しているようにも見えたし、2人も先輩を信頼していたと思う。

だからこそ文化祭のときも、相模先輩を探しに行くのを先輩に任せただんだと思う。

運営委員のときも、3人ともすぐ真剣で一生懸命だった。

だからこそ、私なんかいなくてもって思ったし、羨ましいとも思った。

授業も終わり、私は奉仕部へ向かって歩く。

私の理想は、雪ノ下先輩の本心を聞いて、結衣先輩の気持ちを確かめて、その上でしっかり先輩と向き合ってもらって、私が見た元の奉仕部に戻ってもらうこと。

奉仕部のドアの前で1度大きく息を吐く。

怒られる覚悟も、ウザがられる覚悟も、最悪2人に嫌われる覚悟もできた。

そのせいで、生徒会長をやることになっても後悔しない。

ドアをノックして、雪ノ下先輩の声が聞こえて、ゆつくりと室内に入る。

おそらく私のために用意された椅子に腰掛けて、しっかりと2人を見据えた。

「昨日の依頼の話の前に、もう1つ依頼があります。少しだけ私と話

す時間をください。生徒会のごとは関係ありません。先輩と修学旅行についてです。受けていただけますか？」

2人は驚いた顔で私を見ていて、受けてもらえるかどうかは正直わからない。

「あなたたちは、私のために色々考えてくれているのに、本当にごめんください。」

「なぜあなたがその話をしたいのか、私には分からないし、それを私たちが話すことに意味があるとは思えないのだけれど。」

「逃げるんですか？そうやって子供みたいに拗ねたままですつといるつもりですか？」

雪ノ下先輩、本当にごめんください。

でも、あなたにはしつかりと向き合ってほしいんです。

私のワガママで、私の身勝手で、全て私の事情だとしても、先輩と向き合ってほしいんです。

「つ……。あなたに何が分かるの？その場で直接見たわけでもないのに、あなたに私達の気持ちなんて分からないわ。」

本当にその通りだと思う。

昨日も思ったけど、私がある場にいたらきつと泣き喚いただろうし、どれだけ傷付いたかも想像するのも嫌だ。

でも…、

「この際なのではつきり言っておきますね。特に結衣先輩はちゃんと聞いてほしいです。私は、比企谷八幡先輩のことが好きです。異性として。誰よりも好きです。」

ごめんください、結衣先輩。

本当に優しいあなたにそんな顔をさせて、本当にごめんください。

「目の前で見せられたお二人の気持ちを分かるなんて言いません。でも、お二人がこのまま先輩に何も伝えず、そうやって怒っているだけなら、先輩は私がいいます。ここには先輩をいさせません。生徒会長になって、生徒会に先輩を引き抜かせてもらいます。」

きつと、というか絶対そんなことにはならないけど、先輩がここを捨ててしまうことなんて絶対ないけど、お二人にしつかりと話して

もらうためにも、この嘘は有効だと思う。

「あたしは…、あたしはヤダー…このままヒツキーとお別れなんて絶対ヤダー！いくらいろはちゃんでもそんな事させない！」

私だってそんなつもりないので、そんなに心配しなくて大丈夫ですよ、結衣先輩。

結衣先輩の気持ちは聞けたし、あとは雪ノ下先輩。

「雪ノ下先輩はきつと分かってますよね？先輩があんな事したのはわけがあるって。ちゃんと知らない先輩が1番悪いです。でも、どうして聞いてあげないんですか？」

先輩が自分から伝えることはありえない。

伝えるつもりもないって先輩は言ってたし。

もしかしたら、伝えてそれでも否定されたらって、怖い気持ちもあるのかもしれない。

雪ノ下先輩達が、気づかなかった自分達を責めてしまうかもっていう気持ちもあるのかもしれない。

「それは…。」

もう一押しだと思う。

もう何度思ったか分からないけど、雪ノ下先輩達には本当に悪い事をしてる。

「嫌でしたか？相談してほしかったですか？そんな事を思う自分が許せないから馴れ合いだって切り捨てるんですか？それは結局また先輩に同じ事をさせるだけなんじゃないですか？」

私は、奉仕部の関係を馴れ合いだなんて思わないし、そんな風に思ってほしくない。

あなた達がこれまでを否定したら、羨ましいとか思った私はどうなるんですか？

運営委員で、先輩がすごく信頼してる感じで雪ノ下先輩を見たとき、私なんていらなんて思ってた私がバカみたいじゃないですか。

「……。一色さん、あなたの言う通りかもしれない。彼が理由もなくそんな事しないのは分かってた。でも…。」

それから、雪ノ下先輩はゆっくりだけど、全て話してくれた。



彼の告白を見たとき、なぜか胸が痛くて、苦しくて、どうしても受け入れられなかった。

理由があつたのなら、どうして話してくれなかったのか、どうして相談してくれなかったのか、どうして頼ってくれなかったのか。

彼と私のなかで、唯一同じだと思つていたものも、否定されたような気がした。

彼を信じて任せたくせに、そんな事を思っている自分が嫌で、そんな自分も、そんな事をした比企谷君も認めたくなくて、だったらもう一緒にやる必要はないと思つた。

馴れ合いだつたと思つてしまえば、比企谷君に対して勝手な期待を押し付けたりしなくてすむと思つた。

それなのに、未だに彼から歩み寄ってくれるんじゃないかつて期待してしまふ私がいる。

私と由比ヶ浜さんの気持ちを汲んで、歩み寄つて欲しいと思つてしまふ私がいる。

こんなに勝手で、弱くなつた自分が嫌で仕方がない。  
最後まで雪ノ下先輩はしっかりと話してくれた。

正直な気持ちを、素直に打ち明けてくれた。  
きつとそれは、雪ノ下先輩にとつてすごく辛いことで、嫌なことだつたと思う。

「ありがとうございます、雪ノ下先輩。結衣先輩はどうですか？やっぱり先輩のこと許せませんか？」

答えはわかっているんだけど、どうしてももう一度言ってもらわなきゃいけない。

「あたしも自分勝手だったの。自分の気持ちも伝えなくせにヒツキーには、人の気持ち考えろなんて言っちゃった。だからね、あたしはヒツキーに謝りたい。」

結衣先輩が先輩に対して、そう思うことも言つてしまうことも私は何一つ間違つてないと思ひます。

結衣先輩、素直に気持ちを教えてくれてありがとうございます。

「雪ノ下先輩、結衣先輩。失礼なことばかり言つて本当にごめんな

さい。：先輩！あとはあなた次第です。お二人にここまで言わせてそのままなんてことはないですよ？」

途中から扉の前で動けずにいる先輩がいることに私は気付いていた。

私は入り口に近づき、扉を開けて先輩を室内に引きずりこんだ。

ちゃんと向き合って、ちゃんと話してください。

2人ともすぐくびくびくりした顔で先輩を見てる。

「あとは3人でどうぞ。わたしの依頼はどうにでもなりますから。早く私の見てきた奉仕部に戻ってくださいね！」

これでいい。3人がちゃんと向き合うためには私は邪魔になるだろうし。

私の気持ちもしつかり2人に伝えたいし、失礼な態度で生意気なことばかり言った私は、もうここに居るべきじゃない。

先輩を離して、優しく先輩の背中を押して、そのまま出口に向かう。

これで先輩の居場所は壊れないと思うし、もう先輩も逃がしてもらえないだろう。

それなのに、私の理想通りのはずなのに、なんでこんなに苦しいのかなあ…。

ここは私の居場所でもないのに、どうしてこんなに疎外感を感じるんだろう。

ホント、ワガママで自分勝手で…

「待ちなさい！私達のためにここまでしておいて、今度はあなたが逃げるつもり？比企谷君みたいな事言っただけで座りなさい。」

「そうだよ！ヒツキーみたいだよ？いろはちゃん！ほらあたしいろはちゃんにもお礼言いたいから早く！」

やめてよ…。私はここにはいけない、いたらいけないです。

どうしてあんな失礼な態度しかとらなかつた私を引きとめようとするんですか。

どうしてこんな私にお礼を言いたいなんて言えるんですか。

「そうだな。後は俺に押し付けて逃げようなんて許さん。あと、お前から俺みたいとか言うな。俺はもっとうまく逃げる。」

そのまま、先輩に手を掴まれて座らされてしまった。

手を掴む時に先輩が小さな声で、「ぷっちやけ怖いからいてくれ」とか言うから、少し笑ってしまった。

ふふっ。しようがない先輩ですねー、ホントに。

確かに全部聞いたあとの雪ノ下先輩とか、想像しただけで震えるくらいには怖い。

「先に言っとくぞ。まあ、その、俺のやったことでお前らに嫌な思いさせて悪かった。ただ、由比ヶ浜にとっては嫌な話になるかもしれない。それでも本当に知りたいか？」

結衣先輩は、先輩があんな事した理由が自分のいるグループを壊さないため、それは依頼のようなものだったって知る事になる…。

先輩はあの人達のためじゃないって言っても、そうとしか思えないだろうし。

「うん。ちゃんと知りたい。ヒツキーがなんであんな事したのか。どんな事を思ってたのか。あたしにも教えてほしい。」

本当に結衣先輩は真つ直ぐで素敵な人だと思う。

それに私が全部知ってる事も分かっていて、その事で先輩のことも、私のことも責めたりしない。

そういう事言われるのも覚悟してきたのに、この人達はそんな事全然言わなかった。

「1つ約束してほしい。俺の話聞いても、誰かを責めたりしないでほしい。大丈夫だと思うが、どっかのバカが前科持ちでな。」

うぐ…。それを今ここで言いますか？先輩。

先輩に謝らせたことと、優美子先輩に言われた事はちゃんと反省していますー。

それ以外は私は悪くないと思うし、優美子先輩だって分かってくれましたしー。

「だったらそんな前置きは不要よ。誰かさんがしっかり怒ってくれたのでしょうか？」

そう言つて、雪ノ下先輩が優しい顔で私を見てくるので、慌てて顔を伏せる。

私じゃないかもしれないじゃないですか！そんな決め付けはいけないと思います！

結衣先輩までこっちを見なくていいですから、先輩をしつかり見つけててください。

「お前が一番怖いんだけどな…。」

そうですねよー！むしろ葉山先輩達は、私だったことに感謝したほうがいいと思います。

雪ノ下先輩が最初に知ってたら、再起不能になるくらい言われてたと思います。

まあ、先輩のことをちゃんと理解してる雪ノ下先輩だからこそ、私と違ってそんなことはしないのかもしれないですけど。

「はあ。マジで頼むぞ。お前らが知らないとこだけ話すから、聞いたいことは後から聞いてくれ。」

先輩は、私にしてくれた話から戸部先輩のことか、奉仕部のことか抜いて、本当に簡単に説明してる。

ちよつと、先輩、雪ノ下先輩の纏う空気がヤバいです！

それに結衣先輩の顔がどんどん悲しそうな表情になっていく。

先輩が話し終わる頃には、結衣先輩はもう泣きそうになっていたし、雪ノ下先輩の表情は、どんな事を思っているのか分からない。

「1ついいかしら？どうしてあなたがそんな上辺だけのものを守るようなことをしたの？私にとっても、あなたにとっても、そんなものの意味なんてないと思っただけでしょう？」

「確かにそうだ。あいつらの関係もそれで壊れるならその程度だろうと思った。お前達とのことも、これで壊れるならしようがないと思っただけだし、いつか壊れるものが早くなっただけだと思っただ。」

そんな…。本当にそんなこと思ってるんですか？

本当にこれで壊れても、先輩は後悔なんてしないんですか？

「だったら…。そう思っていたならなぜ？」

「それでも、あいつの、あいつらの気持ちを、失ったものは元には戻らないっていう思いを、失いたくないっていう思いを、俺は否定できなかった。」

先輩も失いたくないって思えるものがあるってことですよね。  
それはこの奉仕部のことじゃないんですか？

私はこの前先輩が話してくれたときから、勝手にそうだと思つてたけど、違うんですか？

先輩にとつて、ここは大事な場所じゃないの？

「だから、葉山とは違つて何も持つてない俺にしかできないことだと思つた。俺には大事なものなんてないと思つてたから。何でも大事にして動けないあいつとは違ふと思つてた。」

雪ノ下先輩も結衣先輩も口をはさまずに先輩の言う事をちやんと聞いている。

ねえ、先輩。これだけ先輩の言う事を聞いて、理解しようと思つてくれている人達がいるんですよ？

本当に何も持つてないって、大事なものなんてないって思つてるなら、さすがに許せませんよ。

「でも、違つたんだ。盗み聞きになつちまつたけど、お前らの気持ちを聞いて嬉しかつたんだ。その、大事にしたいって思つた。」

それだけ言つて、先輩は俯いて黙つてしまつたけど、充分伝わつたと思いますよ。

言葉たらずなところが先輩らしくて、途中で終わつちやうところが先輩らしくて、だからこそきつと2人にも届いたと思います。

それから、結衣先輩が先輩に正直にその時思つた事を伝えて、謝つた。

雪ノ下先輩はずつと黙つていて、結衣先輩と先輩のやり取りをじつと見ていた。

やっぱり、私は余計な事をしたんだろうか。

「一色さん。あなたは何がしたかつたの？」

「雪ノ下先輩がどういう気持ちだつたのか知りたかつたんです。そして、先輩と向き合つてほしかつたんです。余計なお世話かもしれませんが、このまま奉仕部が壊れるのはイヤでした。」

これだけは、正直に答えないといけないと思つた。

確かにさつきはあんな風に言つてくれたけど、雪ノ下先輩からすれ

ば挑発みたいな感じで気持ちを探られて、それを先輩に聞かれて、いい気分なわけがない。

「そう。本当に余計なお世話ね。」  
っ……。

本当にごめんなさい。

こういう風に思われるのを覚悟してきたんだから、私がショックを受ける資格なんてないのに、想像以上にキツイ。

「それでもっと壊れたらどうするつもりだったのかしら。」

確かにそうかもしれない。そうなる可能性だつて充分あつたと思う。

だから先輩も結衣先輩も、雪ノ下先輩を止めようとしないでください。

これは私が、しつかりとそこまで考えなかつた私が、ちゃんと受け止めないといけないことだ。

「だから、次は最初から理由をちゃんと言いなさい。今回は私も意地を張つてしまつたけれど。」

「え？」

「そんな風に思つてくれるあなたに、あんな事何度も言いたくないもの。」

雪ノ下先輩が何を言つたのか、何度も何度も頭の中で繰り返してようやく理解した。

「ご、ごめんなさい。」

ちゃんと覚悟してたのに、結局私は泣いてしまつて、雪ノ下先輩がそれにビツクリして焦り出して。

先輩と結衣先輩が泣かしたーと言つて雪ノ下先輩で遊び始めた。

「ひ、比企谷君。あなたの後輩でしょう。慰めなさい。」

その雪ノ下先輩の言葉で、先輩が隣に来て頭を撫でてくれて、それを見た結衣先輩がズルいと叫んで。

そんな先輩達の雰囲気、私の知ってる奉仕部に戻つたみたいで、それが嬉しくてもっと泣いてしまった。

「比企谷君。そういう理由があつたにせよ、私はやっぱりあなたのや

り方を認めたくない。この前の件も、今回のあなたの案も結局あなただけが泥を被るようなやり方は、私は認めない。」

やっぱり雪ノ下先輩も先輩には傷付いてほしくないのかな。

「そうか…。」

「文化祭のときに何も言わなかったくせに、今更だと思われるかもしれないけれど、奉仕部は3人で奉仕部でしょう？あなただけが泥を被る必要なんてないじゃない。」

雪ノ下先輩…。

私は先輩のやり方を否定したくないけど、確かに奉仕部として受けた依頼で先輩だけが傷付いたりする方法は、他の2人からしたら嫌で当然かもしれない。

「昨日は馴れ合いだなんて言ってしまったけれど、私はあなた達とちゃんと話して、回避や解消ではなく解決に向かって行動したい。」

回避や解消、今回は、戸部先輩が告白することでグループが壊れるのを先輩のやり方で回避したって事かな。

そう考えると、私の依頼は回避も解消もできない気がするし、本当にめんどくさい依頼だよね…。

「…昨日の案はやらねえよ。一色の件は、生徒会選挙だけじゃなくて、その後の事も考えて動きたいんだ。結局こいつがまた嫌がらせされるなんて状況にはしたくない。」

先輩はその後の事まで考えてくれるんだ…。

今までの私の自業自得だから、先輩がそんなことまで頭を悩ませなくてもいいのに。

「そうなるよ、一色さん自身がうかつに手を出せないような存在になるしかないんじゃないかしら。」

いやいや、急に雪ノ下先輩や優美子先輩、葉山先輩みたいになれってことですよね？

私にはそんなことできないし、なりたくてもなれないですよ！

「だよな。あとは一色の努力次第にもなるが…。一色。本気で生徒会長がんばって見ないか？」

そういう事ですか…。

生徒会長になれば、ケバ子達も簡単に手出しできなくなるのかな？でも誰からも認められなければ、結局バカにされて、笑い者になっちゃうんじゃないかな…。

「正直わたしにできるとは思えないです。昨日も考えてみましたけど、やっぱり荷が重いというか…。ちゃんとできる自信がないです。」  
「まあそうだろうな。もしお前が生徒会長になるなら、俺も生徒会に入って全力でサポートしてやる。それでも自信ないか？」

先輩が生徒会に入ってサポート…？

はあ!? 聞き間違いですよ？ 何わけわかんない事言い出すんですか、この先輩は…。

「待ってよヒツキー…さつき大事にしたいって言ってくれたじゃん！奉仕部はどうでもいいの？」

そうですねよ！ここは先輩にとつて大事にしたい場所なんですよね？

先輩が私のために言ってくれてるのだとしても、それだけは認められません。

雪ノ下先輩も何か言ってやってくださいよー！なんでそんな冷静に黙ってるんですか！

「あー、違うんだ。奉仕部はやめない。むしろ、これも奉仕部としての行動と言ってもいい。あれだよ、魚の取り方を近くで教えるんだよ。」

雪ノ下先輩はなるほどか言ってるけど、それで本当にいいんですか？

それに元々私だけの問題なのに、先輩にそこまでしてもらうのはホントに心苦しい。

「じゃあヒツキーは、奉仕部と生徒会を両方ともやるってこと？いろいろはちゃんに奉仕部の部員として色々教えてあげるってこと？」

「まあ俺が教えてやれることなんてそんなになんないけどな。雪ノ下は部長だし、由比ヶ浜はアホだし、俺が一番適任じゃないか？」

結衣先輩は、アホってなんだし！って言ってるけど、先輩から色々話を聞いている私も否定できません。

でも、ホントにここまでしてもらっていいのかな？



「私が生徒会長になれば全て解決するのではなくて？」

ええー!?? それもそれでもものすごく申し訳ないんですけど…!

確かに雪ノ下先輩ならすごい生徒会長になるだろうけど、先輩の言うとおり雪ノ下先輩は部長だし…。

「悪いがそれは魚の取り方じゃないだろ。それにお前が生徒会長になれば、奉仕部はどうなる? アホケ浜と俺だぞ? どうかかなと思うか?」

なんでそんなにかならない方向に自信満々なんですか!

もう少し、かつこいい方向に自信もちましようよ…。先輩らしいけど…。

とりあえずこの、誰が生徒会にみたいな状況は止めないと。

「あ、あの! 私なんかのために奉仕部の誰かが、わざわざ生徒会に入る必要なんてないですよ! そこまで迷惑かけられません!」

「まず私なんかって考えを捨てろ。迷惑っていう考えもだ。奉仕部の理念に沿ってるだけだ。だから気にすんな。」

気にすんなって、気にするに決まってるでしょうが!

「正直に言えば、せんぱいが一緒にいてくれるならがんばれると思います。でも…。」

先輩はそんな考え捨てろって言うけど、やっぱり私なんかのために先輩に迷惑かけたくない。

生徒会の仕事が忙しければ、奉仕部に顔を出す回数も減っちゃやし、それでまた3人の間に何かあれば…。

「二色さん。あなたが納得できないのであれば、こちらから条件をつけるわ。比企谷君をサポートにつけるかわりに、自分の意思で、誰からも認められる生徒会長になりなさい。」

ちゃんと私の意思で生徒会長になって、みんなから認められるような生徒会長になる…。

本当にできるかな。本当に認めてもらえるかな。

「あなたが自ら変わって、生徒会長として、人間として成長する。そしてそれを比企谷君がサポートする。もしそうならば、奉仕部にとっても理想通りの結果になるわ。」

私だけじゃなく、先輩達にとってもそれが良いことになる。

でも、それで先輩との時間が減っちゃうんですよ？お二人は本当にいいんですか？

「あなたはきつとまた奉仕部の事を考えてくれてるのでしよう？そんなに心配だったらあなたも奉仕部に入ればいいじゃない。」

はい？雪ノ下先輩、私はサッカー部のマネージャーだし、さすがに生徒会長、マネージャー、奉仕部は無理ですよ。

「もちろんあなたがマネージャーをやっているのは体育祭のときから知っているわ。でもあの男に直接怒ったのでしよう？それがサッカー部にもし広まれば、あなたは相当いずらくなると思うわ。」

確かに相手はキャプテンだし、もしその事が広まれば、次はサッカー部の他のマネージャーから嫌がらせされるかもしれない。

他の部員達も態度が変わっちゃうかもしれないし。

それは分かるし、正直私なんかを雪ノ下先輩が奉仕部に誘ってくれるのは嬉しいけど…。

「そんな状況になってもあの男はおそらく何もできない。そんな所にあなたをおいておきたくない。あんな男には任せられないというのが本音よ。」

雪ノ下先輩は私の事を心配してくれてるだけじゃなくて、後輩としても大事に思ってくれてるのかな？

かなり個人的な好き嫌いも含まれてる気もするけど、ここまで言ってもらえるのは、正直嬉しい。

それに生徒会で先輩と一緒に、生徒会がない時は奉仕部でこの3人と一緒になになにそれ素敵。

んーでも…、

「すごく魅力的だしありがたいんですけど、他の先輩方にもお世話になったし、その事については少し考えさせて下さい。せんぱい、生徒会の件、ホントによろしいんですか？」

本当の本当に迷惑じゃないんですか？本当に無理してませんか？

「おう。雪ノ下と由比ヶ浜が賛成してくれるならだけだな。」

雪ノ下先輩は納得してる感じだけど、結衣先輩は嫌だと思う。

それだけ私という時間が増えて、先輩と結衣先輩が一緒にいる時間は減っちゃうんだから。

「むう。ゆきのんが賛成しちゃったら、あたし何も言えないし。ヒツキーはホントに奉仕部やめないよね？ヒマな時は来てくれるんだよね？」

「ああ。それに俺自身、生徒会で少しやりたい事もある。」

先輩が生徒会でやりたい事ってなんだろう。

はっ、まさか全ての自販機にマッ缶を入れるとか、昼休みのあとにお昼寝の時間を作るとかじゃないですよ？

そんな下らないこと、私が生徒会長として絶対にさせませんから。「お前らがどう思ってるか知らんが、今回の件は悪質すぎるだろ。イジメに近い行動。選挙の私物化。そんな奴らに指導だけって甘すぎると思わないか？」

雪ノ下先輩も結衣先輩もこの意見には同意らしく、2人とも確かにと行って頷いた。

まあ、イジメかどうかはともかく、生徒会選挙を嫌がらせに使うっていう意味では確かに甘いのかな。

「今後こんな事は絶対にさせない。今年こういう事があつた事が知れば、来年も起きるかもしれない。来年は小町もいるんだ。だから今のうちに変えられるものは変える。」

小町に限ってこんな事にはならないけど、って言葉で締めくくるのはいいですが、こんな事になってる後輩が隣にいるんですが…。

でも確かに今のままの選挙規約なら、こういう事が今後も起こつてもされた人は泣き寝入りするしかない。

それは今回された私も許せない。

「せんぱい！わたしもそれががんばります。今まで生徒会長になつてもやりたい事ないって思ってたけど、こんな事2度とないようにしたいです。文化祭後のせんぱいみたいな状況も許せないです。」

生徒会長になってやりたい事が見つかったし、変えたい事も見つかった。

めぐり先輩にも、選挙規約を変えることが可能なのかとか色々相談

してみよう。

「一色さん。そういう事なら私もいつでも協力するわ。私だって過去に何もなかったわけではないもの。」

「あたしも手伝う！あたしもちよつと前までのヒツキーの状況は嫌だった。何もできなかつたけど…。だから今度は私もがんばる！」

雪ノ下先輩は綺麗だし、頭もすごくいいらしいからやつかみとか酷かつたんだろうな。

やっぱり結衣先輩もそうですよね、先輩の状況こそイジメに近かつたはずなのに、学校は何もしなかつたし、知ってすらいないのかもされない。

「奉仕部の皆さん、さつきまでの依頼は取り消して、新たに依頼させて下さい。私は自分の意思で生徒会長になります。先輩はこんな私が一人前になれるように助けて下さい。雪ノ下先輩と結衣先輩もどうしようもない時は助けて下さい。お願いします！」

私は立ち上がって、3人に頭を下げて返事を待つ。

こんな依頼していいのか分からないけど、甘えてるのかもしれないけど、ちゃんと口に出してお願いしたかった。

「2人とも聞くまでもないわね。一色さん。奉仕部としても、先輩としてもあなたを精一杯サポートするわ。無理せず、遠慮せずに頼ること。いいわね？」

「はいっ！ありがとうございます！よろしくお願いします！」

私はもう一度しっかりと3人に頭を下げた。

自分の意思で生徒会長になって、この人達が私に生徒会長を薦めたことを誇れるような人間になろう。

3人が卒業するとき、生徒会長が私でよかつたって言うてもらえるようにがんばろう。

「まずは推薦人集めだな。嫌がらせの推薦人名簿なんざ捨てて、ちゃんとお前を推薦してくれる人を集めようぜ。」

確かに、ちゃんと私の意思で生徒会長になるんだから、あんな推薦人名簿はイヤだ。

私が生徒会長をやることに、ホントに賛成してくれる人から名前を

書いてもらいたい。

集め直すことに意味はないかもしれないけど、これが私の生徒会長への第一歩だ。

「はい！もう意味ないかもしれないけど、わたしもそうしたいです。ちやんと自分で集めたいです。あの、最初に3人に書いてほしいんですけど、いいですか？」

3人とも快く了承してくれたし、あとは優美子先輩とめぐり先輩にも絶対に書いてほしい。

藤沢さんは立候補するとして、書いてもらっていいんだろうか。

立候補する人は書きちゃいけないとかじゃなければ、藤沢さんにも絶対に書いてもらおう。

これから、演説の内容とか色々なきやいけないけど、目標のためにもがんばろう。

とらあえず、偉大な人の言葉を借りて、しっかりと自分の中でも決意表明しよう。

生徒会長に…、私はなる!!!